

静薬學友會報

静岡県立大学薬学部同窓会報
2020年（令和2年）No.88

特集 新型コロナウイルス感染症



暮れゆく富士山のシルエット 犬伏 式生(昭和39年卒)

わかくさ薬局グループ

「良き仕事は良き社員から、
良き社員は良き会社から」

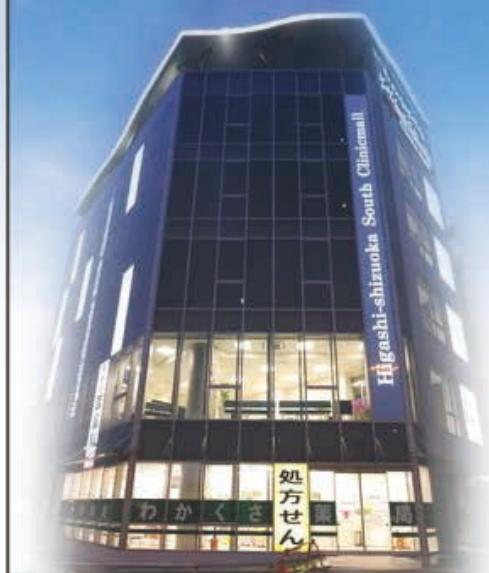
これを信念に、
わかくさ薬局グループでは社員教育に力を注いでいます。

それは職場だけにとどまらず、経験を活かし、己を高め、
自己研鑽が楽しくなるような場の提供をしています。

いつでも、高きを仰ぐ気持ちを忘れずに。
日々を過ごすことに誇りをもち、実践できるように。

わかくさ薬局グループ
代表 高橋 千恵子

つづきはWebで。
<http://www.stcy.co.jp>



県大卒業生も多数活躍中！

静岡で就職なら
メディスン

静岡市内に薬局 6 店舗
健康食品・OTC 専門店 1 店舗展開

静岡県立大学薬学部連携薬局

 株式会社 静岡メディスン

静岡市駿河区宮竹 1 丁目 4 番 5 号
TEL : 054-237-5316
E-mail : soumu@e-medicine.co.jp



静薬学友会報

2020 No.88

目次

静薬学友会会長挨拶	安倍道治	2
静薬学友会会長退任にあたって	横倉輝男	3
特集『新型コロナウイルス感染症』		
新型コロナウイルス感染症とスペインインフルエンザ	鈴木隆	6
新型コロナ禍における薬学部の様子	浅井知浩	7
薬局薬剤師が対応している事	秋山欣三	8
医薬品の安定供給	大澤勝一	9
当院でのCOVID-19対策と薬剤師	渡邊学	10
コロナ禍でのニュージーランドへの留学	鈴木美希	11
第2回静薬学友会賞受賞にあたり		
薬剤アレルギー研究の推進と医薬品安全性学の構築に向けて	宇野勝次	12
薬事関係事業における発展向上への貢献について	曾布川和則	14
地区同窓会だより		
北海道／長野県／関東／東海／関西／中国／九州・沖縄		15
会員だより		
昭和37年卒（六回生）同期会	河村信弘	21
静薬10期生同期会開催報告（S41卒）	森田俊夫	22
卒後50年目の同窓会を京都で（S44卒）	鈴木勝雄	23
静薬・湯けむり熱海温泉ツアー（S49入学）	木下俊也	24
俳句に寄せて	河村信弘	25
大学だより		
退職に際して	今井康之	26
新任教授	梅本英司	27

新任挨拶	金沢貴憲	菅野裕一朗	28
	岸本真治	宋復燃	29
		照喜名孝之	30
薬学部教員の人事異動			30
研究室だより	生化学	衛生分子毒性学	31
	薬理学	医薬生命化学	32
	身体運動科学	生体機能分子分析学	33
	医薬品製造化学	薬剤学	34
	臨床薬剤学	創剤科学	35
	分子病態学	生体情報分子解析学	36
	臨床薬効解析学	医薬品情報解析学	37
	実践薬学	医薬品化学	38
	生命物理化学	医薬品創製化学	39
	統合生理学	免疫微生物学	40
	創薬探索センター	薬学キャリアデザイン近藤寄附講座	41
	科学英語		42
薬学部教室名および教員一覧			43
成績優秀者賞・岩崎賞の受賞	山崎美佳	田平浩祐	44
	井田涼太	渡邊直也	45
鈴木隆先生、武田厚司先生、並木徳之先生最終講義のご案内			46
薬学生涯研修講座報告	渡邊学		47
本部だより			
理事会報告・総会報告			48
会計報告			52
静薬学友会代議員・役員一覧			54
編集後記	伊藤由彦		55
計報	中野真汎	富田多嘉子	55
静薬学友会報への広告掲載について			56
正会員の皆様へ 会費納入のお願い			57
令和元年度会費納入者一覧			58
ホームページをご活用ください			

「ふるさと」は遠きにありて思うもの」

退任された横倉学友会前会長の「富士山をテーマにしては…」との依頼で、テーマを納得のいくまで追いかけて撮影することもなく日常生活の中で、ふと、こころの琴線に触れるものにレンズを向けて撮った中から使っていただきました。静岡市からの絵はがきのような日本平や三保の松原からの富士山は、ほとんどの会員の方の思い出の中に鮮明にあるものと思いますが、賤機山や八幡山城趾からの富士山を眺めた方は少ないのではないのでしょうか。大阪の知人が上京するとき富士山が見えないと「寂しい。残念。」と言っている姿を幾度も見えています。会員の皆さんにはそれぞれの思い出の中に大切にしている富士山があることと思います。私は四季に刻一刻と変化してゆく富士山が大好きです。

地球温暖化の影響か、近年の気候は大型台風や豪雨が著明になり会員の方だけでなく関係者にも被災がないことを念ずるとともに今後の大干ばつなどを危惧しています。

（津波や直下型地震、そして無視できない富士山の大噴火も…）
ニュースで災害が報じられる中にあるさとの名を見出すときには、その地をはなれて幾年月が経っていてもここが萎えるのを感じ、続いて緑の山並み、町角にある友達の店先の商品の数々、腕白仲間の呼び掛け合う声さえ鮮明に思い出されます。私の第二のふるさと静岡は、ほぼ毎朝投げつりをした大谷海岸、バイト帰りの独りだけの最終バスで通った道、そして薬大は深夜の守衛さんの足音、生化学教室の友人の研究室の音。学校も様変わりし、大谷海岸も侘しくなろうともやはり懐かしいふるさとです。（完）

（写真は太晦日、「暮れゆく富士山のシルエット」。きつと霊峰富士は「新年はよい年になるよ」と微笑みかけている。）

犬伏式生（昭和39年卒）

静薬学友会会長挨拶



就任にあたって

一般社団法人静薬学友会 会長 静岡県立大学客員教授 安倍道治

(昭和46年卒 衛生化学教室出身)

会員の皆様には、日頃より静薬学友会の活動に対しご支援を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、私は、6月の理事会において信任をいただき、会長の職をお引き受けすることとしました。副会長に選任された高橋千恵子様と前薬学部長の賀川義之様とともに会の発展に努力する所存ですので、どうぞよろしく願っています。

前任の横倉会長におかれましては、8年の在位期間において百周年記念事業や学友会の法人化など多くのすばらしい業績を残されました。あらためて同氏のご功績に対してこの場を借りて敬意と感謝の意を表します。

ご案内のとおり、静薬学友会は、静岡県立大学創立百周年を機に2018年4月に一般社団法人として再スタートし3年目を迎えました。

新たに法人化した同窓会は、社員総会を最高意思決定機関とし、各地区の同窓会から推薦いただいた卒業生30名と薬学部から推薦いただいた在校生7名の計37名の代議員により構成される

仕組みと変わりました。とりわけ、現役の学生の声も反映できるよう在校生を代議員としたことに特徴があります。一方、業務執行機関である理事会は、これまで25名の理事と2名の監事で構成されていましたが、組織のスリム化を考慮して理事は19名となりました。

このように静薬学友会の組織は任意団体から法人化した団体となり、社会的なステータスが大幅に改善されました。しかしながら、会の運営は会員からの善意からなる年会費で賄っていますが、これまで諸先輩たちの努力にもかかわらず、納入率が20%にとどまっていることから、なかなか厳しいものがあります。

幸い、法人化の動きに前後して、同期の近藤隆さんから、育ててくれた大学に恩返しをしたいとの申し出があり、多額の寄附をいただけることになりましたので、これを近藤基金として、当面、新たな活動を行う原資とさせていただきます。

この基金を活用して最初に手がけたのは、寄附講座の設立であります。昨

年より学生支援のため、本学を卒業した先輩諸氏を講師とする寄附講座(正式名、薬学キャリアデザイン近藤寄附講座)の開設を行い、1978年卒で客員教授である木下俊也さんがその運営管理を担っています。

本講座設立の目的は、未来を嘱望されている学生に対し、各界で活躍している卒業生を講師として招き、経験談を含めた生きた薬学を話していただくことにあります。このことにより、学生たちが薬学とは何かを分かりやすく理解できるようになるとともに、将来の職業選択をより身近に感じていただくことを期待しています。本寄附講座に加え今後は、学生が大学外部との交流の機会を持てるよう、国内外研修制度も開始したいと考えています。これらの学生支援を通じて、他の薬学部との差別化にもつなげていけたらと思っています。

このように、当面は当基金を活用して新たな事業展開をはかることはできますが、将来に向け安定した運営を確保するためには、年会費の納入率の改

善はもとより、卒業生などが寄附しやすい環境づくりも合わせて検討していきたいと考えています。

また、将来は、法人化した利点を生かし、新たに収益が得られる事業の展開についてもチャレンジしていければと考えています。新たな事業については、まだ、具体化の段階には至っていませんが、薬学部の同窓会という特徴を生かし、地域の医療の発展や健康の増進に寄与することにより、薬学部の発展にも貢献できる、そのような新規事業が実現できればと思っています。

最後になりますが、コロナ禍という収束の目途が立たない状況下で、しばらくはこれまでとは違った理事会の運営が求められますが、理事一同、学友会と母校の発展に少しでも寄与できるよう努力いたしますので、会員の皆様におかれましては、学友会の活動に対して、なお一層のご理解とご支援、ご協力のほど宜しくお願いいたします。

静薬学友会会長退任にあたって



8年間のご支援に感謝

一般社団法人静薬学友会 前会長 横倉輝男

(昭和40年卒)

一般社団法人静薬学友会の会員の皆様、日頃は静薬学友会の活動にご理解とご支援を頂きまして誠にありがとうございます。

さて、私は平成24年5月より静薬学友会会長（代表理事）を務めさせて頂いてきましたが、この度理事の任期満了に伴い、会長を退任させて頂きました。この8年間を振り返りますと皆様のご支援により無事に会長を続けることができたと感じております。静薬学友会の役員（理事、監事）の皆様、県大薬学部の先生方、代議員の皆様、会員の皆様そして事務局の皆様、長い間のご支援、本当にありがとうございます。以下に8年間の静薬学友会活動の一部と私が感じたことを記します。

○静薬学友会の歴史

皆様は静薬学友会の歴史をご存知で

しょうか？静薬学友会は昭和29（1954）年に当時の静岡薬科大学学長の宮道悦男先生を会長として発足致しました。その後の静薬学友会の歩みについての記録をたどり、まとめた結果を次ページの別表に示しました。静薬学友会は発足以来今年で66年を迎え、これまでの会員数は延べ9200名を超えました。（令和2年6月現在）

静薬学友会の運営は会員から納入される会費によって運営されています。会費は毎年納入して頂く方法と10年会費、終身会費としてまとめて納入して頂く方法も採用しています。

静薬学友会では役員として理事と監事が出席して年3回の理事会と代議員も出席する年1回の総会を開催し、その時々問題について議論し、活動を進めてきました。またすべての役員は理事会の下に設けられた総務、予算、

会報、学友会賞選考、薬学生涯研修、地区同窓会などのいずれかの委員会に属して活動して頂いてきました。（これまでの役員名および各委員会委員長は学友会報No.85に掲載）

○地区同窓会

静薬学友会には全国に11（北海道、東北、関東、長野県、静岡県、東海、北陸、関西、中国、四国、九州・沖縄）の地区同窓会があります。これは静薬学友会の法人化以前は「支部会」と称していた組織です。地区同窓会は静薬学友会の定款に掲げた目的に基づき、数年おきに各地区にて開催されています。静薬学友会の法人化に伴い、地区同窓会の代表者には代議員を兼ねて頂いてきました。

静薬学友会では地区同窓会の他にも地区に限定せずに開催される会員同士の「同窓会」、「同期会」、「同門会」、

「サークル会」などにも資金的な支援をしています。

○静薬学友会報

別表の静薬学友会年表でも示しており、静薬学友会報は昭和30年に創刊され、その後発行されない年もありましたが最近では原則として年に2回発行されてきました。しかし、従来の紙媒体での情報提供に代わるホームページの開設により情報交換がより迅速かつ活発に行われるようになったことから平成29年発行のNo.85から年1回の発行となりました。因みに最新の静薬学友会報（令和1年10月発行のNo.87）の発行部数は約6800でした。

○薬学生涯研修講座

薬学生涯研修講座では県大薬学部との共催で、毎年講座の対象を静薬学友会会員に限定せず、広く医事に従事されている方々に対して最新の医事情報

静 薬 学 友 会 年 表

年	学友会関連事項	学友会会長
大正 5 (1916)	静岡女子薬学校開学	
昭和20 (1945)	静岡女子薬学専門学校開学	
昭和25 (1950)	静岡薬学専門学校へ名称変更	
昭和27 (1952)	静岡県立静岡薬学専門学校へ名称変更	
昭和28 (1953)	静岡県立静岡薬科大学開学	
昭和29 (1954)	静薬同窓会発足、静薬同窓会誌発行	宮道悦男 昭和29 (1954) 年1～3月 鶴飼貞二 昭和29 (1954) 年4月～昭和40 (1965) 年
昭和30 (1955)	静薬学友会報創刊号発行	
		原田勇吉 昭和44 (1969) 年～昭和50 (1975) 年
昭和55 (1980)	同窓会名を静薬学友会に改称	横田芳久 昭和42 (1967) 年～昭和60 (1985) 年
昭和57 (1982)	静薬創立65年史刊行	
昭和62 (1987)	静岡薬科大学が静岡県立大学薬学部へ移行	鈴木健介 昭和60 (1985) 年～平成12 (2000) 年
平成 6 (1994)	静薬学友会事務局開設	
平成13 (2001)	静岡薬科大学跡地に記念碑建立 記念誌「薬学志の地」刊行	藤原伸司 平成12 (2000) 年～平成21 (2009) 年
平成16 (2004)	静薬創立88周年記念式典	
平成17 (2005)	静薬創立88周年記念誌刊行	
平成21 (2009)	静薬学友会ホームページ開設	若尾直司 平成21 (2009) 年～平成24 (2012) 年
平成28 (2016)	静薬創立100周年式典	横倉輝男 平成24 (2012) 年～令和2 (2020) 年
平成29 (2017)	静薬創立100周年記念誌刊行 静岡女子薬学校跡地に記念碑建立 薬学棟エントランスに岩崎照吉先生レリーフ設置	
平成30 (2018)	静薬学友会が一般社団法人へ移行	
		安倍道治 令和2 (2020) 年～

を提供し、地域医療の発展に資することを目的とした講座を公開しています。これまでに「薬剤師向けのフィジカルアセスメントの実習」、「これから期待される在宅薬剤業務」、「AI技術がもたらす医療制度改革と薬剤師の将来像」、「薬・薬連携のあり方」などをテーマについて実施されました。この講座の今後の更なる充実が期待されます。

○静薬創立100周年記念事業と「静薬学友会賞」

私の会長就任中の大きな事業のひとつとして平成28年に挙行された静薬創立100周年記念事業実行委員会主催による「静薬創立（静岡県立大学創基）100周年記念事業」を挙げることであります。

「静薬創立100周年記念事業」は平成28年7月16日に静岡県立大学大講堂での「記念講演会・シンポジウム」と翌7月17日のホテルセンチュリー静岡での「記念式典・祝賀会」で実施されました。（詳細は静薬学友会報No.84に掲載）

なお、静薬学友会では定款に示された会の目的の達成に貢献された個人または団体に対して授賞する「静薬学友会賞」を新設し、静薬創立100周年記念式典では「第1回静薬学友会賞」に選ばれた4名の受賞者に対しての授賞式も行われました。（詳細は学友会報No.84に掲載）

本年も「第2回静薬学友会賞」として2名の会員が受賞されました。

（詳細は静薬学友会報No.88に掲載）

○静薬学友会の一般社団法人への移行

静薬学友会では「任意団体の静薬学友会をより透明性の高い組織にする」ということが長年の念願でしたが、平成30年に多くの手続きを経て一般社団法人への移行がなされました。この移行に当たってはそれまでの「学友会会則」に代わる「定款」を制定し、その目的も「会員相互の親睦と学識及び職能の向上を図るとともに、静岡県立大学薬学部的发展並びに薬学・薬業の振興に貢献し、あわせて社会に寄与すること」としました（法人化についての詳細および定款全文は静薬学友会報No.86に掲載）。この法人の特徴としては主たるメンバーを代議員としたことにあります。代議員は現役学生を含め、全国各地の同窓会からその会員数に応じた人数で広い年代にわたって選ばれ、静薬学友会の最高決議機関であり、定例的に開催される静薬学友会総会に出席して静薬学友会の役員（理事および監事）の選考および会の運営についての議論に加わって頂いています。

（代議員名は学友会報No.87に掲載）

○寄附講座開設

ところで、静薬学友会では昭和46年に静岡薬科大学を卒業された近藤隆氏から、薬学部の学生の支援のためにという事で多額のご寄附を頂きました。

（詳細は静薬学友会報No.87に掲載）静薬学友会ではこのご寄附を「近藤基金」とし、まずその一部を活用して「キャリアデザイン近藤記念静薬学友会寄附講座」を開設しました。この講座は静薬卒業生による講義や学生の国内外への短期留学など、学生の支援に使わせて頂くよう県大薬学部の先生方の協力を得て行っています。今後はこの基金が更なる学生支援のために利用されることになると思います。学生諸君に多くのチャレンジのチャンスを与えてくださった近藤隆様にお礼を申し上げます。

○新入生オリエンテーションおよび進路相談会

近年喜ばしいことがあります。それは学生代議員とコラボレーターの諸君が、自主的に「新入生オリエンテーション」と「進路相談会」を企画し、静薬学友会と協力して実施してくれたことです。このイベントでは現役の学生が新入生に対して学生生活についてのアドバイスや静薬学友会の活動について紹介を行い、進路相談会では対象を卒業予定者に限らずすべての学年の学生とし、学生の相談相手には各界から静薬卒業生を招いて実施しました。これらのイベントは新入生にとっては不安を解消し、将来への希望を与えてくれるものであり、在校生にとっては将来の自分の進路を考えるのに大いに参考になるものと考えます。（詳細は

学友会報No.87、39ページに掲載）静薬学友会としては今後も学生諸君の積極的な静薬学友会の活用を望むものであります。

○新型コロナウイルス蔓延

令和2年になって新型コロナウイルスがパンデミックを引き起こしたことから静薬学友会史上初、理事会および総会を電磁的手法によって行わざるを得なくなりました。これらの会議は役員および代議員の皆様のご協力によって無事実施することができました。

一方、新型コロナウイルスの蔓延は大学における教育および研究に大きな変換を迫ることもなったことと推察されます。コロナ禍の一日も早い終息を願うばかりですが、今後新型コロナウイルスとの共生を強いられる可能性もあります。そのような場合には我々の生活にも改革が必要になることにならないでしょうか。

以上、8年間にわたり私が携わった静薬学友会の活動の一部と私の感じたことを記載させて頂きましたが、会員の皆様には今後も静薬学友会の目指す目的への更なるご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

最後に今後の会員皆様のご健勝とそれぞれのお立場での益々のご活躍を祈念申し上げます。

令和2年6月30日

特集

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症と

スペインインフルエンザ



静岡県立大学薬学部 生化学分野

教授 鈴木 隆

(昭和54年卒)

新型コロナウイルス（重症急性呼吸器症候群コロナウイルスの severe acute respiratory syndrome coronavirus 2: SARS-CoV-2）による感染拡大が続いている。全世界での感染者は1,800万人、死者は70万人を超えている（2020年8月6日現在）。この新たに出現したコロナウイルス（エマージングウイルス）による感染症（COVID-19）と1918年に出現し、世界的大流行（パンデミック）を引き起こしたスペインインフルエンザについて述べてみたい。

新型コロナウイルス（重症急性呼吸器症候群コロナウイルス）を持つウイルスであり、ウイルスゲノムは一本である。プラス鎖RNAゲノムは、宿主細胞の中でそのRNAがそのまま伝令RNAとして機能する特徴をもつ。

スペインインフルエンザは1918～1921年に世界人口の25～30%（WHO）が感染し、2000万人～1億人が死亡したと言われている。日本でも当時の総人口の42%にあたる2,380万人が感染し、約39万人（16%）が死亡している。スペインインフルエンザは、乳児や高齢者に加えて、10代から30代の若者が多く死亡しており、季節性のインフルエンザやCOVID-19と大きく異なる。一方、COVID-19では高齢なほど死亡率が高

い。COVID-19による日本での致死率は約4.3%（2020年7月16日現在）であるが、潜在的な感染者はかなり多いと推定されているため、実際の致死率はもっと低いであろう。

インフルエンザウイルスは、糖鎖末端のシアル酸を受容体として感染する。当時のスペインインフルエンザウイルスは現存していないため、東大医科学研究所の河岡義裕教授らのグループは、ウイルスの遺伝子情報からこのウイルスを人工的に作製し、我々と共同研究を実施した。その結果、スペインインフルエンザウイルスのスパイク糖タンパク質であるヘマグルチニンが、過剰免疫反応（サイトカインストーム）を引き起こすことが判明した（Nature, 431, 703-707, 2004）。一方、SARS-CoV-2は、アンジオテンシン変換酵素2（ACE2）を受容体として感染する。感染者の約80%は無症状か軽症で経過するが、約20%は重症肺炎となり、そのうち30%は致死的な急性呼吸促進症候群（ARDS）となる。ARDSはサイトカインストームに起因すると思われる。COVID-19では、インフルエンザほど強い免疫反応が誘導されないのかもしれない。また少し専門的になるが、免疫には異物の特徴に関係なく迅速に働くマクロファージなどの免疫細胞による自然免疫とウイルスなどの異物と接することにより獲得（記憶）され、同じ異物が再度侵入してきた際にその異物特異的なリンパ球が応

答する獲得免疫がある。近年、自然免疫にも記憶が存在することが報告された。SARS-CoV-2感染者の約80%は軽度だが、高齢者および併存症のある人の一部は重度の肺炎に進行する。この原因として、初期免疫が有効に機能していないと思われる。BCG、経口ポリオ、はしか等のワクチン接種により訓練免疫（Trained Immunity）された人では、病原体感染に応答する自然免疫細胞のエピゲノムの変化が持続し、転写および機能的リプログラミングにより、未経験な異物（SARS-CoV-2）にも素早く自然免疫が応答してウイルスを排除し、SARS-CoV-2による重症度（致死率）や感染性を軽減しているものと推測されている（Cell, 181, 1036-1045, 2020）。

紙面の関係で纏まりのない内容となったが、COVID-19を制圧するためワクチンの開発に加え、ウイルスの侵入、複製、増殖、拡散の過程を標的にした抗ウイルス薬やウイルスによる過剰な免疫反応を抑制する薬の迅速な創製に期待したい。



隆先生還暦祝い



新型コロナウイルス禍における薬学部の様子

静岡県立大学薬学部 医薬生命化学分野

教授 浅井 知 浩

(平成9年卒)

本稿では新型コロナウイルス禍における薬学部の様子をお伝えしたいと思います。新型コロナウイルス関連のニュースとともに時系列で振り返ります。国内初の感染者が確認されたのが1月16日、集団感染のクルーズ船が入港したのが2月3日、国内で初めて感染者が死亡したのが2月13日のことでした。薬学部においては1月下旬に学生の中国への研修旅行が中止になるなど、少しずつ影響が出始めました。1月下旬から2月中旬にかけての博士、修士、および卒業論文発表会は無事に開催できましたが、2月21日に日本薬学会第140年会(3月25〜28日)の中止が決まりました。この頃から学生、教員にとって重要なイベントが相次いで延期や中止になっていきます。今井康之先生の最終講義(2月29日)は延期となり、各研究室で計画していた送別謝恩会などは中止を余儀なくされました。またこの頃は卒業旅行を泣く泣くキャンセルした学生が多く、学生生活最後の思い出づくりに少なからず影響しました。

そして3月2日には、学位記授与式および送別謝恩会(ともに3月19日)の中止が発表されました。2月27日に政府が全国の小中高校に臨時休校を要請し、その直後に中止が決まりました。薬学部では各研究室において主任教授が学生に卒業証書を手渡し、手作り感のある小さな卒業式でお祝いしました。新型コロナウイルスが終息し、卒業生と心おきなく飲み語らせる日を待ち望んでいます。

新年度を迎えるとさらに怒涛の変化が訪れました。感染症対策ならびに予定の変更に伴う変更の日々に突入します。入学式(4月8日)の中止は3月に決まっていたましたが、4月に入ると全国的に感染が拡大し、大学のあらゆる活動の変更が余儀なくされます。政府は4月7日に7都府県に緊急事態宣言を発令し、16日に対象を全国に拡大しました。大学では対面でのガイダンスや講義が急遽中止になり、すべてを遠隔で行う方針になりました。この頃の現場は大混乱です。4月8日からは

学生の入構が原則禁止になり、当初予定より1週間遅れの4月17日から遠隔講義が始まりました。前期の学生実習は、そのほぼすべてを後期に移しました(一部の実習は前期にバーチャルで行いました)。学生の通信・PC環境を調査しながら、遠隔講義の方法を検討しました。経済的理由で学生がオンライン講義に対応できない場合があるため、その支援も重要な課題でした。履修登録、健康診断、教科書販売等も例年どおりとはいかず、4月は特別な対応の連続でした。新入生はキャンパスに通うこともできず、対面での講義・実習、部活・サークル活動がなく、同期に出会うことすら困難な状況が続きました。そこで薬学部ではZoomを利用して新入生の交流を促すなどしてきました。全国的な動きとしては5月25日に緊急事態宣言が解除され、6月19日に都道府県をまたぐ移動の自粛が全国で緩和されました。緩和を受けて、大学では対面での講義が一部解禁され、期末試験は対面で実施する方針

で準備を始めました。しかし、7月に入ると再び感染が拡大し、対面での期末試験は急遽中止となり、オンライン試験に変更するなどの対応に迫られました。「Withコロナ」と言われているなかで後期をどのように迎えるか、課題は山積しています。

研究室は入構制限が始まった4月8日から解除された6月8日まで事実上の閉鎖状態となり、研究活動に大きな支障が出ました。4年生が実験を始めたのは6月中旬からになります。当研究室ではいまだに歓迎会を開催できず、研究室旅行等の各種イベントはすべて自粛しています。5年生の病院薬局実習は一部予定変更があったものの無事に行うことができ、関係者の皆様には心より感謝しています。

今年度の学生は新型コロナウイルス禍により精神的および経済的な面で不安を抱え、先が見えないなかで疲弊しています。静薬学友会会員の皆様におかれましては、より一層のご支援ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



薬局薬剤師が対応している事

―(公社)静岡県薬剤師会・(一社)静岡市薬剤師会の対応―

厚生薬局(開設者) 秋 山 欣 三

(昭和56年卒)

静薬学友会理事の秋山です。今般の

新型コロナウイルスでは会員の皆様もいろいろな立場で大変な事になってい

ると思います。私は開局薬剤師として

店頭での毎日の応対を注意しなければ

ならず感染防止に気を遣う毎日です。

また、病院・診療所への受診抑制によ

る、処方箋の減少により支店も含め、

今後の経営に不安を抱いています。さ

らに静岡県薬剤師会担当副会長、静岡

市薬剤師会会長として会としての対応

もあり、あつという間に秋になってし

まいました。

武漢で発生した新型コロナウイルス

ですが正月には皆さんの中にも他人事

と思っていた方も多いと思います。2

月に入り、日本薬剤師会は18日の通知

で主催の会議は自粛しない、懇親会は

自粛する、としていましたが27日には

ほとんどの会議を中止すると通知され

ました。

薬局業務に関連する通知は2月25日

に国で「新型コロナウイルス感染症対

策の基本方針」が取りまとめられ、そ

の中に感染症患者の増加に際しての電

話や情報通信機器を用いた診療や処方

箋の取り扱いについて通知されました。

これはファクシミリ等による処方箋情

報の送付が考えられるので各薬局はそ

の真偽を確認するため、処方箋を発行

した医師が所属する医療機関に処方箋

の内容を確認する事を必須とする内容

でした。その後、感染が広まり、感染

患者が多くなり、また、感染はしてい

ないが、医療機関に受診することによ

り感染してしまうのではないかと直接

の受診をためらう患者さんのため、電

話再診を認める、いわゆる0410通

知が出されました。それにより薬局に

来局せずに薬を自宅に届けるまたは送

付する患者対応を各薬局が実施してい

ます。さらに数年後に予定していたオ

ンライン診療の前倒しが現実の事にな

り薬局も対応準備をしなければなりま

せん。かかりつけ薬剤師・薬局を現在

進めています。が、薬局が生き残れるた

めには居宅サービスを含め、患者さん

に頼りにされる事が一番だと思います。

静岡県薬剤師会では新型コロナウイ

ルス感染症対策本部を3月に立ち上げ、

地域薬剤師会への情報提供や各種アン

ケートの依頼をお願いしています。ア

ンケートの一つは医療機関への受診抑

制に伴い、薬局での減収の影響を全会

員薬局へ問いました。2月から6月の

処方箋枚数、件数および総点数の前年

比を答えてもらったところ、徐々に5

月まで減り、処方箋枚数は平均で15%

減、中でも40%減の薬局も散見されま

した。経営が苦しい薬局が多い事がわ

かりました。この集計結果は行政、国
会議員に伝えました。

また、一般社会でも目の前から消え

た、マスク、アルコール消毒液につい

て会員薬局に状況調査を行い、静岡県

の予算で国から支給されたマスク等を

5月、6月に各薬局に地域薬剤師会を

通じ、配布しました。

さらに薬局が関係している大事な事

業として、薬局実務実習があります。

3月には学生に薬学教育・研究セン

ター長の賀川義之教授から予定通り実

習を実施するにあたりいくつかの注意

事項が示され、各受入薬局も対応して

います。

新型コロナウイルス感染症が収束す

る事はまだまだ先と思います。国や県

の方針も変化すると思いますが、医療

人として各役割を考えて実践していく

事が大切だと思います。

医薬品の安定供給

大正製薬ホールディング(株) 取締役 大澤 勝一
(昭和59年卒)

「製薬企業勤務の卒業生」という立場で記載する機会を頂きました。そこで生活者が「新型コロナウイルス感染症」について製薬企業に求める主なニーズは以下2点と考え、①については度々報道されておりますので、余り報道がされていない②について記載します。

- ① 国民が待ち望んでいる予防薬&治療薬の開発
- ② 国民の健康維持に必要な医薬品の安定供給

医薬品は、多くの患者の健康維持に必須なものであり、医療関係者、患者の手に安定して供給されることが極めて重要になります。その為、製薬企業は医薬品の原材料調達、生産・出荷プロセスに細心の注意を払い、製品の安定供給に努めております。

しかし、新型コロナウイルス感染症により一

部製薬企業では原材料確保が難しい事態に陥り、かなりの製品（主にジェネリック品や長期収載品等）で欠品・品薄状態が起きました。

当社では、日頃より災害発生を想定した事業継続計画（BCP）を作成し、緊急事態時の「医薬品の安定供給及び品質管理」対応を準備しておりました。幸いにも今回は欠品・品薄という事態は回避できております。

以下に一番苦労した原材料調達について記載します。

医薬品は法律上、品質、有効性及び安全性の確保が必須であり、生産・販売するためには、厚生労働大臣の審査を受けて製造販売の承認、製造販売業許可及び製造業許可を受けなければならぬ仕組みになっております。

承認・許可を取得するためには、生産に必要な原薬の詳細な製法や厳格な品質基準・試験方法等が定められており、原材料の品質管理方法や原料購入

先を急に変更することは難しくなっております。

当社では対策として、原料購入先が1ヶ所ダメになってもサポートできるように複数ルートかつ地域的に離れた企業からの購入を進めておりました。また東日本大震災を教訓に、停電で原材料があっても生産できなかった場合のリスク対策として完成製品の在庫を増やしたり、業務継続できるように非常時電源を設置したりしておりました。こうした対策は、今回の新型コロナウイルス感染症においても欠品・品薄防止としては効果がありました。

一方想定外だったことは、新型コロナウイルス感染症の拡大規模と感染力（スピードの速さ）の強さです。全世界がほぼ同時にわずか1〜2ヶ月のうちに重大な局面にあつたという間に移行してしまいました。原材料を製造していた各国は、医療崩壊（死亡者増加）を危惧して主要都市をロックダウンし人・車両等の移動を禁止しました。その結果、

生産も物流も動かなくなりました（期間は国によって異なります）。また国によっては国策で原材料を自国民用医薬品生産に使用するために他国への輸出を禁止するという強硬手段が取られました。地域的に離れていた複数企業が同時に原材料供給できない状況が発生しました。こういう局面で頼りたい国内企業は、コスト面から複数の原材料生産から既に撤退しており、残念ながら国内企業への代替は期待できない状況でした。また、新しい海外原材料企業を設定しようとしても、品質管理能力等を確認するための現地監査が海外原材料企業から拒否されたり、渡航禁止・制限政策によりビザが承認されなかったりして実施が難しい状況になりました。

現在は、リモートで可能な限り監査したり、他の製薬企業が使用している実績を調査したり、他成分で監査した過去報告書を確認したりして、現地監査なしで総合的に品質保証できるか検討しています。

国レベルでもようやく国内生産の重要性の議論が始まりました。新しい薬価制度や設備投資に関する税制優遇等大きな枠で改革を行い、国内生産拡大に道を広げて欲しいと期待しています。



当院でのCOVID-19対策と薬剤師

社会医療法人駿甲会コミュニティホスピタル甲賀病院

医療技術部 部長 渡邊 学

(平成7年卒)

私が勤務する社会医療法人駿甲会コミュニティホスピタル甲賀病院は、静岡県焼津市に立地する24診療科、407床（急性期一般病床218床、HCU5床、地域包括ケア病床30床、回復期リハ病床154床）の一般病院です。本稿を執筆している令和2年8月初旬現在では、COVID-19感染者の入院受け入れ実績はありません。私は、薬剤科を含む医療技術部門全体の統括業務の他、医薬品安全管理、医療安全、感染対策等も担当しております。

病院薬剤師が感染症対策において活躍できる業務として、抗菌薬等の適正使用等のAST/ICT活動が脚光を浴びています。しかしながら、手指消毒や環境消毒といった「出来て当たり前」のことを「当たり前」に出来るようにする」という、消毒薬等の購入・品質管理・供給、そして消毒薬の適正使用等に関する啓蒙活動といった地道な仕事も、病院薬剤師にとって重要な業務と言えると思います。

当院薬剤科では、COVID-19流行以前から災害時院内感染対策の一環として、医療用ハンドソープ12Lとアルコール製剤25L（概ね7日分相当）を通常使用分とは別に確保しております。

また、通常使用分として、常時アルコール製剤約30L程度が薬剤科に在庫されています。これらに病棟等の院内予備在庫分を合わせても、昨年末の時点では、概ね3週間持つかどうか、という在庫量で過ごしていました。

折しも、患者に接する職員を中心に手指消毒用アルコール製剤の携帯義務化を進めており、感染対策委員会と薬剤科協働で手指消毒用アルコールの在庫増と職員への配布・啓蒙活動を展開していました。また、12月末には医薬品卸の年末年始休業対策として、アルコール類をさらに多めに確保するよう対応していました。そんな中、年明けには中国国内で原因不明肺炎流行の一報があり、当院でも警戒感を高め、アルコール備蓄定数を引き上げることと

しました。

その後、国内発症者数・重症者数の増加、著名人の死亡等、報道も過熱する中、次第にアルコール類やマスク等資機材の供給が厳しくなってきました。

2月には、製薬企業MRから「アルコール製剤に関しては生産能力が限られることから、生産注力品と減産品に分かれる」との情報をいただきました。

医薬品卸MSのご協力もいただき、2月末には採用品の容量違いの製品購入が始まり、4月下旬からは採用品以外の供給余力がある生産注力品を購入できました。また、4月頃から国や県からの消毒用アルコール製剤の供給が始まり、現在も継続して支援をいただいております。このように当院薬剤科ではMRやMSの皆様、国、県等のご協力もあり、何とかアルコール製剤を確保し、院内・法人内へ供給し続けることができました。手指消毒推進のための掲示作成や足踏み式噴霧器の設置、市民への啓蒙活動なども行うなど、適

正使用に向けた取り組みも継続しております。

この間、次亜塩素酸水による手指消毒の案内も多数いただきました。自治体からも手指消毒用として配布される事態になりましたが、私としては、エビデンス不足（元々野菜の消毒用として食品添加物として承認されている）から、人体使用への安全性や有効性が担保できないと判断して、当院・当法人内では人体には使用不可（噴霧も不可）の指示を出しました。薬剤師としてエビデンスを検証することは最低限度必要であると考えており、十分なデータが無いまま供給・使用許可を出すこと自体は不適切と考えています。その後、NITE（独立行政法人 製品評価技術基盤機構）から検証結果が発表され、当時の判断が正しかったことが裏付けられたと考えています。街の科学者である薬剤師は、科学的な判断を元に患者さんや薬剤使用者に貢献することが大切と思った出来事でした。

コロナ禍でのニュージーランドへの留学

静岡県立大学薬学部 統合生理学分野 助教 鈴木 木 美 希
(平成21年卒)

ニュージーランドのオタゴ大学にて、2020年の1月から3月の3カ月間、海外研修にて留学させて頂きました。

コロナ特集に留学体験記?と思う方もいらっしゃると思いますが、コロナウイルスへの対応が注目された国であるニュージーランドで、海外研修中に体験したことを、一部お話させて頂きます。

ニュージーランドの第一印象は、想像通りで、人間より羊の方が多い観光大国、でした。一方で、ダニーデンのオタゴ大学は、どこまで歩いてても大学の建物が存在するような、街と大学が融合した場所でした。ですので、大学には学生、各地には観光客があふれ、道中には草原と羊、活気がありながらもどこか落ち着ける勉学に最適な国だったようにも思えます。留学初期は、右も左もわからぬまま、研究室のメンバーに食らいついて、目の前の実験を行うことに必死な毎日でした。生活に慣れ、ニュージーランドの雄大な自然を体感する余裕が生まれたのは随分経ってからでした。

ニュージーランドでも海外旅行からの帰国者がコロナウイルスの感染源となるケースが報告されるようになりました。そこで、ニュージーランドは入国者に対して2週間の自己隔離を義務付けました。観光大国の第一の策が、事実上の観光客の入国制限、です。これに驚いたのは言うまでもありません。さらに自国民への帰国勧告。そしてニュージーランドー日本間を含む国際線の3月中の減便、4月からの休止。これらを代表とする多くの政策を3月上旬に立て続けに発表していたように思います。羊を彷彿とさせる、どこかゆったりとしたニュージーランドに対するイメージは、この頃から強く斬新なものに変わっていったように思います。そして、私のニュージーランド生活も残り1週間となったある日: コロナウイルスへの感染報告はごくわずか。しかし、ニュージーランド首相は、記者会見にて「48時間後からロックダウン。少なくとも4週間は続ける。」と発表しました。ロックダウンの際に、いい仕事、ダメな仕事、が最低限の期日

とともに国から明示されたため、思ったより混乱は無いように思えました。ですので、私は急なロックダウンに驚いた以上に、それに混乱なく素早く対応する国民の皆様に対して驚きを隠せませんでした。もちろんラボでの研究活動も全て48時間後から停止ですので、ラボメンバーは、Webでの通信システムを確認し、動物や機械のことに冷静に対応していました。自分のことを述べますと、国内線は?国際線は?そこまでの公共交通機関は?宿泊場所とは?と様々に: ロックダウン目前の異国の地で帰国1週間前に、どれほど慌て、不安だったか、ということはお想像にお任せします。



ロックダウン初日のオークランド国際空港

ということはお事実です。多くのの方に心配をかけながらも、たくさん助けて頂き、ロックダウン初日に、ニュージーランドのオークランド国際空港から、日本行きの便に乗り無事帰国することが出来ました。このようなコロナ対策を行う国から帰国したのだ、との思いは少なからずありましたが、誰にも伝わりませんので、ラッシュ時の東京駅構内にもかかわらず、キャリアバックとともに歩く私の前の道が開けていたことは仕方のないことにも思えました。

研究に関する学びに限らず、国全体でコロナウイルスに打ち勝とうとする姿勢に、人間の真の強さを感じ、多くを考えさせられた留学となりました。これら経験を通じて、本学薬学部のさらなる発展に貢献していきたいと思っています。

第2回静薬学友会賞受賞にあたり

宇野勝次先生（昭和49年卒）と曾布川和則先生（昭和53年卒）が栄えある「第2回静薬学友会賞」を受賞しました。この度は誠にありがとうございます。心よりお祝い申し上げます。両先生の受賞は、選考委員会における厳正なる選考を経て、理事会において全会一致で決定しました。両先生は薬剤師の職能向上に大きく寄与し、多大な功績を残されてきました。宇野勝次先生は、薬剤アレルギーの研究で顕著な成果を上げ、さらに日本医薬品安全性学会を設立し、薬剤師が医薬品の安全性確保を実践する意義の普及に大きく貢献されました。曾布川和則先生は、浜松市薬剤師会会長、静岡県薬剤師会会長、日本薬剤師会常務理事など数多くの公職を歴任し、薬事関係事業の発展向上に大きく貢献されました。両先生のご功績に敬意を表するとともに、益々のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

第2回静薬学友会賞 選考委員長 医薬生命化学分野 教授 浅井 知浩（平成9年卒）

第2回静薬学友会賞受賞にあたり

薬剤アレルギー研究の推進と医薬品安全性学の構築に向けて

千葉科学大学 客員教授 (株)アインファーマシース 顧問

宇野 勝次

（昭和49年卒）

私の大学時代は学生運動が隆盛を極め、私も当時静岡薬科大学の自治委員長をやったりして学生運動に没頭する日々を送っており、決して勉学に励んだ学生ではありませんでした。後年、医薬品の抗原形成を検討する際に、もう少し有機化学を勉強しておけば良

かったと後悔したものです。それでも、4年生になり微生物学研究室に入って免疫学に興味を持ったことが私の今後の人生を決めたと思います。免疫学の「自己と非自己の認識」という哲学的なセンテンスが理屈っぽかった私に興味を抱かせたのだと思います。私は、

東芝理化学研究所・研究員を1年半、水原郷病院（後、阿賀野市民病院）・薬剤師を31年半、福山大学薬学部教授を9年、千葉科学大学・客員教授／アインファーマシース・顧問を4年と多くの職歴を渡り歩いてきましたが、研究に取り組んだ大部分は30年余りの薬剤師時代です。

私の学術的活動は、大きく分けて薬剤アレルギー研究の推進と医薬品安全性学の構築であります。薬剤アレルギー研究では、①白血球遊走試験（LMT）によるアレルギー起因薬同定試験の確立と臨床応用、②各種薬剤過敏症状（薬疹、薬剤熱、薬剤性肝障害、

薬剤性肺炎、薬剤性ショック、薬剤性血液障害、薬剤性出血性大腸炎など）の臨床解析、③βラクタム系抗菌薬過敏症の交差アレルギー、④薬剤アレルギーの発症機序の解明（IL-1、IL-2、TNFなどの関与）、⑤加齢と薬剤アレルギーの関連性、⑥偽薬剤アレルギーの証明、⑦薬剤光線過敏症の発現機序の解明、⑧眼科用蛍光造影剤フルオレセインのアジュバント作用の証明、⑨漢方製剤小柴胡湯の免疫薬理活性の証明、⑩ヨード造影剤ショックにおけるヒスタミン遊離作用の証明、⑪マクロライド系抗菌薬の抗炎症作用の証明などです。臨床現場で

次から次へと湧き出てくる薬剤過敏症に関する問題点を検討している内にいつの間にか多くの研究テーマに取り組むことができ、学会・商業誌の論文・総説を83報発表し、拙著「アレルギー性副作用―実用編―」（じほう・2015年廃版）と「薬剤過敏症」（南山堂・2016年発刊）を著作し、平成21年度日本医療学会学術貢献賞（研究題名・薬剤アレルギーの起因薬検出、臨床解析および発現機構に関する研究）を受賞することができました。

医薬品安全性学では、病院の薬剤師になってから医療における薬剤師の存在価値をずっと考えてきました。医療現場に立つ薬剤師にとって従来の薬学教育の支柱「創薬（そうやく）」は余り役に立ちませんでした。薬剤師に求められるものは「医薬品の適正使用」、すなわち「操薬（そうやく）」です。「操薬」は患者個人に応じて医薬品の有効性と安全性を調整することです。医師にとっても「操薬」は重要でありますが、医師は病気を治す道具として医薬品の有効性を重視します。一方、薬剤師は医薬品の有害作用に注視し、薬物治療の安全性を確保することがドラッグセフティマネージャーとしての

社会的存在価値を高めると考えます。そのためには医薬品安全性学の構築が不可欠だという考えに到達しました。

具体的な活動は①医薬品有害作用の一元管理の実践、②新潟県副作用研究会の設立、③薬・薬連携の構築、④ドラッグセフティマネージャーの存在意義の提唱、⑤医薬品安全性学的重要性の提唱などがあります。この分野でも、学会・商業誌の論文・総説を44報発表し、日本医薬品安全性学会（JASDS）を設立して理事長となり、JASDS監修の著書「医薬品副作用アセスメント」（南山堂・2018年発刊）を編集しました。

今回、劣等生だった私が静薬学友会賞を受賞できたのは、社会人になって良き師、良き同士、良き友に出会えたからです。アフガンの父と言われた中村哲先生の座右の銘が「照一隅」であります。凡庸な私でも薬学、あるいは薬剤師業務の一隅を照らすことができたとしたら至上の喜びです。



昭和49年卒ミ二同窓会（九州旅行2019年）私は左後列2番目

第2回静薬学友会賞受賞にあたり

薬事関係事業における発展向上への貢献について

株式会社フォーリア 代表取締役会長 曾布川 和 則

(昭和53年卒)

この度は第2回静薬学友会賞を受賞させていただきましたが、これまでの卒業生の1人としての働きを評価していただいたものと感謝申し上げます。

長く薬局で仕事をしながら薬剤師会で活動をして参りました。浜松市薬剤師会会長や静岡県薬剤師会会長、日本薬剤師会常務理事をさせていただきました静岡県生活科学検査センター理事長や鈴木梅太郎博士顕彰会理事長等もさせていただきました。今になって思い返すとそれぞれの役職で思い出もありますし、もっと違った対応もできたのではなかったりもします。

本来なら薬事関係事業における発展向上への貢献に対していただいた賞であれば県薬会長時代の県医療審議会における病床数の議論、県薬事審議会における消費者代表との薬局・薬剤師における消費議論、PMDAにおけるジェネリック医薬品品質情報検討会における学術的検討に関する議論、日本学校薬剤師会を日本薬剤師会学校薬剤師部会に移行に際し尽力させていただきました経緯等について具体的に書くべきかと

も思いましたが、そうした様々な中でも特に印象に残ることがあります。

一つは日本薬剤師会常務理事の時代に公益法人制度改革がありました。それまでの社団法人、財団法人を公益から一般かを選択し移行させて行くもので、日本薬剤師会の組織変更の担当役員に任命されました。その当時医師会、歯科医師会、薬剤師会の横並び意識も高くどちらを選択すると言うよりいかに公益社団法人に組織として先に移行させて行くか大変苦労しました。公益法人制度改革に詳しい弁護士と日本薬剤師会とで顧問契約を結び、公益法人協会にも相談に伺い内閣府公益認定等委員会に足しげく通いました。厚生労働省から出向されていた調査官に適切にアドバイスしていただき新しい定款を一から作り上げて行きました。

一番困ったことは都道府県薬剤師会との関係でした。法律上はそれぞれ法人格を有する別法人ですが、それまでは当たり前のように日本薬剤師会の会費の徴収をお願いしていましたが制度が変更になったのだからと徴収方法に



薬剤師として勤務中の姿

クレームが付いたため会費徴収に当たりの消費税がかからないことを認めてもらうため何度か金融庁や東京国税局にも伺いました。今になって考えるともう少し都道府県薬剤師会と柔軟な話し合いをすれば良かったと思ったりもします。一方こうした経験を通して新しい法律が一つ施行されることの大変さを実感しました。

またもう一つは静岡県薬剤師会会長の時代に第45回日本薬剤師会学術大会が浜松で開催され大会運営委員長を任せられました。その当時日薬と県薬とを兼務していた関係で非常に多忙で県薬の役員や会員の皆様には大変御苦勞をかけてしまいました。当時学術大会分科会の座長は日薬の役員から割り当て

をされて日薬理事会で決定されていました。正直あまりの忙しさに断りたかったのですがメインの分科会の座長に指名されました。田中滋先生の地域包括ケアシステムを基調講演にした分科会でした。当時まだ地域包括ケアシステムについてあまり認知されていなかったこともあり三田の慶應義塾大学のキャンパスに田中先生を訪ねお話を伺いましたが、これから予想される社会構造変化を踏まえてどうすべきか詳しくお話を伺うことが出来て無事座長を務めることが出来ました。大学のキャンパスを歩いていると学生時代を思い出しほんの一瞬非日常に触れた感じがなぜかすごく印象に残っています。こうしてこれまでの出来事を振り返ると、もう9年も前になりますが東日本大震災の時に発災から3日目に現地に入り実情を把握して東京に戻り全国の薬剤師会や医療関係の団体と協力して対応したこと等ただただ目の前の問題に一つ一つ対応して来ただけのような気がします。

現在は薬局で患者さんに薬の相談をして喜んで帰ってもらえることを励みに薬剤師として仕事をしています。これからも薬剤師の評価に少しでもお役に立ちたいと思っています。

地区同窓会だより

北海道地区

コロナ禍でたいへん

地区同窓会代表 水島 教之

(昭和54年卒)

静薬学友会会員の皆様には、コロナにも負けず、きつと活動されていることと思います。

また平素は支部の運営にご協力ありがとうございました。

前回静薬学友会報で予告の第53回日本薬剤師会学術大会北海道大会が、正常な開催が出来ないため「ハイブリッド開催」が決定しました。

参加制限も現地参加4千名上限とし、WEB参加1万名となりました。

僕自身も会場には行かず、WEB参加としました。

また、学友会の皆様にお集まりいただいていた懇親会は、感染予防の観点から中止することにしました。本当に申し訳ありません。色々、企画していたのですが、またの機会に是非実現したいと考えています。

今年度の事業はコロナ禍で活動はありません。そこで自分の身の回りのことを書く

うと思います。

・マスクについて

OTCを得意としている当薬局ですが、3月には、市民や患者さんに提供できるマスクがないという事態になってしまいました。医薬品・医療機器の卸にお願いをしましたが、ままならず、結局中国のバイヤーから直接購入することになりました。ところが不良品が多く、クレームの嵐。さすが中国、やることのスケールが色んな意味で違います。しかし、マイナスイ面はありながら、その1〜2ヶ月を乗り切ったのはありがたくもありました。今は日本企業の大連工場から仕入れています。準日本製、安心で評判のよいマスクを提供できています。

・消毒薬について

消毒用アルコールの注文の嵐

どうにか患者さんの注文分を確保できた6月、今度は休校開けの学校からの生徒の手指消毒薬の注文。また施設や医療機関対象のコロナ感染予防給付金の対象としての消毒薬の注文。

高濃度エタノールが国から1斗缶で提供されたものを消毒用に調整しての提供も薬局の任務となりました。量が多く、時間と労力がかかることですが、社会貢献を実感できる作業にもなりました。

・体温計

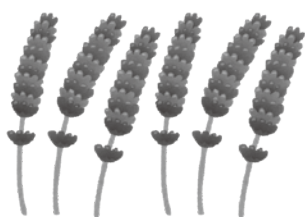
2月末あたりから、「体温計」を求めらるお客様が急増。たまたま、過剰に入庫していた体温計300本が、あつという間に完売。その後は、7月まで、全く入荷してきませんでした。予約販売となったのも初体験でした。また、非接触型体温計も高額なものであるにもかかわらず需要があり、今、日本製の入荷を待っている状態です。

・パルスオキシメータ

1年に1個売れるか？というこの機器が春からの2ヶ月でなんと20個も売れた。

他にも、色々、40年以上の薬局のオヤジ人生で初体験となったコロナ禍です。

母校を含め、研究と開発に携わる方々を応援して、近い将来、変らぬ日常の来る日を信じています。そして、変らぬ皆さんとお会いできる時も何より楽しみにしています。



長野県地区

地区同窓会代表 勝山 善彦

(昭和57年卒)

令和元年10月6日松本市で長野県地区同窓会を開催いたしました。

長野県地区の静薬同窓生は最近95人前後を維持しており、大きく増えも減りもしていません。令和元年の秋は、土日となると雨が降る天候でしたが、地区同窓会の開催日、令和元年10月6日は、久しぶりに天気の良い休日でした。

学友会本部から横倉会長、賀川教授に出席していただき、長野県地区同窓生11人で開催いたしました。まず、横倉会長のあいさつと学友会の法人化についての話を伺い、地区同窓会総会の順で行いました。

今回、総会でまず行ったことは、会の名称変更でした。静薬学友会の法人化に伴い、学友会の下部組織であった学友会長野県支部が、長野県地区の卒業生の親睦会となり、組織的には学友会から独立した組織となったため、地区総会でまず名称変更を行いました。その後、活動報告、決算報告を行い総会が終了いたしました。

その後、賀川先生の静岡県立大学薬学部現状、薬学教育制度、卒業生の進路の話、「認知症治療薬ドネペジルの体内動態と周辺症状」の講演で、血

中濃度と遺伝子多型、認知症の行動心理症状に対するドネペジルの可能性などの話を伺いました。

懇親会では、自己紹介に始まり、大学時代の話、友人の近況などで、あっという間の2時間が過ぎ、2年後の地区同窓会開催のアナウンスで会を終了いたしました。

その1週間後です。長野県地区では、台風19号による堤防の決壊による広範囲の水害がおきました。当日朝、一旦勤務している病院に向かおうとしましたが、通勤道路は2メートルの水で、通行止めとなっており、一旦断念しましたが、なんとか、山沿いの道を探して病院にたどり着きました。幸い、勤務している病院は水害から免れており、近隣の被害病院の患者受け入れとなりました。10か月近くが経ちますが、まだ被害からの復帰は十分ではありません。そうしているうちに、COVID-19の第一波、第二波の感染拡大による対策など非日常の生活が続いております。各地でも、災害、感染など報道されておりますが、早く日常

の生活を取り戻せるように願っております。

次回、長野県地区同窓会は来年、令和3年に予定しておりますので、地区同窓会の会員の皆様には来年5月過ぎに連絡いたしますので、参加のほどよろしくお願いいたします。



長野県地区同窓会総会 2019.10.6 於 ホテルモンターニュ松本

関東地区

地区総会報告事項を学友会ホームページに掲載

地区同窓会代表 本島 玲子

(昭和58年卒)

本来はオリンピックキヤーであった今年、関東地区では総会とともに講演会・懇親会を開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、会員が一堂に会してのイベントは難しい状況になりました。そこで、これまで総会で行ってきた諸報告事項について、まず幹事会メールでやりとりして

合意のうえ、総会および会計資料を学友会ホームページで公開すること、その旨を学友会報で報告することを決定しました。また、検討過程では、今後に備えてオンラインでの幹事会も試行しました。

関東地区同窓会の主な活動は、①地区総会の開催(隔年)、②学友会本部との連携、③学生・同窓会の支援です。関東地区同窓会会員は学友会登録会員の約4分の1を占めています。4月に大学で開催される就職説明会には、当地区メンバーが2018年は9名、

2019年は6名が参加し、学友会ブースで相談に応じました。

2020・21年度の事業は計画が立てにくい状況です。①②③を柱に、内容や時期・方法については今後の状況に応じて幹事会で検討し、柔軟に対応していきます。

「地区同窓会活動の活性化」は長年にわたる大きな課題です。総会や学生支援において遠隔講演会を開催可能かの議論も行いましたが、関東地区の幹事だけの運営・管理は現状では難し

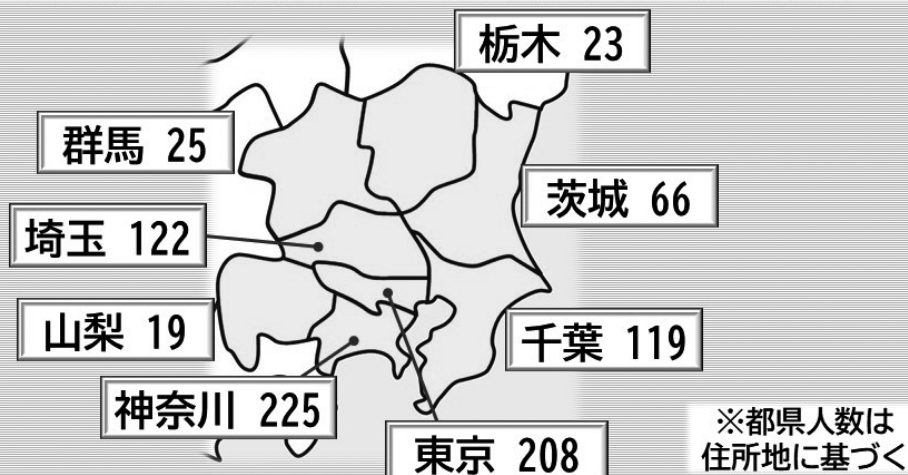
2020/21年度 地区体制

氏名	担当	氏名	担当
本島 玲子(S58卒)[東京]	★地区代表	大澤 勝一(S59卒)[東京]	●
仲谷 博明(S45卒)[東京]	●地区代表代行	関本 征史(H8修了)[神奈川]	★
中村 真典(S51卒)[東京]	地区代表代行	太田 福子(S44卒)[東京]	
大家 毅(S59卒)[栃木]	地区代表代行	後藤 守男(S45卒)[東京]	
多田 義孝(H01卒)[東京]	★	富坂 修(S45卒)[神奈川]	
松浦 大輔(H01卒)[茨城]	★会計監査	桶川 修(S46卒)[東京]	
中村 和重(H04卒)[東京]	★目黒会代表	稲葉 良生(S50卒)[神奈川]	会計監査
佐藤 泰士(H05卒)[東京]	★地区会計	高橋 俊博(S55卒)[群馬]	*
加藤 彩香(H26卒)[東京]	★	松本 正敏(S57卒)[千葉]	

【自宅または勤務先】●本部理事(2名)★同代議員(7名)*新任 2020年8月16日現在
安倍道治氏(S46卒)は2020年6月19日付 本部臨時理事会にて、代表理事・会長就任のため、関東地区同窓会幹事からは退き、本部職務に専心

静薬学友会関東地区同窓会

静薬学友会「マイページ:WEB名簿システム」→
「会員検索」に情報公開している会員(2020年8月16日現在)



今後、講演会、懇親会などの活動が可能になった際には
ぜひご参加ください！

く、本部や他地区も巻き込み、大学の
ノウハウも得て十分に検討していく必
要があるとの結論に達しました。
地区同窓会の幹事は時折フレッシュ
な顔ぶれを迎えつつも、概ね同じメン
バーで活動を継続してきました。関東

地区同窓会に興味を持っていただけた
ら、学友会ホームページのウェブ名簿
システムなども利用し、同級生や同じ
教室の卒業生と連絡を取り合って、ぜ
ひ活動にご参加ください。

東海地区

「令和元年度総会・第43回薬剤師
セミナー」を開催いたしました

地区同窓会代表 松崎 雅英

(昭和60年卒)

容を記します。(次ページ)
追伸…コロナ禍の中、今年度の総会及
びセミナーの開催を見送ることとしま
した。来年度の開催の際は多数の会員
の皆様の参加を賜りますようお願いい
たします。

令和元年12月1日(日)
に静薬学友会東海地区同窓
会「令和元年度総会・第43
回薬剤師セミナー」をウイ
ンクあいち(名古屋市中村
区名駅)にて開催致しまし
た。

学友会から横倉輝男会長
をお迎えすると共に、東海
地区にお住まいの学友会員
等の19名のご参加を頂きま
した。

総会では、事業及び会計
の審議の後、横倉会長から
学友会の近況報告が行われ
ると共に会員との意見交換
が行われました。

また、薬剤師セミナーで
は、大森智史氏(平成17年
卒)及び多田義孝氏(平成
元年卒)のお二方からご講
演を頂きました。

更に、薬剤師セミナー後
に行なわれた情報交換会で
は、会員相互の親睦が図ら
れました。

以降に、お二方の講演内



第43回薬剤師セミナーに参加の会員の皆さん 2019.12.1 於 ウィンクあいち

東海地区

講演要旨一

物言つ薬剤師のススめ

情報提供の取組と実績

(株)セイウトレディング 監査役

エース薬局 エリアマネージャー

大森 智史

(平成17年卒)

ここ数年薬局薬剤師を取り巻く環境が徐々に変わってきています。

平成27年に「患者のための薬局ビジョン」が厚労省から提示され、以降中医協など様々な場で薬局は「対物業務から対人業務へ」とことあるごとに指摘を受けながら4年が経過しました。2019年4月に発出された0402

通知は「薬剤師以外でも可能な対物業務」として対人業務へのシフトを加速するべく厚労省の見解が示されました。また、2019年11月には薬機法が改正され、服薬に関して継続的なフォローが義務付けられ、薬局の機能別認定も開始されることが法制化されました。

一方、病院では院内チームが形成され、そこに薬剤師もメンバーとして構成されており、院内における存在感が増してきています。外来化学療法における薬剤師の関わりに診療報酬上の評価がなされたのは、評価がされる前より病院薬剤師が必要に応じて積極的に介入をしてきた結果、得ることができ

た評価です。

このように薬局薬剤師の業務・役割にここ数年変化を求める外部要因が増えてきています。弊社薬局では、積極的な情報提供の取り組みとしてトレーニングレポートを用いた取り組みを推進しています。疑義照会とは異なり、緊急性はそこまで高くはないが重要な内容において利用価値が高く、多忙な医師の診療の妨げにならず、文書であるため根拠を添付できる点から受け入れも良好です。

患者さんの薬にまつわる困りごとを解決する手段としてトレーニングレポートを活用し、薬剤師法第1条にも規定されている「国民の健康な生活を確保」という目的のために継続して行動しています。

講演要旨二

在宅で活用できる水・電解質補給の知識

輸液製剤協議会 事務局長

(大塚製薬工場)

多田 義孝

(平成元年卒)

私たちは飲料や食事などから水分や電解質を摂取し、ほぼ同じ量を体外に排泄することで体内のバランスをとっています。入院、在宅にかかわらず、何らかの原因でこのバランスが崩れた場合には、輸液や経口補水液により体

液の異常を是正する必要があります。

特に小児や高齢者は脱水になりやすいことが指摘されています。乳幼児や小児は成人に比べて体重当たりの水分量(特に細胞外液量)は多いですが、尿の濃縮力(腎機能)が未熟で水分保持能力が低く、必要水分量が多くなる傾向があります。のどの渇きなど脱水時の訴えが少ないことも理由に挙げられます。また、高齢者では筋肉量の低下などにより体重当たりの水分量が一般成人よりも低くなるだけでなく、腎機能の低下や、口渇感を感じにくくなることが特徴です。

体液異常が起こった際には、失われた水分、電解質の種類、量に応じた補給が行われます。出血や下痢、嘔吐などで体液を急速に失った場合には、生理食塩液や乳酸・酢酸リンゲル液などの細胞外液補充液が投与されます。摂食不良や大量の発汗など、体液を徐々に失い、からだ全体の水分を喪失した際には、維持液類が投与されたり、経口補水液が用いられます。

適切な水・電解質補給により、体液を正常な状態に保つことが重要です。

関西地区

地区同窓会代表 松田 通明

(平成2年卒)

静薬学友会員の皆様におかれましては、お元気でご活躍のこと心よりお慶び申し上げます。関西地区同窓会の活動状況について、ご報告させていただきます。

当地区では、諸先輩方のご尽力で盛り上げていただいた関西地区同窓会に、一人でも多くの同窓生の皆様に興味を持っていただき、関西地区同窓会総会に参加いただくための仕組み作りに取り組んでいます。その一環として、関西地区同窓生間の人脈の輪を広げ、意見を交わせる環境整備に取り組んでいます。一方で、昨年末からの新型コロナウイルス感染症の拡大で、一堂に会することが制限され、新しい生活様式に則した活動のかたちが、今後、求められるようになりました。

ただ、形は変われど、同窓生の皆様との関わりを広げたいとの気持ちに変わりはありません。地区同窓会の趣旨に沿った新しい活動のかたちを作っていきたいと考えています。関西地区同窓生の皆様との連絡ツールの一つになればと考え、連絡先(email)を記します。皆様のお声をお寄せいただければ幸いです。

関西地区同窓会

連絡先：松田通明

E-mail: shizuyakukansai@gmail.com

(注: shizuyaku@kansaiの間に、ピ

リオド)が入っています)

中国地区

地区同窓会代表 池田 潔

(昭和54年卒)

静薬学友会会員の皆様には、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

平素、支部会の運営にご協力頂き心より感謝申し上げます。

令和元年11月17日、定例の中国地区同窓会総会が広島で開催されました。幅広い世代の会員の皆様にお出でいただき世代を超えて楽しく交流することができました。

総会では横倉会長による挨拶と大学の近況が紹介されました。講演会では、(1)波多野力先生(岡山大学薬学部特任教授)(昭和52年卒)には「現代の漢方医療で薬剤師と薬学に求められるもの」、(2)中島正光先生(広島国際大学薬学部教授)には「基礎から伸ばそう漢方バリエーションアップ薬能から考える漢方」というタイトルで講演をお願いいたしました。講演会のテーマは漢方薬の基礎から臨床を目指してであり、岡山大学薬学部生薬学教室の波多野力先生には、生薬学の立場から漢方薬の

お話を、そして広島国際大学薬学部漢方診療学教室の中島正光先生には臨床医の立場から漢方薬による実践的治療をお話いただきました。講演会には外部から医療関係者も出席し、時間を延長して活発な質疑応答が行われました。講演会後に行われた懇親会は、諸先輩方に交じって若い方の参加もあり、テーブル形式の食事会では、活発に世代間の情報交換が行われました。

この度、地区同窓会の開催に当たり、横倉会長、講師の波多野先生、中島先生、そして本部および支部幹事の皆さんのご理解とご協力に心より感謝申し上げます。

地区同窓会を継続していくためには、各世代の代表者や部活等を通じての呼びかけや、同級生の輪を広げ友人を誘ってもらうことなどが重要です。今後定期的な地区同窓会を開催しながら認知度を高め、会員に必要とされる魅力的な地区同窓会を目指したいと思います。本部には、地方支部会の運営の厳しさをご理解いただき、ご支援をお願いしたいと思います。今回、新しい試みとして新制度による学友会地区同窓会初の薬剤師研修シールの配布を行いました。

(次ページに集合写真掲載)



波多野力先生(岡山大学薬学部特任教授)のご講演



中島正光先生(広島国際大学薬学部教授)のご講演



中国地区同窓会 2019.11.17 於 ホテル広島ガーデンパレス

九州・沖縄地区

地区同窓会役員

那覇市保健所 仲地 剛

(平成6年卒)

はいさーい!! 静薬学友会ぬしんかぬ
 ちゃー、今日(ちゅう) 拝(うが) な
 びら!! (こんにちは!! 静薬学友会会員の
 の皆様、お元気ですか!!) このたび、
 地区同窓会代表である中山大輔君、さ
 らには学友会の理事である黒羽子孝太
 君という九州・沖縄県人会の後輩から
 のたつてのお願いとあれば、返事は
 「ハイかYES!!」しかないと思い、
 今回の地区同窓会だよりを引き受けさ
 せていただきました。私は現在、那覇
 市保健所生活衛生課・医務業務環境グ
 ループに所属しております。新年度、
 主幹に昇任しましたが、昇任早々から
 いわゆる新型コロナウイルス感染症拡
 大防止対策業務に追われております。
 それでも、笑顔と元気を忘れないよう、
 気持ちだけは「ちゃーがんじゅう(い
 つでも元気)」で日々の業務に向き
 合っております。

さて、本学友会の九州・沖縄地区に
 おきましては、現在学友会のWeb名
 簿上では80名の会員数になっていま
 が、実際にはその2〜3倍の会員がい
 らっしゃるかと思えます。今年の11月
 22日(日)・23日(月)の2日間、「第
 80回九州山口薬学大会」が9年ぶりに
 ここ沖縄で開催される予定でしたが、

諸般の事情により、残念ながら中止が
 決定しました。ホスト県としても断腸
 の思いであつたかと思料します。この
 機会を利用して、静薬・県大の先輩・
 後輩・同期の皆様との交流の機会が持
 てることを期待していただけない、残念
 な気持ちでいっぱいです。しかしなが
 ら、学友会の皆様はそれぞれの部門で
 必死に新型コロナウイルス感染症に向
 き合っておられます。離れていても、
 ココロはひとつという思い、それこそ
 「いちゃりばちよーでー(一緒にいる
 人はみんな兄弟)」という気持ちで頑
 張っていきましょう。そして、
 「まくとうそーけー、なんくるないさ
 (正しいことをしていれば、なんとかな
 る)」という沖縄の金言を紹介して、
 この地区同窓会だよりを締めさせてい
 いただきます。



会員だより

昭和37年卒(六回生)同期会

河村 信 弘

(昭和37年卒)

開催日…2019年11月29―30日
場 所…クラウンパレスホテル浜松
参加者…

池田 明、大久保好子、大胡陽子、
大塚勝久、河村信弘、工藤弘子、
桑原伊玖子、小西一宏、近藤静男、
佐藤朝子、笹田庸子、白井千恵子、
鈴木智彦、平良武男、田中恒夫、
高橋富貴子、大長美穂子、
豊田 満、永塚瑠美子、原野壹吉、
松岡千恵子、松下玲子、吉岡はま
以上23名

前回の同期会(2018年5月25―
26日)で笹田さん、佐藤さん、吉岡さん
が幹事をして下さいましたが、今回さ
らに小西さんが加わり4名でお世話頂
きました。今回も前回同様笹田さんの
地元浜松で開催することになりました。
○11月29日…懇親会

懇親会は同ホテルの和食料理店・四
季で17時半より23名の出席で行われま
した。まず皆さんの元気な姿をカメラ
に収めたあと、幹事の開会のことばに
続き、すでに亡くなられた20名の方々
のご冥福を祈り黙祷。次いで新幹事の
小西さんの音頭で乾杯し会食、歓談に
入りました。会食中は在学中のことや
これまでに過ごした長い年月での悲喜

こもごもの事柄を互いに語り合いま
した。その間、希望者による近況スピー
チがあり、また本日出席できなかった
友のことや亡くなられた方々のこと
についても知りえる範囲で皆さんに話さ
れました。

次いで別室での二次会では会食で話
し足りなかったことなどさらに打ち解
けて話し合い、本日の会は予定通り終
了となりました。

○11月30日…昼食会および次回の予定
朝食を終えて、10時にホテル玄関に
集合。ホテルから帰られる方も数名お
られました。本日昼食を予定してい
る浜名湖レイクサイドプラザに向かい
ました。JR浜松駅から新所原駅で天
竜浜名湖線に乗り換え奥浜名湖駅下車、
徒歩約10分のところ。ここは浜名
湖が一望に開け、ゆったりとした景色
がひろがり、いつしか小鹿の青春時代
に引き戻してくれそうな感覚になりま
した。そのような雰囲気の中、一同豊
富なメニューのランチバイキングに舌
鼓を打ち、また一層話に花が咲きまし
た。楽しい時間はあっという間に過ぎ、
そのまま浜松駅に戻る者、天浜線で掛
川駅へ出る者、途中の西鹿島駅から遠
州鉄道経由で浜松駅へ戻る者に分かれ、
二日間の晴天に感謝しつつ散会しまし
た。
なお、幹事より次回同期会の提案が
出されました。時期は1年半先の20
21年5月21―22日で、場所はやはり
幹事地元の浜松開催となりました。次
回もぜひ参加したいと思えます。
「昔日を語り尽くすや小六月 信弘」



昭和37年卒同期会 2019.11.29 於 クラウンパレスホテル浜松

静薬10期生同期会開催報告

愛知県同期会長 森 田 俊 夫

(昭和41年卒)

令和元年十月十三日(日)に名鉄グランドホテルで同期会を開催しました。当日は台風十九号襲来(千曲川、阿武隈川、多摩川、等の河川が氾濫し甚大な被害が発生しました)の翌日で鉄道各社は計画運休を行い関東方面の方々の欠席が相次ぎました。

会長の歓迎あいさつに続き、物故者へ黙とうをささげました。会食しながら、一人一人が近況や思っていることを発表し、余興も飛び出しました。その態度は恥じらいやおごりもなく堂々としていました。

全員が後期高齢者となり、話題は自然と健康問題へ移りその維持には散歩やラジオ体操がよいとの結論になりました。楽しい歓談のうち計画の一時半が瞬く間に過ぎてしまいました。

欠席者も含め同期全員の健康と次回の再会を誓って解散しました。

県内同期の皆様ご協力ありがとうございました。

参加者 十八名(内 女性四名)

欠席者 四十六名

連絡なし 八名(内 住所不明一名)

一年以内の逝去者 一名

(同期会累計 十名)



静薬10期生(昭和41年卒)同期会 2019.10.13 於 名鉄グランドホテル



卒後50年目の同窓会を京都で

鈴木勝雄

(昭和44年卒)

卒後50年目となる節目の同窓会をいつ頃どこで、と幹事4名が集まり、「秋の京都がいんじゃない?」と、相談がまとまり昨年末に無事終えることが出来ましたので報告します。(実施は2019.11.20~21)

課題は宿泊先の確保と、観光のための移動手段ですが、秋の京都は観光客が多く、少し苦労しましたが、結果として宿泊先は京都ホテルアネックス、観光のための移動手段も嵐山方面なら公共交通機関で大丈夫だろうとの結論に至りました。

さて初日、夕方の宴会は外出するには寒いからとホテルのレストランを貸し切り(でも、21名の参加者にはちょうどいい広さ)、大々宴会…

宴会には京都タワー利用割引券も貰って行きましたので、行ってみようと企画はしましたが、寒さに負けてタワーには数名上がったのみ。でも京都の夜景はなかなかでしたヨ…とのことでした。

翌朝は快晴、まさに紅葉狩り日和、京都駅32番線からJRに乗車し目的地へ。目指すのは世界遺産でもある「天龍寺」ですが、せっかくだからと多くの観光客と一緒に渡月橋を渡り回りを

散策。その後宝厳院へ、ご推奨の庭園と紅葉を楽しみました。そして天龍寺へ、広大な池や庭と紅葉の山々をゆっくり回りました。記念写真は紅葉の山と広い池を背景に撮りたかったのですが、混雑のためここでの集合写真は禁止とのこと…まっ仕方ないか…。

そして昼食会場の「天龍寺厨房飾月」へ。精進料理はランクが3段階ですが、私たちは多くは要らないのでスタンダードを選択。でもなかなかの精進料理を堪能し、当初予定のスケジュールを終了しました。

解散後は、各自それぞれの秋の京都の午後を楽しんでいただけたんじやないかと、幹事一同で推察しました。

節目となる50年目の同窓会に元気で参加できたことに全員が感謝した二日間でした。

昭和44年卒 同窓会幹事

馬場宏行、朝比奈都志子、

鈴木勝雄、牧沢静子



昭和44年卒同期会 2019.11.20-21 於 京都

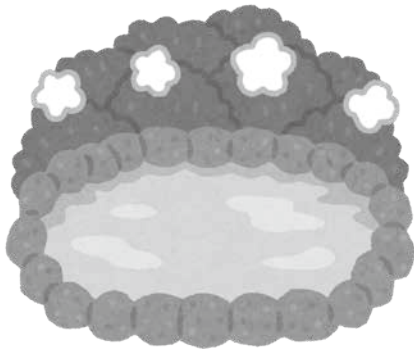
静薬・湯けむり熱海温泉ツアー (昭和49年度入学)

代表幹事 木 下 俊 也

(昭和53年卒)

毎年行っている昭和49年度入学同期会は、令和元年度、『静薬・湯けむり熱海温泉ツアー』と称して11月3～4日、熱海大観荘で行いました。熱海大観荘は、横山大観画伯のゆかりの宿として親しまれているところで画伯の作品が展示されていました。家屋は平田雅哉氏による数寄屋造り、庭園は龍居松之助氏の手によるもの、温泉も温まり効果と美肌効果が抜群で素敵な施設でした。今回の参加者は23名といつもより少なめでした。集合時間午後5時、宴会6時と時間通りに始まりました。宴会終了は、二次会用の特別室をキープし、そこで日が変わるまで盛り上がっていました。今回最も遠方の方は鹿児島から来た前田さん。次の遠方者は徳島の石岡さんでした。翌朝解散後、有志による箱根彫刻の森美術館ツアーを行いました。熱海↓小田原↓箱根湯本↓彫刻の森美術館と、JR線、小田急線、路線バスを乗り継いでやっと辿り着きました。ご承知の通り、箱根地区は台風19号による被害を受け、道路や鉄道は復旧中で大混雑していました。箱根彫刻の森美術館は、人々が自然の中で彫刻に接する機会を提供する素敵な野

外美術館で近代から現代にいたる優品や多彩な彫刻の数々のほか、ピカソ館も開設されていました。普段ならゆつたりとオープンエアーを満喫しますが、この時は道路が復旧中で混雑し、帰りのバス運行の見通しが不確実なため、全員がひと通り見終わった時点で現地解散にしました。パリンピック・オリンピックイヤー2020年の昭和49年度入学同期会は、『静薬・湯けむり石和温泉ツアー』と称して11月22日～23日、山梨県で行います。同期の皆様、予定に入れておいて下さい。なお、今回の参加者は、青木、安達、石岡、宇野、大田美、瓦谷、木下、木下、桑原、篠原、竹本、辻本、寺田、道鬼、萩原、東山、久嶋、藤井き、前田、三谷、山本啓、山本昌、吉田の23名でした。



熱海大観荘の玄関にて

俳句に寄せて

―人と自然への讃歌―

河村 信弘 (俳号…心光)

(昭和37年卒)

約40年前藤沢薬品の本社俳句会に入ったのがきっかけで俳句を始めた。五七五の短詩の中にその奥深さを知り、すでに40数年が過ぎた。これまでに「遠花火」「天空の朱鷺」の二句集を出版し、学友会誌へは過去3回掲載させて頂いた。令和2年2月で傘寿になったので第4回目の掲載をお願いしたところ快諾頂いたことに感謝したい。現在アステラス製薬社友会俳句同好会ほか計三つの句会に所属している。今後も座右の銘の「継続は力なり」を肝に銘じ、一生俳句を作り続けていきたい。

以下、2017年(平成29年)1月から2020年(令和2年)5月までの句の中から自選16句を春夏秋冬の順に紹介したい。

① 紅白の梅蒼天に響き合ふ

藤井寺市道明寺天満宮の梅園は素晴らしい。青空に紅白の梅はお互いにハーモニーをつけつつ、メロディーを奏でるが如く響き合っているようだ。

② 鳳凰の飛び立つ構へ花明り

平安神宮庭園内の飾りの鳳凰は満開の桜に映え、今にも飛び立つ様はまるで一幅の絵を眺めているようである。

③ 一病は己が分身梅真白

10数年前の手術のあと定期的に受診している。一病息災というか、自分の分身と心得て付き合っている。

④ 傘寿なり齡重ねて春立てり

今年の立春で傘寿の嶺に到達した。これまでこの嶺は高く越えられるか心配であったが、到達してみるとさらに高みをめざしたく思う。

⑤ 草笛を吹きて来し方想ひけり

草笛の音色は郷愁を誘う。幼い頃のこと、学生時代のこと、会社勤めのこと、家族、それに俳句、合唱などなどいろいろな想いが次から次へと脳裏に浮かんでくる。

⑥ 探鳥の指さす先や若楓

我々夫婦はバードウォッチングが趣味だ。梢に止まっている鳥を指さしている若楓の緑が心地よく風にそよいでいる。至福の瞬間だ。

⑦ 白鷺の天地に光返しけり

自宅近くの公園にサギのコロニーがあり、毎年春から夏にかけて新たな命が誕生する。巣立ちが近づくと羽ばたきを繰り返し、光を天地に返しているようだ。

⑧ 如意輪仏笑みの深さや新樹光

近くの山寺に如意輪観音が祀られており、そのかすかな笑みに深さを感じ心にひびく。折しもあたりは新樹の光に包まれている。

⑨ 己が道信じて渡る鷹一羽

毎年秋になるとサシバ、ハチクマなどの鷹類が南方に移動していく。集団

や単独で移動するが、教えられなくても自ら信じたルートを渡っていく。

⑩ 万仏に命の炎虫時雨

毎年8月23日、京都化野念仏寺で万仏の霊に対する供養の法要がいとままれる。万仏にローソクの火が点り、夕闇深く虫しぐれが…。

⑪ 海図なき人生模糊と曼珠沙華

人生は海図なき大海原を進むようだ。そこに喜び、悲しみがある。

⑫ 長き時紡ぎて二人敬老日

人生百年時代というがもはや傘寿。本当に長い時をふたりで紡いできたものだ。

⑬ 凍蝶の紫紺の翅の動かざる

冬さなかの吟行で紫紺の翅をじっとしている冬の蝶を見つけた。寒さの命に感銘。

⑭ 昔日を語り尽くすや小六月

薬大の同期会がこのところ1年半ごとに浜松で開催される。約20数名の集まりであるが、学生時代のこと、その後の長い年月のことをお互いに語り尽くす。

⑮ 雪霏霏(ゆきひひ)と平家滅亡説きて僧

雪がしきりに降るなか、京都の寂光院を訪れた。僧の法話を聞きつつはるか昔に思いを馳せる。

⑯ 極月や一筆箋に一行詩

師走の気ぜわしい中、一筆箋に要件を記し、そこに季節の俳句を添える。こちらの気持ちに通じて頂ければありがたい。



白鷺の子育て

大学だより

退職に際して



静岡県立大学での時間

静岡県立大学 薬学部特任教授 理事・副学長

前 免疫微生物学分野 教授 今井 康之



私は、1998年に静岡県立大学薬学部の微生物学教室の教授として奉職しました。当時5教室の教授が一度に代わり、ニューウェーブ世代と呼ばれました。私自身は微生物学の専門ではなく、糖鎖生物学と免疫学を主な研究対象としていました。着任した当初、日本語と英語で微生物学の教科書を少なくとも5冊は読み込み、微生物学を

理解することから始めました。前任の柳原保武先生のもとで教室を運営されていた増澤俊幸先生（現千葉科学大学教授）と三宅正紀先生によって、学生実習と微生物の講義は順調にすすめられました。研究室のセミナーでは、私が聞いたことがない微生物の研究が発表され、なじむのに時間がかかりましたが、今では違和感もなく微生物学の奥深さを実感しています。初代教授の三淵一二先生がはじめられた教科書「微生物学」の編集を柳原先生から引き継ぎ、改訂第6版から増澤先生とともに担当しています。現在第8版の改訂中で、三宅先生にも執筆に参加いただいています。私の任期中に教室名を「微生物学」から「免疫微生物学」に変更し、新たに黒羽子孝太先生、川島

博人先生（現千葉大学教授）、中西勝宏先生が教室に加わり、免疫学の研究をすすめてきました。

学生時代には糖鎖を認識する自己抗体や、自己免疫疾患にかかわるリンパ球の表面糖鎖について研究しました。出身大学で助手としてしばらく勤務し、海外に留学する機会を得ました。東京大学薬学部の恩師の大沢利昭先生には様々な留学先を紹介いただきましたが、私としてはそれまで携わったことがない研究をしてみたいと思っていました。そこで、10人程度の研究者に手紙（郵便です）を書いて留学先として打診しました。そのなかの一人、カリフォルニア大学サンフランシスコ校（UCSF）のSteven Rosen教授から、ある朝国際電話がかかってきて、電話面談のうでで留学が決まりました。UCSFではリンパ球ホーミング受容体の結合する相手が、糖鎖に硫酸基を含む糖タンパク質であることを示しました。米国での研究は、一人の研究者が幅広い研究を行うのではなく、互いを尊重しながら分業で行う、ただし自分のできることは徹底的に行い、議論を欠かさないという点で大変勉強になりました。

日本に戻りしばらく母校で勤務していましたが、静岡県大では新たな研究を進めることにしました。研究対象として、免疫グロブリンA（IgA）を考えました。IgAは粘膜表面で働く抗体で、新興感染症の病原性大腸菌O157がつくるベロ毒素を粘膜表面で撃退するIgA抗体を作ることを目指しました。2002年から10年間、廣部雅昭元学長、木苗直秀元学長のもとで、文部科学省21世紀COEおよびグローバルCOEプログラムが薬学と食品栄養科学の共同で採択されました。そこで、IgA抗体を野菜に作らせ、食べる抗体として利用することを考え、食品の小林裕和教授と共同で研究を推進しました。当初は実現性不明な目標でしたが、レタスにベロ毒素に対するIgA抗体を作らせることに成功し、2019年には植物の専門学術誌に論文が採択されるまでになりました。このような学際的な研究を推進できたのは、静岡県大ならではのことだったと思います。

静岡県大でのもう一つの思い出といえば、張幸先生をはじめ中国の浙江省医学科学院との学術交流があります。また、タイ国のタマサート大学から大学院生のSumateeさんが共同研究のため半年間来学し、研究室で一緒に実験を行いました。本学学生にとってもモチベーションの向上に大変有意義でした。タマサート大学医学部と本学薬学部の学部間協定締結につながりました。大学教員として充実した22年間でした。卒業生・修了生の皆さん、お世話になった本学教職員、静薬学友会、静岡県薬剤師会の皆様、本当にありがとうございました。

新任教授

静岡で新たなスタート

免疫微生物学分野 教授 梅本英司



令和2年4月より免疫微生物学分野を担当することになりました。静薬学友会の皆様にはこの場を借りてご挨拶申し上げます。

私は平成11年に京都大学理学部を卒業後、同生命科学研究所修士課程（稲葉カヨ先生の研究室）を修了しました。その後、大阪大学医学系研究科、宮坂昌之先生のご指導の下で平成18年に博士号を取得し、同研究室にて助教を務めました。宮坂先生の退職にあわせて、平成24年より大阪大学医学系研究科、

竹田潔先生の研究室で准教授として勤務した後、この春より本学に着任いたしました。当分野は昭和33年に静岡薬科大学微生物学教室として開設された伝統ある研究室であり、本学の免疫微生物学分野を主宰させていただくことは大変光栄であると同時に身が引き締まる思いです。これまで諸先輩が築かれてきた伝統を継承しつつ、さらに発展できるように日々精進を重ねていきたいと考えています。

長く関西にいた私にとって静岡は初めてですが、温暖で住みやすい土地だと着任前より多くの方から聞いてきました。本学の瀟洒なレンガ造りの建物と豊かな自然は、腰を据えて研究・教育活動に取り組むには非常に恵まれた環境で、車で入構すると拡がる緑の並木のトンネルに日々新鮮な気持ちに

なって、心が奮い立つのを感じます。

私が研究を始めた当初は、免疫細胞の動態に関わる接着分子やケモカイン受容体の機能解析を行いました。宮坂先生のご指導の下、リンパ球移動に関わる接着分子やケモカイン受容体の機能を解析しましたが、この中には私たちが自身が単離したCD30LG/nepnucin

のような血管内皮細胞上の接着分子が含まれます。この分子は前任の今井康之先生が明らかにされた特殊な糖鎖修飾を受けることでリンパ球ローリングを媒介しますので、これも何かの縁か

と感じ入っているところです。また、私たちはリンパ節内のリンパ球移動にはケモカインだけではなく、特定のリゾリン脂質（リゾホスファチジン酸）が重要であることを見出しました。脂

質代謝分子がリンパ球の動態を制御するという知見は自分にとって新鮮であり、竹田潔先生の研究室に異動してからは腸内細菌が産生する代謝分子に着目した解析を行いました。その中で、腸内細菌由来の代謝分子である乳酸や

ピルビン酸が特定のG蛋白質共役型受容体に結合することで小腸マクロファージの機能を制御することを明ら

かにしました。乳酸やピルビン酸は単純な分子構造をしています。その受容体については殆ど明らかにされておらず、今後、その生理的な役割を明らかにしていきたいと考えています。

私はこのように粘膜組織における免疫細胞の機能解析を軸として、腸内細菌等が産生する生理活性分子やその受容体が免疫系に及ぼす影響、さらには腸内細菌そのものや食事成分が免疫系や広く生体を与える役割を明らかにしていきたいと考えています。このような生理活性分子に対する受容体は新たな創薬の対象になると考えていますし、近年、腸内細菌が健康状態に大きな影響を与えることが明らかになる中で、私どもの研究が社会に貢献できるよう全力で取り組んでいく所存です。本学には熱心な学生が多く、知的好奇心と論理的思考力をもつ学生を育成していきたいと考えています。静薬学友会の皆様にはご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

新任挨拶

創剤科学分野
准教授 金沢 貴憲

令和2年4月1日付で創剤科学分野准教授として着任いたしました、金沢貴憲と申します。この度は、伝統ある静岡県立大学にて教育と研究を行う機会を頂けたこと、大変嬉しく思っております。関係各位の皆様へ感謝申し上げます。わたしは、福岡で生まれ育ち、大学から東京（東京薬科大学）、ボストン（ノースイースタン大学）、千葉（日本大学）を経て、静岡の地にやってきました。学生時代から一貫して、薬剤学（薬物送達学（DDS）、製剤学、薬物動態学）研究に取り組んでいるわたしにとって、静岡といえば、やはり、静岡県立大学薬学部で、研究の連続性を感じています。毎年主宰されている「静岡DDSカンファランス」です。これまで、ほとんど欠かすことなく毎年参加し、ポストドクトラルセッションな

ど発表の機会も沢山いただきました。本カンファランスに参加するたびに、静岡県立大学の諸先生方の研究力・人間力に圧倒されながらも、いつも研究に対する高いモチベーションを頂くことができました。また、静岡に来たときは、必ずさわやかのかのげんこつハンバーグ（たまに五郎十のどんかつ）に静岡おでん、まぐろ料理などをお供に緑茶ハイで乾杯し、家族へのお土産には、あげ潮と追分羊羹を買って帰るのが定番となっていました。要するにわたしにとって静岡と静岡県立大学は第二の故郷と母校くらい愛着ある存在です。

4月から着任してあつという間に半年が経ちましたが、研究室で、近藤啓教授、照喜名孝之助教、そして学生たちとの「剤」を創る、研究に取り組む毎日、とても楽しく充実しております。コロナ禍の影響は依然として大きく、様々な制約はありますが、その中でも学生には、研究の面白さ、研究室生活の楽しさ、そして静岡県立大学のすばらしさを伝え、自信をもって社会へ飛び立てるよう全力で取り組む所存です。静薬学友会の皆様には、ご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

衛生分子毒性学分野
講師 菅野 裕一朗

令和2年5月1日より衛生分子毒性学分野に講師として着任いたしました、菅野裕一朗と申します。静薬学友会の皆様にはこの場を借りてご挨拶申し上げます。

私は東邦大学薬学部に入學し、卒業研究の配属先として公衆衛生学教室を選択しました。学部当時より関心のあった「内分泌かく乱物質」や「生体外異物の毒性」の研究が行われていたためです。その後大学院進学して博士課程を修了しました。その頃より、私は生体外異物などの化学物質の解毒や生理機能のかく乱による有害作用に受容体型転写因子が関与しているため、その分子機構の解明と理解を目指し研究を行なっています。

薬学の研究をしていると必ず「薬は毒である」という考え方に会います。しかし私は毒物として考えられている

「内分泌かく乱物質」による受容体型転写因子の「かく乱」が、薬としての作用になりうるのではないかと、ということに興味を持っています。今はまだ「かく乱」ですがこの作用を希望通りに調節し、治療薬とすることを現在の研究テーマの一つとしています。

幸運なことに、学部生の時よりこのような研究テーマで研究を続けさせていただいております。その際、研究テーマの近い現所属先の教授である吉成先生が発表していた論文を常に参考にしておりました。今回、そのような先生のもとで研究をし、ご指導を賜っていることを非常に光栄に思っております。そして、今回このような社会情勢の混乱の中、私の成長のためにと快く送り出してくださった前所属先の教授の先生もまた、静岡県立大学にて教鞭を取っておられた先生であり、この静岡の地にとても深いご縁を感じています。

このような状況の中、まだ直接お目にかかることはなかなかできておりませんが、静薬学友会の益々の発展に貢献できますように努力してまいります。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

新任教員として

生薬学分野

助教

岸 本 真 治



令和元年十月一日付で生薬学分野の助教に着任いたしました岸本真治です。私は本学の出身ではありませんが、これまで生薬学分野で特任助教として四年間、助教として十か月過ごしましたのでその経験も踏まえご挨拶させていただきます。

私は薬学の教育課程が四年制と六年制に分かれた平成十八年に京都大学薬学部薬科学科（四年制課程）の第一期生として入学しました。薬を作る方に興味を持っていたので四年制を選んだわけですが、研究室配属される四回生までは部活動一色の日々だったのが実態です。他学部の人と交流でき視野を広げられる貴重な時間を過ごしましたが、もう少し勉強しても良かったかなと反省しています。

一方、研究室配属後は研究に打ち込む生活でした。私の専門は天然物化学

で、様々なアッセイを用いて微生物抽出物から有用な新規化合物を探索していました。新しいスクリーニング方法を試すなど試行錯誤し、ようやく新規化合物を見出した時は自分の構造があっているか一抹の不安を覚えながらもわくわくしたのを覚えています。その後、こちらに特任助教として赴任してから是有機化学や生化学、生物工学を用いて天然物の生合成酵素のメカニズム解明に取り組んできました。

助教になってからは学生にそれぞれテーマを与えて研究を指導していますが、学生と一緒に自分で実験をしていた特任助教のころとは違った難しさを感じます。自分が実験していれば気づく小さな違和感（研究の突破口になる！）の見逃し、気づかずには犯しているだけではわからないことも多くあります。自分が実験したい気持ちを抑えつつ、学生が注意深く論理的に物事を捉えて解決する能力を身に付けられるように導いていきたいと考えています。

至らない部分も多いかと思いますが皆様からご指導、ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

医薬生命化学分野

助教

宋 復 燃



令和2年4月1日付で薬学部医薬生命化学分野の助教として着任いたしました、宋復燃と申します。どうぞよろしくお願いいたします。中国湖南省の人口およそ数万人の小さな街から静岡に来て8年目となります。静岡の優しい気候と静岡県立大学の先生と学生の二の故郷と思っております。この度、静岡県立大学薬学部の教員として研究、教育に携わる機会をいただけたこと、大変嬉しく思っております。

私は学部までは中国で育ち、華中科技大学薬学部（薬科学）の卒業研究の時、初めてリポソームと出会い、リモートローディング法でくすりを内封し、作製したリポソームをin vivoで評価するという研究テーマをいただきました。そのお陰で、研究の大きな世界が目の前に開けて以来、DDSの研究

に熱い気持ちを持っておりました。当時海外に一度も行ったことがない私は、勇気を持って卒業後に日本へ留学する決意をしました。その後、静岡県立大学大学院に入学して医薬生命化学研究室に入り、修士課程を経て、博士課程へ進学し、博士号（生命薬科学）を取得いたしました。修士から、ずっとsiRNAを中心に核酸をデリバリーする脂質ナノ粒子（LNP）の研究を行なっております。2018年に世界初のsiRNA製剤ONPATRO®がFDAに承認されて以来、LNPによる核酸デリバリーシステムの開発は世の中で熱く盛り上がりつつあります。新型コロナウイルスの中、LNPを使用したmRNAワクチンの開発にも大きな関心が集まっております。LNPを用いた核酸デリバリーには無限の可能性があると感じております。

新型コロナウイルス禍の中、大学教員として着任し、大きな責任感を感じながら、新たな研究や教育に日々励んでおり、あつという間に月日が過ぎました。まだまだ分からないことばかりの未熟者ですが、静薬学友会の皆様方には、今後ともご指導ご鞭撻をいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

ふじのくに静岡に赴任して

創剤科学分野 助教 照喜名 孝之



簡単ではありますが自己紹介をさせていただきます。

はじめまして。令和2年10月1日付で創剤科学分野に助教として着任しました、照喜名(てるきな)孝之と申します。静薬学友会の諸先生方、会員の皆様にはこの場をお借りしてご挨拶申し上げます。

着任して1年近く経ちますが、来当初から引越してきた自宅前の川が台風で氾濫しそうになりましたし、年明けからは新型コロナウイルスの猛威が続いており、何かと自分にとっては順調に仕事をこなせない状況が続いておりますが、歴史と伝統のある静岡県立大学薬学部で研究・教育に携われることに幸福感をもっております。精進しながら前を向きながら責任感を持って、研究室さらには大学を通して、社会貢献できるようにして参ります。

私は名前の通り、沖縄にも住んでいた時期はありますが、大方高校まで福岡県福岡市で育ち、その後、名古屋市立大学薬学部薬学科を経て同大学大学院薬学研究科を卒業しました。6年制過程の1期目ということで、まだシステムが確立されていない中、どさくさに紛れて薬剤師免許を取得し、その4年後、博士号を取得いたしました。博士課程では骨の再生のための徐放製剤研究について取り組み、修了後は、武蔵野大学薬学部にて主に製剤学研究に携わってきました。製剤は患者さんが服薬する医薬品そのものであるため、製剤学はユーザーに最も近い実学の学問であることを徐々に自分の中で実感してきて研究の方向性を考えていたところ、近藤啓教授にお声がけしていただき、教授のご指導のもとユーザーを意識したモノづくりの基礎研究を全力で行っております。まだまだ至らない点が多くあるかと思いますが、静薬学友会の皆様には今後ともご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

薬学部教員の人事異動

退職

衛生分子毒性学分野	講師	佐々木 崇光	令和2年1月
免疫微生物学分野	教授	今井 康之	令和2年3月
薬剤学分野	講師	世戸 孝樹	令和2年3月

着任

生薬学分野	助教	岸本 真治	令和元年10月
創剤科学分野	助教	照喜名 孝之	令和元年10月
医薬生命化学分野	助教	宋 復燃	令和2年4月
免疫微生物学分野	教授	梅本 英司	令和2年4月
創剤科学分野	准教授	金沢 貴憲	令和2年4月
衛生分子毒性学分野	講師	菅野裕 一朗	令和2年5月

昇任

生体機能分子分析学分野	准教授	水野 初	令和2年4月
薬剤学分野	准教授	佐藤 秀行	令和2年6月

研究室だより

生化学分野

生化学分野では、鈴木隆教授を中心として、核酸やタンパク質と並ぶ第三の生命鎖である糖鎖の機能解明と創薬への応用を目指し、ウイルス・神経・がんをキーワードに、高橋忠伸准教授、南彰講師、紅林佑希助教がそれぞれ研究室を担当し、研究を進めております。

当分野では現在、基礎研究のみならず、広島国際大学の池田潔教授（昭和54年静岡薬大卒）をはじめ他分野の先生方との共同研究により、糖鎖利用技術の開発にも取り組んでおります。紅林助教は昨年4月より1年間、米国ロチェスター大学に留学され、本年4月より研究室に復職されました。現在、当分野は大学院博士後期課程2年1名、1年2名（マレーシアからの留学生を含む）、大学院博士前期課程2年1名・1年1名、学部6年4名・5年6名・4年6名の計21名の学生が所属しています。

本年度は新型コロナの影響で、自宅待機で始まりましたが、5月中旬からは感染対策を施しながら研究活動を再開しています。学生は精力的に研究や勉学に取り組み、多くの賞を受賞しています。ここ1年間の受賞は、第24回静岡健康・長寿学術フォーラム（内野峻介さん、藤田優香さん）、第8回食

品薬学シンポジウム（三上靖代さん）、日本薬学会東海支部大会（安部友涼さん）、第3回ノビレチン研究会（Azliza Mad Anuarさん）、本学薬学部成績優秀者賞（山崎美佳さん）、同大学院領域優秀者賞（榎原佳子さん）、第35回老化促進モデルマウス（SAM）学会学術大会（藤田優香さん）です。

その他、最近の研究内容や成果、トピックスについては、当研究室のホームページ（<https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/biochem/>）をご覧ください。なお、本年度末に鈴木隆先生が退官を迎えられます。令和3年2月20日（土曜日）に最終講義（開催形式は未定）を予定しています。

今後ホームページなどに掲載される情報をご参照いただき、奮ってご参加ください。教室員一同、コロナ禍が早期に終結し、卒業生の皆さまに会えることを楽しみにしております。



2020年3月 卒業式にて

衛生分子毒性学分野

衛生分子毒性学分野は、吉成浩一教授が着任して7年目を迎えました。本年5月より、菅野裕一朗先生が講師として着任され、吉成教授、菅野講師、保坂助教、志津助教の教員4名体制で、学生、研究補助スタッフの皆さんと研究室を運営しています。

当分野では、「化学物質からヒトを衛る」をメインテーマとして、化学物質による毒性発現機序や感受性要因等を同定し、またその予防法の開発に向けて実験動物や細胞等を用いたウェットな実験から、コンピュータを利用したドライ解析まで毎日精力的に研究を進めています。学生は週に1回の研究室セミナーにおける発表で、プレゼン能力を訓練し、また月に1回の教員4名と各研究グループによるグループミーティングで、各々の研究について深く議論し、グループ内での相互理解を深めています。

学生たちの日々の努力と共同研究者、関係者のご協力、ご支援により、毎年10報ほどの原著論文を報告し、国内外の学会において発表賞を受賞しています。昨年度は、日本毒性学会学術年会において米川恵理さんが学生ポスター発表賞、日本薬学会東海支部総会・大会において大垣内杏奈さんが学生優秀発表賞、日本動物実験代替法学会において柊久保善博くんが学生優秀演題賞、国際薬物動態学会において志津助教が

ベストポスター賞を受賞しました。また、当研究室が Journal of Toxicological Sciences誌に発表した論文が日本毒性学会田邊賞を受賞しました。

研究の間には、今年度はまだ実現できていませんが、ボーリング大会、ソフトボールやバドミントンなどのスポーツ、教室旅行、宴会を行い、親交を深めています。昨年の研究室旅行では1泊2日で箱根に行ってきました。研究成果、学会発表、イベント等の教室員の活躍は当分野のホームページに随時掲載して参りますので、是非ご覧ください。

末筆ながら、静薬学友会の皆様には変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。



2020年3月 卒業生と薬学部棟前にて

薬理学分野

左記を予定しておりましたが、新型コロナウイルスの影響により中止致しました。

【石川先生還暦祝い】

令和2年10月31日(土)

ホテルシティオ『The garden CITIO』

参加予定者…教職員、学生、卒業生

約200名

薬理学教室では毎年春と秋に卒業生に声をかけ、在校生、教職員との交流会を開催しております。しかし、今年度は新型コロナウイルスの影響により実施できておりません。落ち着きましたら、OB会を盛大に開催する予定です。その際には、たくさん卒業生の皆様のご参加をお待ちしております。

お知らせ

今年度、薬理学教室にナイジェリアからの留学生が入学しました。9月、和田祐輔さんが博士課程を修了し、学位を取得されました。

研究活動

薬理学教室では、現在、主に糖尿病関連疾患を研究ターゲットとし、薬理学的解析はもとより、電気生理学、生化学、分子生物学、遺伝子工学的解析を駆使することで、膵内分泌細胞や肝星細胞の機能調節に関わるシグナル伝達研究を行っています。

研究を行う上で最も大切なことは、研究の背景を理解し、その研究の目標や目的を明確に定めることです。そして、実験終了時には、その研究成果を英語論文として発表することが重要です。研究体制は変わっても、今後もこうした研究のプロセスを学生が実践できるように、指導を続けていく所存です。



2019年11月13日 留学生の歓迎会（静岡県立大学薬理学教室図書情報室）にて

医薬生命化学分野

我々、医薬生命化学分野が専門とするナノ粒子を用いた薬物送達システム(DDS)は、創薬シーズや既存薬の価値を高めるいわば薬の理想を追求する研究分野です。現在ではがん、脳梗塞、炎症性腸疾患、および腎疾患などをターゲットにして、先駆的な基礎研究を展開しております。今年は新型コロナウイルス禍により、様々な変化に対応することを強いられておりますが、着実に研究を進めるよう研究室一丸となつて取り組む毎日です。例年行っていたスポーツ、懇親会、研究室旅行等は控えていますが、最近の出来事として2020年4月に宋復燃先生が助教として着任し、研究室を活性化しています。2019年9月に開催された国際学会Liposome Research Daysにおきましては、奥直人名誉教授の Bangham Award 受賞に学生も刺激を受け、佐伯榛子さんが「The best poster award」、高杉昇平さんが「Travel grant」を受賞しました。佐伯さんは2020年1月ISNA国際学会でも活躍し、「Excellent Shotgun Poster Presentation Prize」を受賞しました。さらに2020年3月、日本薬学会第140年会の開催は中止となり

ましたものの、小出裕之講師が「日本薬学会奨励賞(演題名「機能性ナノ粒子を用いた難治性疾患治療法の開発」)」を受賞しました。独創的な研究業績と将来を嘱望される若手研究者に贈られる賞で、小出先生の更なる活躍が期待されますとともに、研究室全体を明るく前向きにしてくれる出来事でした。最近の研究成果ならびに教室の活動状況はホームページに掲載しておりますので是非ご覧下さい(<http://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/~radiobio/>)。最後になりますがOB・OGの皆さま、ご健康にはくれぐれもお気を付けてお過ごしください。皆さまに会える次の機会を研究室一同楽しみにしております。



2020年3月19日 学位授与式 モニュメント下にて

身体運動科学分野

本学に赴任し身体運動科学分野を担当して6年目を迎えました。担当科目では、私の専門分野である健康管理学や健康運動心理学の観点を活かした授業を行っています。また研究室としては、健康の維持・増進を図り、社会環境と良好な関係を構築する上で必要な知識・スキルの習得や、運動実践による心理的効果などに関する調査研究及び教育を行っています。

私は、本学全体での身体運動科学の通年17.5本の授業運営に加え、体育関連の用具・施設の管理、非常勤講師のコーディネート、体育会部活動活性化のための支援活動なども一手に担当しております。日々の授業では、運動技術の習得のみならず、体育を一つのツールとして、学生が自信やライフスキルを身に付けられるような実践を行っています。大学における体育授業は、身体を動かしたりすることを習慣化される最後の機会となります。授業の内容や進め方を工夫することで、体力向上・技術習得はもちろん、ライフスキルの獲得やメンタルヘルス改善の効果も期待できます。特に1年次には「仲間づくり」の手段にもなり、大学生活への適応や良好な人間関係の構築のための有効なツールにもなり得ます。ここ数年では、各施設の利用者説明会などを開催したり、施設毎に使用上の注意看板を作成することで、本学施

設をより気持ちよく利用していただけるよう貢献しました。また夏期には、ライフスポーツとして、アーチェリーやトランポリンなど新しいスポーツ種目を体験できる機会を設けました。このような新しい取り組みを通じて、本学の学生・先生方に身体運動科学の考え方を広げられたと感じています。今後も独自の授業実践を通じて上記のような教育効果を効率よく得られるよう授業の改善に努めるとともに、自身のテニス経験を活かした部の顧問として、学生と共にスポーツを通じた本学のブランドマネジメントに貢献できれば幸いです。今後とも変わらぬご支援とご指導を賜りますようお願いいたします。



ライフスポーツ トランポリン授業集合写真 (2019年9月撮影)

生体機能分子分析学分野

当分野は今年度より水野初先生が准教授に昇任され、轟木教授、水野准教授、杉山助教の3人体制となりました。名誉教授の豊岡先生にもサポートいただきながら、学生と毎日精力的に研究を行っています。

当研究室の主な研究テーマとしては、次世代バイオ医薬品の新規分析法の開発、単一細胞メタボロミクスのための超微量成分の高感度・高精度分析法の開発、オミクス解析のための新規分析ツールの開発、質量分析イメージングのための特異的検出法の開発などを行っています。また、各種疾患の早期発見や再発予防、薬効評価を目的として、ポイントオブ検査法の開発や、無侵襲検査法の開発等も進めています。

これらの研究を支えてくれている学生諸君は、日々切磋琢磨しながら高いモチベーションで研究を行っています。その成果は、昨年度の本学修士論文口述発表会における優秀発表賞、学会での優秀発表賞受賞など、学生個人としても高く評価されました。また、研究以外の活動にも励んでおり、学内バドミントン大会、フットサル大会、ソフトボール大会等では順調に勝ち進んでおります。

昨年度の修了・卒業生は、大塚製薬、小野薬品工業、生化学工業、

キッセイ薬品工業、ライオンへの就職や博士前期課程への進学を選択し、各々の道で活躍しています。今年度はコロナウィルス感染症の影響が避けられず、例年通りの活動が難しい状況にありますが、引き続き価値ある研究成果の創出と良い人材の育成に努めて参ります。詳しい研究内容、研究室行事、学生の活躍等はリニューアルした研究室HPでご覧いただけます。最後になりますが、静薬学友会の皆様には変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。



2020年3月 学位記授与式 大講堂前にて

医薬品製造化学分野

2020年になり、菅が田中圭先生の急逝を受け、ドタバタ状態にて赴任してから15年が経ちました。この間、優秀なスタッフと明るく素直な学生の皆さんの協力により、円滑な研究室運営ならびに研究教育ができていますが、今年はコロナ禍のため非日常的状态を強いられています。しかし、「どんな困難な状況も諦めること無く」という全合成の強い精神に倣い、教室員全員が前向きに頑張っております。例えば、研究室の文献セミナーはZoomによりWeb開催し、教員がTabletのホワイトボード機能にて解説のフォローをしています。反応機構を学ぶ機会も減ったため、学術雑誌(Organic Syntheses)から選別した5問の解答を毎週提出することで、教育効果も維持しています。

さて、このような状況にて、2020年3月に追いコンも卒業式もなく研究室を巣立った学生は、大西琢磨(大阪合成有機化学研究所)、木村直人(大塚製薬)、高橋航(三井化学アグロ)、葉山智拓(大塚化学)、坂井宥哉(京都大学大学院薬学研究所)です。本当に残念でしたが、平穏な日常が戻り「あんなこともあったね」と大いに飲んで笑って話せる日が、早く来ることを信じています。

また、大学は研究教育機関として人材の輩出が重要なミッションです。当

研究室では、我が国を支える「ものづくり」を基盤とする産業界への人材供給が重要と考え、力量のある有機合成化学者の育成に主眼を置いています。さらに、力強い有機合成化学の教育には「天然物の全合成」が最適であるとの信念を持っています。この研究方針に共感してくれる学生さんは多く、他

大学や他学部出身の大学院生も在籍しています。博士課程には昭和薬科大学、千葉大薬学部、神奈川工科大学工学部出身が、修士課程には明星大学理工学部、横浜薬科大学、北海道大学理学部、明治薬科大学、城西大学薬学部、工学院大学先進工学部出身者が在籍しています。このようなヘテロな環境は、必ず将来プラスになると信じています。



薬剤学分野

薬剤学分野では、尾上誠良教授を中心として、教員3名、博士課程5名、修士課程2名、学部生15名のメンバーで研究・教育活動を行っています。2020年3月には、世戸孝樹講師が岐阜医療科学大学薬学部准教授としてご栄転されました。世戸先生の新天地での活躍をお祈り申し上げます。2020年6月からは佐藤秀行講師が准教授に昇任、10月からは当分野出身の山田幸平助教が着任され、スタッフ・学生一丸となって大きな成果をあげるべく日々研究を進めています。当分野における教育・研究活動や各種イベント等に関しては、Webサイト(<https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/yakuzai/>)の「タイムリー」に報告しておりますのでご覧頂きますと幸いです。

クスリを逆から読むと「リスク」(risk)となりますが、実際に薬効と副作用は表裏一体で、どのようなクスリでも副作用は発生してしまいます。そこで私たちは投薬した後のクスリが体内でどのように動くのか詳細に把握し、そのクスリの体内での動態制御による薬効改善・副作用回避を目指して次のような研究を推進しています。(1) 薬物動態制御による副作用の回避。(2) ナノテクノロジーや物性制御を利用した薬物動態・薬効の改善。(3) 病態下の薬物動態変化解析とそ

の戦略的な回避方法探索。(4) 薬物の物性・動態情報からの副作用リスク予測。

本研究室出身者は、薬剤学に関する基礎研究から臨床研究まで視野にわたる幅広い経験を活かし、医療機関、製薬・食品企業、行政機関や教育機関など様々な分野で活躍されています。今後も研究活動を通じて薬の専門家としての研究技能・知識とコミュニケーション能力を併せ持つ薬科学者を育成し、変化し続ける社会のなかでリーダーシップを発揮できる人材を輩出できるように邁進して参ります。今後とも皆様からのご支援を賜りますようお願い申し上げます。



忘年会での集合写真 (2019年12月20日)

臨床薬剤学分野

臨床薬剤学研究室は、2002年度に本学で初めての臨床系講座として開設され、2005年度から賀川教授が主催しています。なお、学部運営上、薬局管理学を含めて活動しています。

研究インフラは草薙キャンパスと静岡県立総合病院内にあります。病院内の研究室は、2002年に開設され、2008年に循環器病センター6階に移設され、さらに2017年9月からは新築された先端医学研究棟内に再移設されました。地方自治体が設立した病院内に薬学部の実験室を設置することは極めて珍しく、我が国におけるモデル事例とされており、内外から注目されています。2019年3月で石井康子講師が定年退職し、2019年4月より後任に浜松医科大学医学部附属病院から大澤隆志講師が着任しています。

教育面の実習関係では、6年制課程の病院・薬局実務実習（5年次）を担当しています。講義では、早期体験学習（1年次）、医薬品安全性学（3年次）、薬学と社会Ⅰ（3年次）、医薬品情報学Ⅰ（3年次）、薬学と社会Ⅱ（4年次）、調剤学（4年次）、薬物治療学特論（大学院）等を担当しています。研究面では臨床現場の問題点を臨床薬物動態学、臨床薬理学および臨床製剤学的アプローチで解決する研究を行っています。また、近年話題のサ

プリメントにも着目し、サプリメント成分の動態を検討し、サプリメントに関するエビデンスの構築も手がけています。臨床研究では症例数の集積に時間がかかり、数年をかけて論文1報を完成させるような根気強い研究姿勢が必要になります。当研究室では、学生、大学院生（博士課程4名）および教員が一丸となり、粘り強く、かつ質の高い臨床薬学研究を通して、薬物治療成績の向上に取り組んでいます。これからは、当研究室は臨床薬学研究で社会に貢献できる卒業生や修了生を輩出できるように精進しています。

教員・賀川義之教授、宮崎靖則准教授、内野智信講師、大澤隆志講師、谷澤康玄助教



2020年度に配属となった4年生

創剤科学分野

近藤啓教授が創剤科学分野を主宰して3年目となりました。昨年の10月に武蔵野大学薬学部より照喜名助教が、本年4月に日本大学薬学部より金沢准教授が赴任し、教員3名の新体制となりました。本年度は、大学院生博士課程3名、博士前期課程4名、学部生12名、研究生1名の計23名で研究活動をスタートしております。「実用化に繋がる基礎研究」をキーワードに、経口固形製剤化技術開発、粉体工学研究に加え、新しいモダリティをヒトに投与可能にする製剤・DDS技術の研究開発を展開しています。製剤学はユーザーに最も近い学問領域の一つです。で、学生には「自分が創った製剤を大切な人に投与することができるか」を常に問いながら研究を進めるように指導しております。

当分野は静岡薬科大学時代の1967年に誕生し、50年以上の歴史を有しております。この間、薬学を取り巻く環境は大きく変化しました。分析機器、製造装置が進歩し、取り扱うモダリティも多様化しましたが、当分野は一貫して製剤学に関わる研究に従事しております。これまで多くの先輩方が時間をかけ、知恵を絞り、積み上げてくれた製剤学に関する経験と知識の延長線上に、我々の研究が発展していくよう努めます。体制の刷新とともに。当分野のHPを一新しました

(<https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/pharmeng/>)。今後、内容を充実させて参りますが、現在取り組んでいる研究テーマや行事等について紹介しております。お時間が許すときにでもご覧いただき、ご指導いただけますと幸いです。

新型コロナウイルス感染症の影響のため、研究活動や様々な行事等は多少少なかれ制限を受け、学生はいつもとは違う研究室生活を余儀なくされていますが、どんな状況下に置かれても薬学の楽しさを追求する気持ちをもち続ける前向きな姿勢を示してくれています。薬を創る（研究者）および薬を扱う（薬剤師）役割を担う人材を継続して育成して参ります。引き続き、ご支援のほど宜しくお願いします。



写真は2020年度のメンバーです。2020年8月撮影

分子病態学分野

分子病態学分野は森本達也先生が教授に就任してから今年で12年目に入りました。今年度は森本達也教授を始め、刀坂泰史講師、砂川陽一助教、宮崎雄輔助教の教員4名、研究補助員2名、大学院生6名（うち博士課程4名）、学部生16名の総勢28名です。新型コロナウイルスの影響もあり、例年とは様相が異なる研究室ですが日々過ごしています。

当研究室では心血管疾患の創薬を目指し「心不全発症に関わる心筋細胞内シグナル伝達機構の解析並びに心不全治療・予防を目指した天然由来成分の探索」をテーマに研究を行っています。留学生のNurmila Sariyんの研究である『Cacao Bean Polyphenols Inhibit Cardiac Hypertrophy and Systolic Dysfunction in Pressure Overload-induced Heart Failure Model Mice』がPlanta Medicaの博士課程の清水果奈さんの研究である『The Synthetic Curcumin Analogue GO-Y030 Effectively Suppresses the Development of Pressure Overload-induced Heart Failure in Mice』がScientific Reportに掲載されました。また、第20回日本抗加齢医学会総会では刀坂泰史先生が研究奨励賞を受賞しました。今後の活躍に期待です。

学会活動では、昨年度スペイン・バルセロナで開催されたEuropean Heart

Congressに、砂川陽一助教と大学院生の清水聡史君が参加、アメリカのフィラデルフィアで行われたAmerican Heart Associationには大学院生の船本雅文君と清水果奈さんが参加し、研究成果を発表しました。また、本研究室が事務局として5月に開催する予定だった第15回日本禁煙科学会総会は12月に延期となりました。難しい判断を求められる局面も多々あり、スタッフ一同、今まで以上に慌ただしくしています。

OG・OBの皆さん、新型コロナウイルスが落ち着き、静岡に立ち寄る機会がありましたら是非とも研究室にお立ち寄りください。卒業生の近況や体験談は在学生にとって大きな励みになります。最後になりますが、今後とも皆様からのご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。



2020年2月13日 修士論文発表会にて

生体情報分子解析学分野

生体情報分子解析学分野は、黒川洵子教授が着任してから今年で4年目となりました。令和2年度は、コロナ感染拡大により、波乱の幕開けとなりましたが、教室のミッションである「個別化医療に貢献する基盤研究」は不変です。4月には、1名の薬食生命学府修士1年生と6名の薬学科4年生が配属され、学生18名、黒川教授、坂本准教授、山崎講師、山口助教、秘書・山崎の総勢23名です。当分野では、薬物療法の対象となる生体の生理学的特性に応じた医薬品の作用特性を分子レベルで理解することを目指しています。具体的には、心血管病性差の分子メカニズム、ヒトiPS由来心筋を用いた非臨床安全性評価系の構築、骨格筋における性差発現メカニズム、コレステロール胆石症における発症性差の解明、脂肪幹細胞の維持機構をテーマに行っています。これらの研究を支えてくれている学生諸君は研究に対して日々活発な議論を交わしており、その成果は様々な学会で発揮されています。

最近1年間を振り返ってみますと、昨年7月の第65回日本薬学会東海支部総会・大会では桑原泰斗君が学生優秀発表賞を、昨年10月の第14回日本薬理学会関東部会では岩崎菜々美さんが優秀発表賞を、昨年11月の第21回応用薬理シンポジ

ウムで寺阪祐紀さんが優秀ポスター賞、第24回静岡健康・長寿学術フォーラムで鈴木一生さんがポスターセッション優秀賞を受賞しました。

今年から3年前期の医療系薬学実習（薬理）を担当することになりましたが、コロナウイルス感染拡大で対面の実習ができなくなりました。そこで、急遽シミュレーションプログラムを使ったバーチャル実習に切り替えて大忙しでしたが、研究室一丸となって対応しました。実習の様子は大学広報からの取材も受けました（写真参照）。これからも先進的な取り組みに果敢に挑戦して研究室を盛り上げていきたいと思っておりますので、皆様からのご支援を賜りますようお願いいたします。



バーチャル薬理学実習の様子

臨床薬効解析学分野

臨床薬効解析学分野は本年度で15年目を迎えます。当研究室では、「医療現場からシーズを見つけて研究を展開し、その成果を現場や社会に還元する」とことを目指して基礎と臨床の橋渡し研究に取り組んでいます。当研究室は2017年に静岡県立総合病院内に新設された先端医学棟にも研究室を設置しています。このランチ研究室を拠点として、県立総合病院をはじめ、県内外の医療機関等と連携し、臨床的な課題に対して共同研究を進めています。新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、多くの学会が中止となるなか、昨年は学生の学会賞の受賞はありませんでしたが、平井啓太講師が「臨床薬理研究振興財団 研究大賞」を受賞することが決定しました。この賞は財団からの研究奨励金により実施された研究の中から、革新的かつ更なる発展が期待できる研究を表彰するものであり大変栄誉ある受賞といえます。

教育面では、県立総合病院における実務実習指導という重要な役割を担っており、改訂モデル・コアカリキュラムに対応した実習が2年目を迎え、実務実習がより充実したものとなるよう日々取り組んでいます。

今年は研究室の在り方について試行錯誤を重ねた年でもありました。年中行事として恒例のお花見、新入生歓迎会、研究室旅行などのイベントが相次

いで中止となり、研究室開設15周年を記念する同門会も中止に追い込まれました。セミナーや共同研究機関との打ち合わせは、オンラインで実施されるなど研究活動の在り方も大きな変化を迎えています。日常の当り前を喪失するということは失ったものの価値や意味と向き合い思考を深めるよい機会でもあります。コロナ禍の先を見据えた研究室のあり方を検討し、それぞれが臥薪嘗胆の思いで力を蓄える時期かもしれません。

研究室行事や研究成果は、ホームページ、またはFacebookに随時公開していますのでご覧ください。これからも精力的に研究活動を行いつつ、充実した研究室生活を過ごせるよう体制を維持していきたいと考えています。



2020年3月19日 学位記授与式

医薬品情報解析学分野

当研究室は2005年に発足し、本年度で15年目を迎えます。その間、多くのOB・OGを輩出し、病院・薬局を始め、製薬会社の統計解析・データマネジメント部門、行政機関等で幅広く活躍しています。

当研究室のポリシーは、薬学教育の中で重要な分野である新薬の臨床開発や臨床研究に必要な臨床研究方法論、生物統計学、疫学、EBM等の教育ならびに研究を実践することです。このような理念を掲げた研究室は薬系大学では極めて珍しく、まさに時代に先駆けた研究室と言えます。

教育面では社会人にも門戸を広げた「CRC/CRA養成講座…創薬育薬基礎・応用特論」を毎年開講し社会的にも高く評価され、2007年から日本臨床薬理学会の認める「認定CRC更新のための講習会」に認定されています。またファルマバレーセンターと連携し、静岡県治験ネットワークの発展のためにCRCの養成や臨床試験実施体制の整備にも力を注いでいます。2010年には静岡県立総合病院内に当研究室の分室が開設され、データマネジメント・統計解析機能を有する分室として、医療機関・大学連携による臨床研究の質を担保する拠点となることが期待されています。

研究面においては、静岡県立総合

病院ほか、多くの医療福祉機関との連携で多施設共同研究、企業との共同研究等を実施しています。特に緑茶の感染症予防や認知機能への影響に関する臨床研究はマスコミでも大きく取り上げられています。また、国立健康栄養研究所との共同研究で健康食品の安全性評価に関する研究も継続しています。新型コロナウイルス感染拡大のオンライン環境を整備し、大学院生・学部生等による研究成果も着実に積み重ね、今後、更なる高みを目指した活動を行っていきたいと思います。今後とも皆様からのご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。



2020年3月19日 学位記授与式、卒業生と学生たち

実践薬学分野

実践薬学分野は並木徳之先生が教授に就任して、今年で13年目に入りました。

当研究室では、苦い薬であっても薬に服用でき確実な治療効果へとつなぐ第一歩とするために、菓子を応用した実用化製剤の研究開発など、患者ベネフィットを追求した研究を行っています。加えて、薬物が相互作用などにより薬物動態や効果にどのような影響を及ぼすかについて、病院及び製薬企業との共同研究を行っています。

本研究室では「屋根瓦方式」をモットーにしています。少しずつ重なり合うことで強度が増す屋根瓦のように、上級生が下級生を教えることはもちろんのこと、当研究室を卒業した学生OB・OG、そして社会人大学院生とその卒業生が手を取り合いながら助け合う、共育体制となっています。その一環として、年1回のペースで実践薬学セミナーを開催し、在校生による研究発表や、同窓生を中心とした講演会、情報交換や親睦を深めることを目的とした懇親会を行っています。

昨年の10月からこれまでの学会発表において、American Association of Pharmaceutical Scientist (AAPS) では杉本光輝さんが2019 AAPS Best Abstract Award、日本薬剤学会第35年会では豊田遼さんが七つ星薬師奨励賞を、石井巧真さんが大学院学生ス

カラシップを、芦原まいかさんが「薬と健康の週間」懸賞論文で第2席を、それぞれ受賞しています。これらの結果は、本人の頑張りだけでなく、当研究室の屋根瓦方式の成果と思っています。

本年度はCOVID-19の影響により、これまで10年連続で行われていた実践薬学セミナーを中止せざるを得ない状況になるなど、多くの面で自粛した生活を送っています。その中で、研究室メンバー一同、研究室活動を行っています。引き続き、ご支援ご指導のほど、よろしく願います。



2019年8月 第10回実践薬学セミナーにて

医薬品化学分野

当研究室では現在、新規化学合成法の開拓を主な目標として、いろいろな研究を行っています。これらの研究を通じてこれまでに、安全・簡便な化学合成を可能とする一酸化炭素等価体の開発や、二酸化硫黄等価体を用いる新規触媒反応の開発、位置選択的反応を実現する新規触媒の開発、をはじめとする様々な成果を得てきました。現在は、さらに研究を進展させることができよう努力精進しています。全員が難しい課題にチャレンジし、困難に立ち向かいながら、なおかつ楽しんで研究しています。今後、どんなおもしろい結果が出てくるのか楽しみです。

この1年の間でのうれしいニュースとしては、令和2年度の4年生として今年も5名の卒研生が仲間に加わってくれました。今後の活躍を期待しています。令和2年度からは、卒研生の研究室配属が3年次後期からになるため、10月からは3年生も新たにメンバーに加わる予定です。楽しみにしています。

昨年度末から、新型コロナウイルスの活動が制限されています。研究室でも、例年行っている多くの行事（年度末送別会、お花見、バーベキュー、研究室旅行な

ど）を中止せざるを得なくなりました。また、令和2年3月末の日本薬学会年会（京都）も開催が中止となり、発表予定だった学生たちも参加できなくなりました。皆、なかなかおもしろい研究成果を得ていただけに、現地での発表ができなくなり大変残念です。研究室での実験も制限されていた時期があり、その時は在宅で勉強をして過ごすこととなりました。研究室内のセミナーも、遠隔会議システムを活用した方法で行わざるを得なくなりました。このような状況でも研究室員たちは、研究を少しでも進めようと日々頑張っています。来年は良い年になりますように。



ラボ風景

生命物理化学分野

各地で豪雨災害をもたらした梅雨前線がようやく衰え、今年は例年よりも遅い梅雨明けとなりました。太平洋高気圧とチベット高気圧の影響で、8月上旬から猛暑日が続いています。熱中症と新型コロナウイルス感染症の対策の両立に苦慮しながら研究活動を行っています。今回も昨年10月からの研究室の状況について簡単に報告いたします。

秋の学会シーズンでは、10月に第8回食品薬学シンポジウム（静岡県大）、11月に第24回静岡健康・長寿学術フォーラム（グランシップ）、日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会（名古屋市）、日本結晶学会年会（金沢）において、学部生あるいは大学院生が研究成果を発表することが出来ました。また、12月には6名の薬学科6年生が卒業研究発表会で成果発表を行いました。この頃から海外での新型コロナウイルス感染症の感染拡大に関するニュースが報じられ、その後、国内でも感染が拡大しました。そのため、学生が発表を予定していた3月の日本薬学会第140年会（京都）や量子ビームサイエンスフェスタ（水戸）など、多くの学術集会が中止となりました。また、グランシップや草薙キャンパス大講堂での学位記授与式、恒例の謝恩会、研究室ごとの送別会など、学生時代の思い出となる

多くの卒業関連行事が中止となりました。そのような状況の中、薬学科6年生全員が2月下旬の第105回薬剤師国家試験を無事に乗り越え、社会へと羽ばたいていきました。4月からはオンライン授業、テレワーク、在宅での研究活動など、学生・教員の双方が経験したことが無い活動形態に戸惑いました。現在、研究室での研究活動は再開されましたが、会議や授業はオンラインが当たり前となっています。ウィズコロナ時代と言われていますが、一日も早く終息することを願ってやみません。



研究室での学位記授与後、モニュメント前での記念写真（2020年3月19日）

医薬品創製化学分野

私たちの研究室は今年で8年目を迎えました。私たちは、新しい作用機序に基づく有機分子触媒を開発し、生物活性物質を効率的に「作る」研究と、人工機能を付与した生体関連分子を「創る」研究を行っています。最近では、医薬品を短工程かつグリーンに合成することを目的に、光エネルギーを利用した新しい分子変換技術の開発にも取り組んでいます。その成果は国内外から高く評価されてきており、学会発表でも多くの賞を受賞しています。

ここ1年間の受賞では、小林史尚さんが2つの学会で連続受賞を達成したことに加え、江上講師が'Trieme Chemistry Journals Award'を受賞しました。今後、新たなことに挑戦し続けて参りますので、ぜひその成果を当研究室のホームページ(<https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/jsoc/index.html>)より確認下さい。

今年度の研究室配属は当研究室を希望する学生が多く、有機化学が好きでやる気のある学生が6名加わってくれました。昨年に続き2名の女子学生が入ってくれて、さらに華やかで活気溢れる研究室になりました。今年はコロナ禍で配属後すぐに実験ができなくなり出端を挫かれましたが、「新しい化学の創製」と「新しい医薬分子の創製」を目指して、研究室をより一層盛りあげてくれると期待しています。ま

た、今年は3名が大学院入試に臨みますが、院試休みの勉強の成果を試験にぶつけると約束してくれました。今年はコロナの影響で学会や研究室のイベントが殆ど中止となり、大学にも入れない辛い状況が続きました。このような状況下でも、Zoomを用いた遠隔での勉強会、研究報告会、飲み会など、研究室活動を止めないように工夫して参りました。まだまだ先の見えない状況が続きますが、今回確立した新しい研究室スタイルを継続し、コロナが終息した頃には卒業生の皆さまに会えることを楽しみにしています。



2020年3月19日 学位記授与式

統合生理学分野

当研究室では、「脳科学を基盤とする健康長寿」をメインテーマに掲げ、神経科学、生理学の知識を活かし、インビボ分子生理学を基盤に研究を推進しています。現在は、必須微量元素の亜鉛から見た脳の機能解析と病態解析を主軸に行っています。亜鉛イオンはシグナルファクターとして記憶の獲得・維持・想起に必要である一方で、過剰な細胞内亜鉛イオンは記憶障害の一因となります。アルツハイマー病の原因物質の一つとされるアミロイド β は、細胞外で亜鉛イオンと結合して凝集体を形成し、細胞内へ移行するため、細胞内で亜鉛イオンが過剰となります。また、活性酸素種や糖質コルチコイドも細胞外亜鉛イオンを過剰流入させ、それぞれ黒質ドパミン作動性神経変性による運動障害やストレス性記憶障害の一因となることを最近明らかにしました。アルツハイマー病、パーキンソン病等の脳疾患の予防・治療に神経細胞内亜鉛イオンの毒性制御がカギとなるとの視点から研究を進めています。疲労あるいは老化による神経内分泌系機能の乱れにも注目しています。

毎年、数名の学生が学会発表で優秀発表賞を受賞しています。昨年は、西尾隆祐さん（博士後期2年生・日本学術振興会特別研究員）、今春卒業した伊藤流星さん（6年生）、佐伯奈々さん（5年生）、所春奈さん（5年生）、

待寺りさ子さん（5年生）が受賞しました。国際学会では、インドネシアで開催された国際微量元素学会で学生4名が発表し、佐伯奈々さん（5年生）は「Student travel award」を受賞しました。佐伯さんは国内学会と国際学会のダブル受賞を達成しました。鈴木美希助教は今年1月よりニュージーランドのオタゴ大学に3ヶ月間留学しました。また、来年3月に武田厚司教授が定年退職されます。武田先生の退官祝賀会を2021年3月20日（土）に開催予定です（詳細は当研究室HPに掲載します）。尚、新型コロナウイルス感染拡大で中止となる場合があります。



2020年3月 学位記授与式

免疫微生物学分野

平成十年六月より本学に着任以来二十余年、教授として活躍された今井康之先生が令和二年三月をもちまして御定年退職の節目を迎えられました。今井先生の長年のご功労に敬意を表し、令和二年二月十五日（土）ホテルセンチュリー静岡にて定年退職記念祝賀会を開催しました。およそ百四十名のご来賓、大学関係者、研究室の同窓生にご列席賜りました。発起人代表の薬学部長、眞鍋敬先生のご挨拶で始まった祝賀会は、ご来賓や卒業生からご祝辞をいただき、今井先生のご挨拶まで盛会の内に終わりました。今井先生は本年度より副学長として引き続き本学の発展にご尽力されます。今後の益々のご活躍を祈念いたしております。尚、新型コロナウイルスの影響により、二月末に予定されていた最終講義が開催できず延期となっております。皆様には、改めて開催概要をお知らせいたします。

令和元年度は大学での学位記授与式が中止となった中、当研究室からは六名の学生が薬学科（6年制）を卒業しました。卒業生の皆さんのこれからの活躍を祈っています。

令和二年四月、梅本英司教授が大阪大学よりご着任されました。「生体環境を重視した免疫

学」をテーマに研究を進めて参ります。特に腸内細菌や食事などの環境因子に絶えず晒される腸管では、病原体を排除しつつ常在細菌に過剰に反応しないための独自の免疫制御機構が発達しています。当研究室では主に粘膜組織における免疫細胞の機能や、常在細菌や病原性細菌により産生される代謝分子が免疫系に与える影響を研究していきます。本会報に、梅本教授の着任挨拶が掲載されておりますので、是非そちらもご覧下さい。

これから新体制でさらなる発展を目指して精進して参りますので、同窓生の皆様には、ご指導ご鞭撻よろしく御願ひ申し上げます。



今井先生退職記念祝賀会

創薬探索センター

現代のがん治療を目的とした創薬では、新しい知識や仮説をもとにした分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬が開発、実用化されています。しかし、その福音は一部のがん種に限定されており、多くの未解決セグメントを残しています。当研究室は2004年に開設されて以来、静岡県ファルマバレーセンターや静岡県環境衛生科学研究所との連携のもと、国内研究機関や製薬企業と共同で、新しい抗がん剤シーズの探索研究を進めています。これまでに転写制御因子STAT3を標的とした新規抗がん剤候補物質の創出に成功し、欧米アジアなどで特許が登録されました。現在は国内製薬企業で臨床試験に向けた評価が進められています。さらに、従来の抗がん剤のようにがん細胞自体を攻撃するのではなく、生体にもともと備わる免疫細胞の力を利用して薬剤の開発を進めています。がんで高発現しているトリプトファン代謝に関わる酵素を標的としたユニークな化合物を複数発見しており、現在インシリコモデルを活用した構造最適化および細胞系や動物モデルでの詳細な解析を進めています。また、企業と共同で免疫系に作用するCOVID-19治療薬の研究にも取り組んでいます。当研究室では化学をベースにして、腫瘍学や免疫学について学生と共に学び理解を深めることにより、がんや感染症

のアカレス腫を狙った新薬シーズの研究開発に取り組んでいます。有効な治療法の確立されていない疾患で苦しむ方々の「HOPE & HELP」を目指します。

令和1年度は、博士1名、薬学科6年生2名が修了／卒業しました。現在彼らは製薬関連企業の研究職（積水メディカル）と品質管理職（中外製薬工業）、薬剤師（すずらん薬局）として活躍しています。卒業生の論文題目は以下の通りです。山根正敬（博）「三環性骨格を有する新規CYP2B6阻害化合物の作用機序解析」、三上由貴（薬学科）「ヒトPDI安定発現細胞の作製と阻害化合物探索への応用」、野中智陽（薬学科）「SBDによる新規IDO/TDO阻害化合物の構造活性相関研究」。



2019年12月21日 忘年会 静岡市内にて

薬学キャリアデザイン近藤寄附講座

当講座は、開所2年目を迎えました。今年4月1日に名称を「近藤記念静薬学友会寄附講座」から「薬学キャリアデザイン近藤寄附講座」に変更し、当講座の目指すところをよりわかりやすくしました。当講座のメインスタッフは木下俊也客員教授と南彰客員講師の二人です。

今年は、新型コロナウイルス感染症拡大という異常事態が発生したため、当初予定していた学生との対面授業はなく、全て遠隔形式のZoomを用いた講義になりました。昨年从今年にかけて当講座が担当した「薬学概論」では、各界で活躍する延べ20名の卒業生を講師として招聘し、講義を行っていただきました。製薬企業、化粧品企業、薬局、病院、薬事行政など異業種の卒業生による現状

の仕事内容、自らの体験談や生の声を聴いていただきました。学生からは、自分たちの将来像や目指すところがおぼろげながら、わかってきたとの感想を多くいただきました。

また、昨年の本学大学祭である創祭二日目に薬学部カレッジホールで行った



創祭二日目「進路相談会」の様子（2019年10月27日）

「卒業生による進路相談会」においても、各界で活躍している16名の卒業生を招聘し、学生にアドバイスしていただきました。来場した42名の学生からは「実際に働いている人の話が聴けてよかった。」卒業生からは、「学生と話すことができ大変刺激を受けた。」といった多くの声をいただきました。

昨年初めて実施した学生への学術研究支援（学会発表や短期留学等の旅費支援）では、学生からの応募が14件あり、実施委員会による審査の結果、8件の支援を行いました。今年は、新型コロナウイルス感染症拡大のため、学術研究支援を見送ることにしました。

今後も学生の刺激になるような講義や進路相談会、更に学術研究支援活動を実施してまいります。卒業生の皆様には今後とも変わらぬご支援をよろしくお願い致します。

科学英語分野

准教授 ホーク フィリップ (Philip Hawke)

As both the world of science and Japanese society are becoming more and more internationalized, English is increasingly needed both by Japanese pharmaceutical scientists to communicate their research to foreign colleagues, and by Japanese pharmacists to speak to foreign patients and customers. These trends were recognized by the University of Shizuoka in 2007 when it established the Scientific English Program to train science graduate students as part of the Global COE Program. The Program was integrated into the School of Pharmaceutical Sciences as the 科学英語分野 in 2012, when it began providing courses to undergraduate students as well. The Program is taught by me, Philip Hawke, a Canadian who has taught at the University of Shizuoka since 1998.

The Program teaches graduate students the practical English skills that they need to successfully communicate about their research. It offers courses in **Academic Presentations, Academic Writing, Scientific Manuscript Editing, Oral Communication, Small Group Discussion, and Independent Listening**. After taking the Program's courses, many students have presented their work at international conferences and published it in international journals, and some have worked abroad as post-doctoral fellows or now work for international drug companies.

The Program teaches undergraduate students more basic English skills related to science. The **Pharmaceutical Science English** course introduces third-year students to the English that they will need after entering laboratories in their fourth year, such reading scientific journal articles. Students also develop practical English for communicating with foreign patients and customers in hospitals and drug stores. In the English section of the **Scientific Practice I** course, first-year students have debates on scientific topics. In 2017, a new course called **Research Presentations in English** was introduced. The course gives 4th-, 5th-, and 6th-year students the opportunity to practice presenting their graduation research projects in English.

In recent years, an increasing number of foreign graduate students have been enrolling in the School, motivating faculty members to improve their own English skills. To help them do so, the Program offers weekly English Lunches for Science Faculty Members at a variety of skill levels. The Scientific English Program aims to help both students and faculty members to develop the English skills that they need to succeed as scientific research and Japanese society become increasingly internationalized.



Discussing research in Small Group Discussion class.

科学の発展や日本社会の国際化に伴って、日本の薬学研究者や薬剤師が外国人の研究者、患者、来店客と英語でコミュニケーションをとる必要性が増しています。こうした傾向を背景に、静岡県立大学で2007年にグローバルCOEプログラムの一環として科学系大学院生のためのScientific English Programが設立され、授業が行われてきました。2012年からは、このプログラムが薬学部の「科学英語分野」として統合され、同時に学部生に対しても授業が行われるようになりました。1998年より「科学英語分野」は私、カナダ出身のホークフィリップが担当しております。

大学院生を対象としたプログラムでは、研究について円滑なコミュニケーションを図ることを目的として、大学院生を対象に英語の実用的なスキルを磨くための授業を行っています。このコースではアカデミックプレゼンテーション、アカデミックライティング、科学原稿、オーラルコミュニケーション、スモールグループディスカッション、また自主的に行うリスニングなどのコースを提供しています。プログラム受講後は多くの学生が、国際会議での発表、国際学術雑誌への論文掲載、またポストドクターの一員として海外の大学で研究を行ったり、国際的な製薬会社に勤務するなど、多彩な経験を積んでいます。

学部生を対象としたプログラムでは、科学に関連した基礎的な英語を学ぶことができます。Pharmaceutical Science Englishでは学部3年生に対して、4年生になり研究室に配属されたのちに必要となる、科学に関連した英文記事を読むためのスキルを身につけるコースを用意しています。さらに学生は、病院や薬局で外国人の患者とのコミュニケーションを図るための実用的な英語を身につけます。Scientific Practice Iコースでは1年生が科学のトピックについて英語で討論を行っています。2017年にはResearch Presentations in Englishという新しいコースが設置され、4、5、6年生が卒業研究発表を英語で行う練習を行っています。

近年、海外から多くの大学院生が入学するようになり、教職員の英語スキルについても向上させる必要があります。その一助として、週に一度さまざまな英語レベルの科学系教職員が参加できるイングリッシュランチの機会を提供しています。科学英語プログラムは、学生、教職員双方が研究を成功させるため、また今後ますます国際化が進む日本で必要とされる英語のスキルを高めるための手助けをすることを目指しています。

薬学部教室名および教員一覧 (カッコ内は大学院薬学研究院)

薬学科			臨床薬学大講座									
生体機能薬学大講座			臨床薬剤学分野 (臨床薬剤学講座)		教授	賀川 義之						
生化学分野 (生化学講座)	教授	鈴木 隆			准教授	宮嵯 靖則						
	准教授	高橋 忠伸			講師	大澤 隆志						
	講師	南 彰			講師	内野 智信						
	助教	紅林 佑希										
衛生分子毒性学分野 (衛生分子毒性学講座)	教授	吉成 浩一	臨床薬効解析学分野 (臨床薬効解析学講座)		教授	伊藤 邦彦						
	講師	菅野 裕一朗			准教授	井上 和幸						
	助教	保坂 卓臣			講師	辻 大樹						
	助教	志津 怜太			講師	平井 啓太						
薬理学分野 (薬理学講座)	教授	石川 智久	医薬品情報解析学分野 (医薬品情報解析学講座)		教授	山田 浩						
	准教授	木村 俊秀			助教	古島 大資						
	講師	金子 雪子			実践薬学分野 (実践薬学講座)		教授	並木 徳之				
	助教	山口 桃生					准教授	内田 信也				
医薬生命化学分野 (医薬生命化学講座)	教授	浅井 知浩	講師	柏倉 康治								
	講師	小出 裕之	助教	田中 紫菜子								
	講師	米澤 正	薬局管理学分野 (臨床薬剤学講座)		助教	谷澤 康玄						
	助教	宋 復燃										
					薬科学科							
					創薬科学大講座							
身体運動科学分野	准教授	窪田 辰政	医薬品化学分野 (薬化学講座)		教授	眞鍋 敬						
科学英語分野	准教授	ホーク フィリップ (Philip HAWKE)			講師	岩本 憲人						
					講師	小西 英之						
					助教	山口 深雪						
分子薬学大講座												
生体機能分子分析学分野 (生体機能分子分析学講座)	教授	轟木 堅一郎	生命物理化学分野 (生命物理化学講座)		教授	橋本 博						
	准教授	水野 初			准教授	石川 吉伸						
	助教	杉山 栄二			講師	原 幸大						
医薬品製造化学分野 (医薬品製造化学講座)	教授	菅 敏幸			医薬品創製化学分野 (医薬品創製化学講座)		助教	菱木 麻美				
	准教授	吉村 文彦	教授	濱島 義隆								
	講師	稲井 誠	講師	江上 寛通								
	助教	大内 仁志	助教	山下 賢二								
生薬学分野 (生薬学講座)	教授	渡辺 賢二	生命薬科学大講座									
	講師	恒松 雄太										
	講師	佐藤 道大										
	助教	岸本 真治										
医療薬学大講座			免疫微生物学分野 (免疫微生物学講座)		教授	梅本 英司						
薬剤学分野 (薬剤学講座)	教授	尾上 誠良			講師	三宅 正紀						
	准教授	佐藤 秀行			講師	黒羽子 孝太						
創剤科学分野 (創剤工学講座)	教授	近藤 啓					助教	中西 勝宏				
	准教授	金沢 貴憲	大学院付属施設									
	助教	照喜名 孝之										
分子病態学分野 (分子病態学講座)	教授	森本 達也			創薬探索センター		教授	浅井 章良				
	講師	刀坂 泰史					准教授	澤田 潤一				
	助教	砂川 陽一	講師	小郷 尚久								
	助教	宮崎 雄輔	薬食研究推進センター				センター長・特任教授	山田 静雄				
					講師	伊藤 由彦						
生体情報分子解析学分野 (生体情報分子解析学講座)	教授	黒川 洵子			寄附講座							
	准教授	坂本 多穂							薬学キャリアデザイン近藤寄附講座		客員教授	木下 俊也
	講師	山崎 泰広	(客員)講師								(南 彰)	
	助教	山口 賢彦										

薬学部令和元年度成績優秀者賞・岩崎賞受賞

薬学科 成績優秀者賞

6年間の大学生活を振り返って、
そして近況報告

杏林堂薬局 山崎 美佳

(薬学科 生化学分野 令和2年卒)

この度は、令和元年度成績優秀者賞という大変光栄な賞を頂けたことを非常に光栄に思います。このような榮譽ある賞を頂けたのは、薬学の道を目指す決めた中学時代から私を支えてくれた家族、ご指導くださった先生方、共に高めあった友人たちのお陰だと思っています。家族には、慣れない一人暮らしを始めた矢先の頃、食事や日常の事など色々世話を掛けました。

大学入学後、6年間も精神面や生活のフォロー、金銭面と支えてくださり感謝でいっぱいです。大学生活は、多くの友人や先生方に恵まれて楽しい学生生活を送る事が出来ました。特に、4年生になり研究室に属してからは先生や先輩、後輩、同期との距離が近くなり研究の楽しさを教わりつつ充実した日々を送る事が出来ました。この3年間は、今の私の財産です。そして、今携わっている薬の多くは、日々の研究者の成果があって出来たということを改めて実感しています。大学生活の思

い出は、研究室での時間に凝縮されている感じです。

薬剤師として現場で働く事を希望していた私は、今春より薬局薬剤師として勤務する事が出来ました。勤務してまだ5ヶ月余なので研修座学の時間も多くありますが、日々新しい知識を身に付け、実際の現場で患者様の役に立てることに喜びを感じています。社会人として自覚しなくてはいけないという思いを常に持ち、日々の仕事に取り組んでいます。

社会人として歩き出したばかりですが、大学生活で学んだ協調性、積極性や人との和などを生かして日々勉強の毎日です。薬は、日々進化しているので一般用医薬品から医療用医薬品までの知識をより多く習得してお客様から患者様まで幅広く寄り添える対応ができる薬剤師を目指していきたいです。薬剤師として成長出来るようにこれからも努力していきたいと思っています。

薬科学科 成績優秀者賞



令和元年度成績優秀者賞の受賞について

博士前期課程1年 医薬品創製化学講座

田平 浩祐

(薬科学科 医薬品創製化学分野 令和2年卒)

この度は成績優秀者賞という名誉ある賞を頂き、大変光栄に思っております。一方で自分がこのような賞を頂けたことは自分の努力より、周囲の支えがあつてのことだと日々実感しております。とりわけ自分はまじめなわけではなく薬学と真摯に向き合っていたわけではございません。しかし同学年の仲間の多くは日々勉強に励み精進していたことから、自分もそれについていくような形で勉強を続けていました。座学は淡々とこなしていた一方で、実験が始まり、座学で学んだ事実と実験の結果が一致することに感動しました。過去の研究事実に基づき行う実習なので当然のことであると思いますがそれを発見した偉大な先人がいること、それを深化させていく研究者がいることを肌で感じました。この頃から自分の研究に対する期待が膨らみ4年制の薬科学科に進むことを決意しました。現在研究室にて最先端の有機合成化学を

行っていますが、正直なところ、うまくいかないことの連続に精神的に参ることも多い日々でございます。一方で学問を深めていっていることがわかり、新たな発見があると興奮する毎日であります。研究室の先生方は艱難辛苦を乗り越えて研究の最先端にて活躍されているので、自分の質問や苦悩に対しても親身になって指導してくれますし、先輩方も自分の疑問に的確な助言を与えてくれます。このような環境で研鑽していく毎日が楽しく、この生活に満足しております。そして最後に自分を育ててくれた両親に対してこの場を借りて感謝したいと思います。中学高校時代から問題児であった自分を成人した今でも支援していただき、毎日研究を行えていること、健康な状態で日々を過ごしていること、すべてに感謝しています。より一層努力して周囲の人々にこの恩を返せるような人間になりたいと思います。

薬学科 岩崎賞



令和元年度岩崎賞の受賞について

埼玉協同病院 井田 涼太
(薬学科 免疫微生物学分野 令和2年卒)

この度は大変名誉ある岩崎賞を賜り、非常に嬉しく思います。今回の受賞は温かくご指導いただいた先生方や共に学業に勉勵した友人、何より寛大な心で支えてくれた家族なくてはなり得ませんでした。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

私は現在、病院薬剤師として働いています。なぜ薬剤師になったのか考えてみると、そこには敬愛する兄の影響があります。中学生までの私の夢は大工、消防士、弁護士などコロナ禍変わりました。一方で兄は幼稚園の頃から医師を志しており、それを実現しました。幼い頃から明確な目標を持ち、首尾一貫して目標に向かう態度には感服するばかりです。この兄の存在と、高校時代化学に関心を抱いたことから医療、薬に興味を湧き、薬剤師を目指しました。職場として病院を選んだのは、兄と共通の話題を持ちたいという気持ちがあったのかもしれませんが、現に今、情報共有ができるのは視野が広がって

大変良いものです。

さて、近頃はニュースでコロナの文字を見ない日はありません。関連した話で、最近ではうがい薬の品薄がありました。日々様々な情報が飛び交っており、これには研究室配属当初の、実験成功を安易に喜んでいた自分では扇動されていたでしょう。研究室生活を通して、今では情報を自ら吟味し、それが信頼に足るものかを判断する力が身についたと感じます。他にも、研究室では否が応でも人と会話せねばならぬ環境に置かれるため、社交性が向上したと思います。かつてコミュニケーションと云われていた私が、今や上司から「コミュニケーションあるよね」と言われるのですから驚異的です。

最後に、私は本学で学びの楽しさを知れました。在学中の直向きさを今後とも忘れずにいたいのです。そして今回の受賞に慢心せず、岩崎賞の名に恥じぬよう薬剤師として自己研鑽してゆきます。

薬科学科 岩崎賞



大学院にて

博士前期課程1年 薬理学講座 渡邊 直也
(薬科学科 薬理学分野 令和2年卒)

この度は岩崎賞という栄誉ある賞をいただき、大変光栄に思います。自分一人だけの力ではここまでたどり着くことは決してできず、本賞を受賞できたのもこれまで支えてきてくれた友人や家族、多くの知識や助言をくださったたり相談に乗ってくださったりした先生や先輩方、ご支援いただいた後援会の方々のおかげであり、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

現在は、静岡県立大学を卒業度、同大学院へと進学し、学部時代より所属していました薬理学教室にて先生方のご指導のもと、日々研究室生活を送っています。これまでとは異なり、今年度からは後輩の指導も行わなくてはならない立場となり、これまで以上に気を引き締めて活動しています。研究活動においては、これまでの1年間さまざまな壁が立ちはだかり、なかなか良い結果を得られない日々が続いていました。しかし、うまくいかないことには

必ず原因があるはずなので、それを突き止めて工夫することで困難を乗り越え、新たな発見につなげていけるようにできればと思っています。そのためにも、これまで以上に幅広い知識を身につけ、物事を一方向からだけではなく、さまざまな方向から捉えられるように成長していきたいです。また、今後は学会への参加なども積極的にいき、自身の研究成果を発表できるような機会を増やし、他の研究グループなどとの繋がりを持つことでさらに研究の幅を広げていけたらと思います。

まだまだ私自身未熟な部分も多いですが、今回の受賞を励みにして、岩崎賞の名に恥じぬようにより一層勉学や研究に精進してまいります。学部時代も非常に充実した4年間でしたが、大学院での活動もさらに充実したものにして、研究者としても人としても大きく成長し、少しでも静岡県立大学や地域社会に貢献できれば幸いです。

最終講義のご案内

鈴木 隆 教授 (生化学分野)

武田 厚司 教授 (統合生理学分野)

並木 徳之 教授 (実践薬学分野)

静岡県立大学薬学部 鈴木 隆 先生、武田 厚司 先生、並木 徳之 先生 (五十音順) は令和3年3月末をもちまして、御定年退職の節目を迎えられることになりました。

つきましては、下記のように最終講義を行いますので、ご案内申し上げます。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

新型コロナウイルスの状況によっては、ウェブ開催とさせていただく場合があります。詳細は、静岡県立大学薬学部ホームページ (<https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/>) にてお知らせいたします。

◆最終講義

目 時：令和3年2月20日 (土曜日)

13:00~14:00 鈴木 隆 先生 最終講義

14:20~15:20 武田 厚司 先生 最終講義

15:40~16:40 並木 徳之 先生 最終講義

場 所：静岡県立大学薬学部棟講義室

◆パーティー

17:00~ 静岡県立大学学生ホールにて

◆主催

薬学部教授定年退職記念祝賀会事務局

発起人代表 薬学部長 眞鍋 敬

◆お問い合わせ

静岡県立大学 薬学部 生化学分野 高橋 忠伸

TEL 054-264-5722、Eメール takahasi@u-shizuoka-ken.ac.jp

静岡県立大学 薬学部 統合生理学分野 玉野 春南

TEL 054-264-5731、Eメール tamano@u-shizuoka-ken.ac.jp

静岡県立大学 薬学部 実践薬学分野 内田 信也

TEL 054-264-5234、Eメール uchidas@u-shizuoka-ken.ac.jp

令和元年度薬学生涯研修講座報告

薬・薬連携の在り方を考える

ー最新医療と地域連携の視点からー

社会医療法人駿甲会コミュニティホスピタル甲賀病院

医療技術部 部長 渡邊 学

(平成7年卒)

令和元年度薬学生涯研修講座が令和2年2月23日(日)、静岡県男女共同参画センターあざれあ2階大会議室にて行なわれました。折しもCOVID-19の国内発症報告が相次いでおり、静岡県内ではまだ報告は無い中ではありましたが、理事者間でも開催の是非について直前まで議論が行われておりました。アルコール消毒やマスク着用の徹底など、感染対策をしっかりと行うことで開催が可能と判断し、開催の運びとなりました。

今回の研修会では、病院薬局と調剤薬局との連携の在り方をテーマに開催しました。

講演1では、最新医療と薬剤師の関

わりの事
例として

「がんゲ
ノム医療
の提供体



竹野先生

制と病院薬剤師の役割」と題して、国立がん研究センター東病院の竹野美沙樹先生にご講演賜りました。がん遺伝子パネル検査は、標準治療が無い又は終了したがん患者さんを対象に、何らかの次の薬物療法を探索するために調べる検査や保険適用となつていく薬物療法の検討を行うことを目的に実施されます。がん専門薬剤師は、薬剤選定支援や投与計画設計支援、患者に対する説明など、がんゲノム医療の様々な場面で活躍をはじめている様子をご紹介いただきました。

講演2では、国立がん研究センター東病院と連携の深い柏市薬剤師会・のぞみの花クリニックスの餅原弘樹先生、

静岡県菊
川市で全
国的に知
られた地
域連携体



餅原先生



瀧先生



畑先生

制を構築・運用されている菊川市立総合病院の瀧祐介先生(平成12年卒)、宝

つーかー

の会等医
師会、薬
剤師会、
基幹病院

等の間で積極的な地域連携の取り組みを推進されている宝塚市薬剤師会・薬局ららくファーマシーの畑世剛先生

にご講演

を賜りま
した。ご
講演とそ
の後の質

疑応答などを通して、先生方からは、医療従事者間の患者の情報共有の重要性とその具体的な方法の提案、実践内容、また薬が患者に渡った後の管理を



薬にするための取り組みなど多岐に渡る課題に取り組んでいる様子をご紹介いただきました。



渡邊 学

高橋千恵子



本部だより

一般社団法人静薬学友会 平成31年度（令和元年度）第3回理事会報告

日時…令和元年10月19日（土）15:00～17:00

場所…静岡県立大学 はばたき棟3階 特別会議室

出席者…横倉輝男、高橋千恵子、鈴木隆、賀川義之、木下俊也、岩崎年史、植松正吾、浅井知浩、黒羽子孝太、清水広介、渡邊学、大木明代（以上理事）

（若林敬二、伊藤由彦（以上監事）

鈴木いずみ、望月めぐみ、浅川佳美（以上事務局）

欠席者…木苗直秀、近藤隆、安倍道治、秋山欣三、大石悦子、武田厚司、杉井邦好、関本征史、仲谷博明、池田雅彦、前田徹、内田信也、大澤勝一（以上理事）

（順不同、敬称略）

議事に先立ち、今回の理事会は10月12日（土）に開催される予定であったが、台風の影響により開催が不可能になり、本日に延期されたものであることが会長から報告された。

議題

【審議事項】

1. 学友会地区同窓会への支援金支給について

横倉会長より、地区同窓会への支援金額については基本額を2万円として、それに地区会員の年会費納入額の20%と研修会助成金を加えた額とすることが提案された。

地区同窓会への支援金について審議の通り了承された。

【報告事項】

1. 近藤基金の運用について

木下理事より報告があった。

短期留学・研修等の支援について

・薬学部学生および大学院生に対して、「近藤記念静薬学友会寄附講座による学生支援のお知らせ」のメール一斉配信を行い、これまでに約10件の応募があった。今後、学生支援事業実施委員会で最終決定する。

・リレーフォーライフ

・薬局や病院での実務実習を終えたばかりの5年生にリレーフォーライフへの参加を呼び掛けた。薬局や病院、製薬企業が参加しているので、この際、改めて人脈作りして欲しいとメール配信した。

2. リレーフォーライフ2019について

〔令和元年9月21日（土）県大で実施〕

若林監事より報告があった。

・今回より静薬学友会として参加した。ノートに記名してくれた方は23名であった。静薬学友会のオリジナルキャンパスポートバッグを500円で販売し10枚売り上げを寄付した。薬学部・薬剤師の参加をさらに増やしたい。

3. 令和元年度薬学生涯研修講座について

〔令和2年2月23日（日）あざれあで予定〕

横倉会長より説明があった。

・研修シールの配布にあたり今回は薬剤師番号を参加申し込みの段階で確認する予定である。

4. 静薬学友会報第87号発刊について

黒羽子理事より説明があった。

・87号発刊。広告を卒業生からいただいた。

伊藤監事より報告があった。

・郵便局が値上げしたため会報発送をクロネコヤマトに変更した。ただ、郵便局には転送のサービスがあるがヤマトには転送連絡サービスがないため、引越などされた方は連絡が欲しい。

一般社団法人静薬学友会 平成31年度（令和元年度）第4回理事会報告

日時…令和2年1月11日（土）17:00～18:30（理事会終了後新年会）

場所…中島屋グランドホテル 5階 日本料理 四季

出席者…横倉輝男、高橋千恵子、鈴木隆、安倍道治、秋山欣三、浅井知浩、岩崎年史、植松正吾、内田信也、大木明代、大澤勝一、木苗直秀、木下俊也、清水広介、関本征史、仲谷博明、前田徹（以上理事）

伊藤由彦、若林敬二（以上監事）
 鈴木いずみ、浅川佳美（以上事務局）
 欠席者…池田雅彦、大石悦子、賀川義之、黒羽子孝太、近藤隆、杉井邦好、
 武田厚司、渡邊学（以上理事）（順不同、敬称略）

理事会への理事の出席者は25名中17名で、定款第37条に基づき理事会は成立することが確認された。

議題

【審議事項】

1. 令和2年度事業計画、予算について
 配布資料に従って横倉会長より説明があった。
 ・全会一致で、令和2年度事業計画、予算が承認された。

2. 第2回静薬学友会賞選考について

- 浅井理事より説明があった。
- ・応募申請書類を精査した結果、第2回静薬学友会受賞者に宇野勝次（うのかつじ）氏、曾布川和則（そぶかわかずのり）氏を静薬学友会賞の候補者として決定した。
 - ・全会一致で、受賞者2名が承認された。

【報告事項】

1. 令和元年度薬学生涯研修講座 役割分担等について
2. 近藤基金の運用について
 - ・卒業生による進路相談会の実施
 剣祭期間中の令和元年10月27日にて、コラボレーターとともに卒業生を招いて実施した。42名が来場した。
 - ・学生支援事業（国内外の短期留学・研修等の支援）の実施
 令和元年12月11日に学生支援事業実施委員会を開催し、14件の応募のうち8件の支援を決定した。
 - ・近藤記念静薬学友会寄附講座の一般名称についての提案

3. その他

役員改選について
 横倉会長より説明があった。
 ・定款により令和2年6月7日に開催予定の総会にて理事としての2年の任期が一旦終わるため、継続して続けるようであれば次期理事への立候補の届出を提出願いたい。

一般社団法人静薬学友会 令和2年度第1回理事会報告

日時…令和2年5月23日（土）

コロナの収束の目途がたたないため、一堂に会する会合は取りやめ、電磁的方法により実施した。

出席者…理事25名中、22名より回答があったので、定款第37条により理事会は成立した。

秋山欣三、浅井知浩、安倍道治、池田雅彦、岩崎年史、植松正吾、
 内田信也、大石悦子、大木明代、大澤勝一、賀川義之、木苗直秀、
 木下俊也、黒羽子孝太、清水広介、杉井邦好、高橋千恵子、武田厚司、
 仲谷博明、前田徹、横倉輝男、渡邊学（以上理事）
 伊藤由彦、若林敬二（以上監事）

欠席者…近藤隆、鈴木隆、関本征史（以上理事）

（50音順 敬称略）

議題

【審議事項】

1. 平成31年度（令和元年度）事業報告
2. 平成31年度（令和元年度）決算報告
3. 令和2年度事業計画
4. 令和2年度収支予算

（注）審議事項の3、4については、令和2年1月の理事会で承認された内容を一部修正するもの。

【報告事項】

1. 役員（理事）の改選について
2. 薬学キャリアデザイン近藤寄附講座について

審議結果…

審議事項、報告事項とも回答のあった22名全員より承認するとの回答が得られたことにより、いずれも原案のとおり承認された。

一般社団法人静薬学友会第3回定時総会報告

日時…令和2年6月7日(日)

コロナの収束の目途がたたないため、一堂に会する会合は取りやめ、電磁的方法により実施した。

出席者…丹羽智紀、田中夏暉、宮国大介、齋藤和弘、安部友涼、水島教之、

三坂眞元、加藤彩香、佐藤泰士、関本征史、多田義孝、中村和重、

松浦大輔、本島玲子、勝山善彦、村松郁延、伊藤めぐみ、内田信也、

大木明代(理事兼任)、清水広介(理事兼任)、高橋忠伸、田中喜久夫、

深澤由紀子、渡邊学(理事兼任)、笠井智代、松崎雅英、三上栄一、

河本光宏、藤本司、松田通明、池田潔、中山大輔(以上代議員)

横倉輝男(代表理事)、安倍道治、鈴木隆、高橋千恵子、秋山欣三、

浅井知浩、池田雅彦、岩崎年史、植松正吾、内田信也、大石悦子、

大木明代、大澤勝一、賀川義之、木苗直秀、木下俊也、黒羽子孝太、

近藤隆、清水広介、杉井邦好、関本征史、武田厚司、仲谷博明、前田徹、

渡邊学(以上理事)

伊藤由彦、若林敬二(以上監事)

欠席者…五十嵐千乃、中村洸友、石原由美、綿野尚幸、井上泰秀(以上代議員)

(順不同、敬称略)

議題…

1. 【報告事項】

(1)平成31年度(令和元年度)事業報告

(2)薬学キャリアデザイン近藤寄附講座について

2. 【審議事項】

(1)令和元年度決算報告

(2)令和2年度事業計画

(3)令和2年度収支予算

(4)役員(理事)改選

3. その他

第2回静薬学友会賞授与

4. 審議事項の決議結果について

・審議事項(1)～(3)の承認について

定款第22条第1項に基づき審議を行った結果、代議員37名中書面での議決権行使を行った代議員は32名であり過半数の代議員の承認が得られたため得票は有効となった。また、32名中32名全員の承認が得られ決議は有効となった。議決権未行使は5名であった。

・審議事項(4) 役員(理事)選挙について

理事全員が定款の規定により本定時社員総会終結の時をもって任期満了となるため、定款第22条3項に基づき役員(理事)選挙が行われ、定員25名のうち、理事立候補者19名全員について、議決権行使を行った代議員32名のうち過半数の賛成票が得られたことおよび、これまで行われてきた理事改選の諸手続きについて審査の結果、田中喜久夫様(S59卒・代議員)を委員長とする選挙管理委員会の厳正なる審査を経て、全員が当選となった。

・役員(理事)当選者(被選任者) 19名は以下の通り

新任…岡野幸次、永吉翼、南彰

現職…秋山欣三、浅井知浩、安倍道治、岩崎年史、大木明代、大澤勝一、

賀川義之、木下俊也、黒羽子孝太、近藤隆、清水広介、鈴木隆、

高橋千恵子、仲谷博明、前田徹、渡邊学

(順不同、敬称略)

一般社団法人静薬学友会 令和2年度臨時理事会報告

日時…令和2年6月19日(金)

コロナの収束の目途がたたないため、一堂に会する会合は取りやめ、電磁的方法により実施した。

出席者…秋山欣三、浅井知浩、安倍道治、岩崎年史、大木明代、大澤勝一、

岡野幸次、賀川義之、木下俊也、黒羽子孝太、近藤隆、清水広介、

鈴木隆、高橋千恵子、仲谷博明、永吉翼、前田徹、南彰、渡邊学(以上

理事)

(50音順 敬称略)

理事19名中、19名全員より回答があつたので、定款第37条により理事会は成立した。

議長…鈴木隆（理事）

議題…

【審議事項】

正副会長の決定について

議長は、令和2年6月7日開催の定時社員総会において、理事の全員が任期満了により改選されたため、新たに会長（代表理事）及び副会長を選定する必要がある旨を述べ、その選定について議場に諮ったところ、慎重協議した結果、全員一致で左記の者の選定が可決確定した。

なお、被選定者はその就任を承諾した。

一般社団法人静薬学友会代表理事	会長	安倍 道治	卒業年次 昭和46年
一般社団法人静薬学友会理事	副会長	高橋千恵子	卒業年次 昭和51年
一般社団法人静薬学友会理事	副会長	賀川 義之	卒業年次 昭和58年

決算報告書

第 2 期

自 平成31年 4月 1日
至 令和2年 3月31日

一般社団法人 静葉学友会

静岡県静岡市駿河区谷田 5 2 番地 1

貸 借 対 照 表

一般社団法人 静葉学友会
全事業所

[税込] (単位: 円)
令和2年 3月31日 現在

《資産の部》		
【流動資産】		
(現金・預金)		
現 金	8,720	
普 通 預 金	41,602,177	
現金・預金 計	41,610,897	
(その他流動資産)		
仮 払 金	2,680	
その他流動資産 計	2,680	
流動資産合計	41,613,577	41,613,577
《負債の部》		
【流動負債】		
未 払 金	213,600	
未払法人税等	71,000	
流動負債合計	284,600	284,600
《正味財産の部》		
前期繰越正味財産	41,142,223	
当期正味財産増減額	186,754	
正味財産合計		41,328,977
負債及び正味財産合計		41,613,577

財 産 目 録

一般社団法人 静葉学友会

【税込】（単位：円）
令和2年 3月31日 現在

《資産の部》		
【流動資産】		
（現金・預金）		
現 金	8,720	
普通 預金	41,602,177	
静岡銀行 草薙支店	0934106	
郵便局 二三八	5637782	
清水銀行 美術館前	2192429	
郵便振替口座	(1,364,491)	
現金・預金 計	41,610,897	
（その他流動資産）		
仮 払 金	2,680	
その他流動資産 計	2,680	
流動資産合計	41,613,577	
《負債の部》		
		41,613,577
【流動負債】		
未 払 金	213,600	
未払法人税等	71,000	
流動負債合計		284,600
正味財産		41,328,977

正味財産増減計算書

一般社団法人 静葉学友会

【税込】（単位：円）
自 平成31年 4月 1日 至 令和2年 3月31日

一般会計		近藤基金	災害支援基金	総合計
【経常収益】				
【受取会費】				
正会員受取会費	4,074,000			4,074,000
受取入会金	5,600,000			5,600,000
【受取寄付金】				
受取寄付金	10,000			10,000
【その他収益】				
受取 利息	365		6	371
雑 収 益	140,000			140,000
経常収益 計	9,824,365	0	6	9,824,371
【経常費用】				
【事業費】				
広報名簿事業費	534,689			534,689
会報発行費	1,379,979			1,379,979
退官記念事業費	135,000			135,000
同期会援助費	100,000			100,000
大学行事援助費	566,986			566,986
生涯学習費	337,424			337,424
就職説明会参加費	55,926			55,926
表彰費	19,872			19,872
渉外費	129,060			129,060
会員支援活動費	805,390			805,390
会 議 費(事業)	0	3,000		3,000
旅費交通費(事業)	0	103,740		103,740
消耗品 費(事業)	131,220			131,220
事業費 計	4,195,546	106,740	0	4,302,286
【管理費】				
(人件費)				
給料 手当	3,325,220			3,325,220
法定福利費	9,004			9,004
人件費計	3,334,224	0	0	3,334,224
(その他経費)				
会 議 費	986,687			986,687
通信運搬費	87,896			87,896
消耗品 費	121,655			121,655
修 繕 費	173,573			173,573
水道光熱費	31,781			31,781
地代 家賃	3,690			3,690
支払手数料	524,825			524,825
その他経費計	1,930,107	0	0	1,930,107
管理費 計	5,264,331	0	0	5,264,331
経常費用 計	9,459,877	106,740	0	9,566,617
当期経常増減額	364,488	-106,740	6	257,754
【経常外収益】				
経常外収益 計	0	0	0	0
【経常外費用】				
経常外費用 計	0	0	0	0
税引前当期正味財産増減額	364,488	-106,740	6	257,754
法人税、住民税及Os事業税	71,000			71,000
当期正味財産増減額	293,488	-106,740	6	186,754
前期繰越正味財産額	5,504,922	35,000,000	637,301	41,142,223
次期繰越正味財産額	5,798,410	34,893,260	637,307	41,328,977

一般社団法人静薬学友会 代議員 (37名)

地区別50音順 敬称略

氏 名	卒業・修了年 (学生は学年)	地 区	氏 名	卒業・修了年 (学生は学年)	地 区
田中 夏暉	2年	学生	石原 由美	昭和57年	静岡県
五十嵐 千乃	3年	学生	内田 信也	平成5年	静岡県
宮国 大介	4年	学生	内田 貴啓	平成25年	静岡県
中村 洸友	博士前期課程	院生	大木 明代	昭和62年	静岡県
齋藤 和弘	博士前期課程	院生	清水 広介	平成13年	静岡県
丹羽 智紀	博士後期課程	院生	高橋 忠伸	平成11年	静岡県
安部 友涼	令和2年		田中 喜久夫	昭和59年	静岡県
水島 教之	昭和54年	北海道	深澤 由紀子	昭和59年	静岡県
三坂 眞元	平成16年	東北	渡邊 学	平成7年	静岡県
加藤 彩香	平成26年	関東	笠井 智代	平成18年	東海
佐藤 泰士	平成5年	関東	松崎 雅英	昭和60年	東海
関本 征史	平成8年修了	関東	三上 栄一	昭和49年	東海
多田 義孝	平成1年	関東	河本 光宏	昭和57年	関西
中村 和重	平成4年	関東	藤本 司	昭和63年	関西
松浦 大輔	平成1年	関東	松田 通明	平成2年	関西
本島 玲子	昭和58年	関東	池田 潔	昭和54年	中国
勝山 善彦	昭和57年	長野県	井上 泰秀	昭和59年	四国
村松 郁延	昭和44年	北陸	中山 大輔	平成8年	九州・沖縄
伊藤めぐみ	平成15年	静岡県			

一般社団法人静薬学友会 役員 (21名)

50音順 敬称略

氏 名	卒業年	役 職	氏 名	卒業年	役 職
秋山 欣三	昭和56年	理事	清水 広介	平成13年	理事
浅井 知浩	平成9年	理事	鈴木 隆	昭和54年	理事
安倍 道治	昭和46年	代表理事 会長	高橋 千恵子	昭和51年	理事 副会長
岩崎 年史	昭和46年	理事	仲谷 博明	昭和45年	理事
大木 明代	昭和62年	理事	永吉 翼	平成12年	理事
大澤 勝一	昭和59年	理事	前田 徹	昭和61年	理事
岡野 幸次	昭和57年	理事	南 彰	平成12年	理事
賀川 義之	昭和58年	理事 副会長	渡邊 学	平成7年	理事
木下 俊也	昭和53年	理事	伊藤 由彦	平成14年	監事
黒羽子 孝太	平成8年	理事	若林 敬二	昭和46年	監事
近藤 隆	昭和46年	理事			

集 記 編 後

一時期と比べれば減ったように思うが、ニュースを見ても新型コロナウイルスの話題ばかり。そして会報も新型コロナウイルスの特集。うんざりされるかも知れないが、お付き合いたい。もっとも、薬学出身者は騒動の渦中にいたはずで、一般の人たちとは違った視点でこのコロナ禍を眺めているに違いない。本号でコロナの話題を扱ったのは、新型コロナウイルス感染症に対して薬学出身者がどのように対応したのかを1つの冊子の中で記録しておきたいという思いが編集委員にはあったからである。同窓生がどのように考え、対応したのかこれらの記事には記載されている。薬学出身者の職場は多岐にわたるが、それぞれの場所での役割や活躍が語られている。

一方、テレビのニュースやワイドショーは：といった言説は疾うの昔に皆さん語られていたと思う。私にはこんなにテレビについていい加減だったかとの印象が強かった。新型コロナウイルスであるから、分らないことは分らないし、どこまで分かっているのか、その情報の確度は？というのが重要であることは、我々には当たり前かも知れない。しかし、でてくる情報のエビデンスの確実性やその意味について、吟味されていない報道が多く、知識を持たない人たちはその情報に踊らされる。その情報を知っていることが重要なのではなく、どう考えるかについての科学的立場が分かっていること、つまり、サイエンスリテラシーの重要性を痛切に感じた次第である。渡邊さんのも記事の中で書かれているが、地域の中で医療情報のコミュニケーションとしての役割を薬学出身者が果たすことは、感染の拡大防止やデマなどによる混乱を招かないためにも、より積極的にならないといけないかと思う。

このコロナ禍で一気に進んだ部分もある。インターネットを介した遠隔講義やwebミーティングの分野だ。いや、この分野の技術が進んだというよりも、我々のやる気の問題だったようにも思う。いわゆるギガ（通信容量のことです）や回線品質の問題が、YouTubeやNetflixといった動画配信サービスの一般化と共に解決されてきていた。つまり、インフラは整っていた。そこに否応なく遠隔講義やwebミーティングをしなければならぬ状況になり、一気に利用が進んだということだろう。一度使い出してしまえば、便利なものは使われ続けるだろうし、さらに改良されて効果的なものになっていくと思われる。先日、学友会の理事会も、Zoomを利用したweb会議で実施した。大学の講義も基本的に遠隔で行われている。学生の対応は非常に早かったと思う。さすがデジタル世代。後は、教員側のコンテンツのクオリティーの問題かなあ、と自戒を込めて書いておきたい。

この文章を書いている2020年9月中旬現在、新型コロナウイルスの新規感染者数は減少傾向でいわゆる第二波は収束に向かっているようである。この冬、再び感染者数が増加するかも知れない。しかし、我々人類の新型コロナウイルスに対する知見は、スペイン風邪の頃とは比べるべくもなく、多く早く世界中から集約できるようになっている。これまでの知見をフル活用して感染者数を抑え、さらには亡くなる方が1人でも少なくなるように努めていかなければならない。そして、次号の編集後記では新型コロナウイルスを過去の事として語れるようになって欲しいと切に願っている。

手を洗う会報編集委員 伊藤由彦（平成14年卒）

訃 報

次の方が逝去されました。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

中野 眞汎 様（臨床薬学分野前教授）

令和元年十一月十五日 逝去

富田 多嘉子 様

（元薬理学教室助教授・元生活健康科学研究科環境物質科学専攻教授）

令和二年四月四日 逝去

同期会延期のお知らせ

昭和34年卒幹事 安藤圭子

昭和34年卒同期会について、過日企画しました6月の同期会はコロナのために延期しました。詳しい次回の日時などは後日お知らせいたします。

会報担当

委員長

黒羽子孝太（平成8年卒 理事 薬学部 免疫微生物学分野）

浅井 知浩（平成9年卒 理事 薬学部 医薬生命化学分野）

大木 明代（昭和62年卒 理事）

南 彰（平成12年卒 理事 薬学部 生化学分野）

伊藤 由彦（平成14年卒 監事 薬学部 薬食研究推進センター）

安倍 道治（昭和46年卒 一般社団法人静薬学友会会長）

静薬学友会報 第88号 令和二年十月一日発行

〒422-8526 静岡市駿河区谷田五二一 静岡県立大学薬学部内

発行者 一般社団法人静薬学友会

振替口座 〇〇八二〇一八一九〇二二

TEL 〇五四―二六五―八七六三

FAX 〇五四―二六五―八七六九

メールアドレス shizuyak@u-shizuoka-ken.ac.jp

ホームページアドレス <http://shizuyaku.jp>

静薬学友会報への広告掲載について

平素は本会の活動にあたり格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。本会では会員約7,800名を対象に広報誌『静薬学友会報』を毎年発行し、今回で88号となります。

学友会報は、本会の発展と会員間の親睦および相互連携を目的に、学部の現状、支部および同窓会の活動を含めた様々な情報を提供してまいりました。

現在、すでに会員の皆様から広告を掲載していただき、作成費の一部として利用させていただいております。

今後も学友会報を通じて静薬学友会の一層の発展と充実を図るべく努力する所存であります。何卒、広告掲載へのご協力をよろしくお願い申し上げます。

広告掲載原稿募集要項

1. 媒体名称：静薬学友会報（10月1日発行）

2. 掲載資格：静薬学友会員

3. 広告の種類：一般広告

4. 発行部数：約8,000部（A4版）

5. 広告掲載料：

カラー掲載（募集件数：A4版2件）

単発掲載の場合

A4版 1ページ 80,000円（縦255mm, 横178mm）

A4版 1/2ページ 40,000円（縦127mm, 横178mm）

連続掲載の場合（2年以上連続掲載）

A4版 1ページ 70,000円（縦255mm, 横178mm）

A4版 1/2ページ 35,000円（縦127mm, 横178mm）

モノクロ掲載（募集件数：制限なし）

単発掲載の場合

A4版 1ページ 60,000円（縦255mm, 横178mm）

A4版 1/2ページ 30,000円（縦127mm, 横178mm）

連続掲載の場合（2年以上連続掲載）

A4版 1ページ 50,000円（縦255mm, 横178mm）

A4版 1/2ページ 25,000円（縦127mm, 横178mm）

6. 広告原稿の形態：ファイル、または紙焼き（校正は行いませんのでご了承ください）

7. 広告掲載申込先：〒422-8526 静岡市駿河区谷田52-1

静岡県立大学薬学部内 一般社団法人静薬学友会

代表者 会長 安倍 道治

電話 054-265-8763 FAX 054-265-8769（在室10:00～15:00）

8. 広告料振込先：銀行口座：静岡銀行 草薙支店 普通預金0277279

郵便振替：00820-8-19012 名義：一般社団法人静薬学友会

正会員の皆様へ 会費納入のお願い

静薬学友会の運営は皆様の貴重な年会費で賄っております。具体的には、静岡県立大学薬学部の実験研究に対する支援事業、会員の住所管理や HP の運営、生涯研修の実施など、多岐にわたる薬学の進展に寄与すべき同窓会活動に使用させていただいております。しかしながら、近年納入率が 20% 台にとどまっており、将来に向け安定した運営を確保するためにも、皆様のさらなるご理解、ご協力をお願いする次第です。本部としましては、一括納入可能な 10 年会費や終身会費をお勧めします。

1. クレジットカード決済

静薬学友会ホームページ (<http://shizuyaku.jp>) の「マイページ」(会費支払・各種お申込み) から納入いただけます

2. 郵便局から振込用紙を利用して納入

同封の振込用紙にて郵便局窓口および郵便 A T M から納入いただけます

※10 年会費および終身会費は、振込金額を二重線で訂正することにより郵便局窓口にて納入いただけます

3. コンビニエンスストアから振込用紙を利用して納入

同封の振込用紙にてコンビニエンスストアから年会費を納入いただけます(納入期限 令和 3 年 3 月 31 日)

4. モバイル決済

同封の振込用紙に印字されたバーコードおよび Q R コードにて、年会費を納入いただけます

(納入期限 令和 3 年 3 月 31 日)

料金収納用バーコードまたは、払込票余白に印刷された QR コードをスマートフォンで読み取り、決済画面にアクセスします。

		会費の種類		
		年会費 (2,000 円)	10 年会費 (20,000 円)	終身会費 (50,000 円)
納入方法	1. クレジットカード決済	○	○	○
	2. 郵便局	○	○	○
	3. コンビニエンスストア	○	×	×
	4. モバイル決済	○	×	×

ご不明な点等ございましたら、静薬学友会事務局までお問合せください

問合せ先：一般社団法人静薬学友会・事務局

TEL 054-265-8763

E-mail shizuyak@u-shizuoka-ken.ac.jp

昭和 62 (1987) 年卒	河村 美保花	廣中 亮治	海野 渉	澤谷 俊明	清水 晃介
赤松 泰子	喜好 昭彦	山下 和香子	千葉 健人	鈴木 美帆	白鳥 眞子
井口 潔	栗田 晃伸	平成 10 (1998) 年卒	保坂 卓臣	鈴木 祐介	末廣 直哉
井口 裕子	島田 和彦	熱海 晃子	茂木 大地	古谷 孝理	杉本 滯彦
岩田 尚美	榎葉 亜由美	井出 直仁	(博士) 林 哲男	増田 茜	鈴木 安希子
終身 大木 明代	鈴木 啓子	後藤 こま希	平成 19 (2007) 年卒	宮崎 雄輔	鈴木 匠
小田原 富士夫	終身 小田 麻衣子	田中 麻衣子	終身 世戸 孝樹	横田 将史	鈴木 結衣
金子 孝司	鈴木 登紀子	出羽 歩美	10 年 田中 紫菜子	平成 28 (2016) 年卒	鈴木 理絵
木村 正伸	住井 直美	終身 野寄 秀明	終身 鶴田 修	小内 智也	曾田 勇介
終身 児玉 直美	竹入 章	(修士) 林 秀樹	10 年 根建 悠希	佐藤 祥子	田部 美紗子
小林 俊子	谷本 倫子	平成 11 (1999) 年卒	野嶋 芳紀	終身 鶴田 聡志	玉置 宗麻
高田 真人	長尾 明美	栗田 拓朗	10 年 総崎 克哉	終身 福田 匡貴	多良 勇輝
野末 清美	終身 中村 和重	小林 由紀子	終身 和久田 浩一	(修士) 宋 復燃	陳 鴻杰
原田 喜充	終身 藤本 勝博	高橋 忠伸	渡邊 歩	平成 29 (2017) 年卒	堤 正人
松尾 紀子	増崎 詞子	深津 英人	(修士) 福山 知哲	上野 宏弥	徳丸 陽平
明神 昌代	望月 由木子	終身 福田 達也	(博士) 神戸 英芳	上原 尚也	戸倉 広貴
森本 生衣	平成 5 (1993) 年卒	横田 崇	平成 20 (2008) 年卒	近江 弘規	富嶋 勝夢
横田 仁恵	安部 紳一	平成 12 (2000) 年卒	終身 天野 祥吾	岡村 麻崎	永井 晶大
昭和 63 (1988) 年卒	10 年 阿部 庸江	10 年 石川 裕子	終身 内本 武亮	沖嶋 杏奈	長江 優吾
居出上 敬祐	植田 喜一郎	終身 板持 雅恵	終身 尾崎 園子	鹿子木 匡貴	長尾 亮佑
井上 千佳恵	内田 信也	大久保 努	木村 晋一郎	川崎 温子	中山 晴香
10 年 伊吹 裕子	大道 克裕	川瀬 亮介	10 年 佐藤 秀行	川野 拓歩	南雲 達
10 年 大城 雅章	小澤 紀子	菊池 保正	佐藤 紘彰	佐々木 康太	成田 一仁
小澤 久仁子	影山 知子	終身 関口 祐史	鈴木 早江子	進藤 卓弥	禾本 大樹
笠毛 浩彦	梶田 剛	高木 貴治	高倉 倬	鈴木 大貴	橋本 潮里
10 年 神谷 京子	佐藤 泰士	終身 長瀬 邦彦	高野 真弓	終身 曾根 早織	久永 達成
川瀬 一朗	高本 英治	10 年 永吉 翼	田野井 隆	園田 祐大	平井 勇祐
川瀬 直子	中村 光博	南 彰	10 年 藤原 理恵	高橋 爽	富士野 ひより
久門 弘子	中村 理子	平成 13 (2001) 年卒	渡部 草太	塚田 遼太	古川 哲也
国府 孝敬	終身 名和 秀起	岩坪 沙奈恵	終身 (博士) 今中 宏真	當波 諒	風崎 貴翔
中村 龍太	西村 慎也	金子 直樹	平成 21 (2009) 年卒	平野 樹	本多 大樹
藤本 司	畑 真太郎	終身 清水 広介	入江 こはる	藤岡 愛里	増田 航佑
堀田 博美	本多 達也	田川 真由	岩佐 陽介	堀田 亮	松本 貴宏
平成元 (1989) 年卒	(修士) 杉本 憲昭	田中 恵	宇都宮 崇広	前田 安佳里	三浦 知美
安藤 一郎	平成 6 (1994) 年卒	寺田 由香	大古田 真輝	終身 前田 久美子	三角 孔史郎
今津 佳子	終身 飯田 海保	福井 貴史	紅林 佑希	松尾 聖羅	村上 慧
大田 直樹	池谷 祐児	星野 有吾	椎野 甲斐	松本 亘平	村田 膳行
恩田 健	大城 まゆみ	山本 博之	森岡 直秀	森岡 洋貴	望月 成美
多田 義孝	大橋 綾美	吉田 梨沙	新庄 慧	山田 朋宏	森 智哉
長尾 美宏	河西 きよみ	若尾 晃一	鈴木 美希	横井 菜里	森田 華帆
兵庫 淳志	櫻井 幹也	終身 (修士) 勝又 孝	終身 中西 勝宏	(博士) 岩本 一徳	森廣 慎吾
松原 久雄	高井 奈美	平成 14 (2002) 年卒	山根 智大	平成 30 (2018) 年卒	八木 雄也
平成 2 (1990) 年卒	終身 富永 民雄	伊藤 由彦	綿野 尚幸	石川 揚子	柳澤 拓摩
伊野 充洋	西島 秀明	刀坂 美紀	平成 22 (2010) 年卒	大塚 和摩	藪田 亜沙美
北嶋 時世	菱田 順子	勝又 大介	大内 仁志	勝又 渉	山中 美絵
久保 美恵	檜山 章絵	二橋 智郎	高田 俊介	河淵 修平	横山 喬太
小島 房子	宮田 信吾	長谷部 ふみ	新谷 亮	鈴木 利昌	横山 葵
佐藤 哲	終身 山中 香弘	長谷部 文春	(修士) 青木 裕希子	終身 沼子 将大	(修士) 鈴木 彩香
佐藤 貴宏	渡邊 学	藤井 真一	平成 23 (2011) 年卒	増田 柊也	(博士) 高野 秀仁
白井 真紀	渡邊 佳子	村本 千尋	井出 和希	渡邊 敬介	(博士) ハルダーシムール
多田 志緒里	平成 7 (1995) 年卒	平成 15 (2003) 年卒	湖城 吉紀	(修士) 衣斐 遥	
田中 真寿美	内田 恵	伊藤 めぐみ	鈴木 寛人	(博士) 片山 剛	
林 勇	終身 川口 典子	稲垣 芳文	平成 24 (2012) 年卒	平成 31 (2019) 年卒	
平野 晃子	川崎 由紀	終身 大西 真央	鈴木 絵莉	青木 広樹	
松田 通明	小西 宏治	終身 清水 直美	坪井 詢香	秋浜 健人	
松丸 直美	鈴木 博子	10 年 正野 厚子	成島 悠太	天野 広之	
丸山 恭史	高橋 延空	終身 高久 修司	終身 矢吹 晴一郎	有賀 翔太	
望月 正栄	終身 清川 加織	10 年 中村 ほなみ	終身 (修士) 豊泉 樹一郎	池田 亮介	
平成 3 (1991) 年卒	羽岡 昌紀	林 豪士	平成 25 (2013) 年卒	和泉 大輝	
猪俣 千香子	水口 英明	平野 裕子	(修士) 石田 裕次	伊藤 謙汰	
川口 峰雄	終身 山本 裕一	益岡 尚由	終身 内田 貴啓	江田 宗司	
10 年 川嶋 実	10 年 横山 由斉	山岡 麻衣子	大滝 俊也	江間 千裕	
櫻井 孝司	吉田 友子	平成 16 (2004) 年卒	小跡 竜也	大嶽 瞳	
園田 祥司	渡邊 学	終身 岡崎 浩一	砂川 早絵	大谷 渚紗	
園田 寿寿	平成 8 (1996) 年卒	奥山 大輔	時任 正和	大月 祥子	
多田 明弘	終身 川合 真由美	小黒 聡史	長澤 孝真	大根田 直矢	
長野 敬	終身 黒羽子 孝太	神谷 昌代	藤山 裕児	岡田 千穂	
長野 有美子	終身 佐久間 文菅	米谷 節代	渡邊 雄一	菊地 祐希	
日比 貴子	中山 大輔	中川 武史	平成 26 (2014) 年卒	橋内 陽子	
松木 いつ子	村松 幸	終身 永吉 旭土	井上 祐希江	木庭 里佳	
終身 渡邊 哲史	(修士) 関本 征史	終身 (修士) 北尾 有樹子	岩崎 希	木村 悠希	
(修士) 福原 正博	平成 9 (1997) 年卒	(修士) 山村 香苗	上原 将士	源平 麻衣	
平成 4 (1992) 年卒	浅井 知浩	平成 17 (2005) 年卒	大浦 千鶴	三枝 香都貴	
池田 美保	石井 祐香	赤羽 純恵	終身 加藤 彩香	酒徳 航平	
岩崎 綾乃	終身 内田 恵子	高木 友里	高山 卓大	櫻井 ひとみ	
大川 知子	小林 正典	永谷 嘉章	田中 寛康	櫻井 理咲子	
大月 昭子	終身 佐久間 宏行	平井 啓太	成田 雄大	佐々木 孝彰	
10 年 尾形 和美	終身 佐藤 扶由子	増井 碧	終身 若宮 紀子	佐々木 華	
尾形 有規	関 由希子	村上 涼子	(博士) 柏倉 康治	佐藤 実季	
岡本 典子	終身 丹治 麻希	村田 敏拓	平成 27 (2015) 年卒	三分一所 静香	
川口 香苗子	中田 智雄	平成 18 (2006) 年卒	終身 小山内 崇人	椎葉 祐貴	
川口 健次	西澤 有夏	井上 直樹	桂 ゆき	島谷 良太	

令和 2 (2020) 年 3 月卒の皆さんの支払い済の会費は、令和 2 年度の会費に充当させていただきます。

昭和 46	谷山 忠義	柳川 英幸	10 年	川口 順子	杉崎 しのぶ	10 年	老田 明子	諸田 隆
	富坂 修	終身 矢野 千恵		河口 進次	杉山 富士江		岡田 宜彦	山口 典子
10 年	仲谷 博明	昭和 48 (1973) 年卒		河村 浄子	染谷 伸子		勝丸 由美子	(博士) 大軽 靖彦
	二宮 俊隆	安藤 知世		小池 洋子	高橋 由紀子		金森 久美子	昭和 58 (1983) 年卒
昭和 46	野田 幸男	10 年 伊藤 久男		小出 稔	滝口 清子		川嶋 宏美	石原 夕美
	法月 正善	牛川 務		小島 大二	竹之内 敏弘	終身	後藤 利宏	岡村 公子
昭和 46	橋本 茂	終身 大井 利夫		小杉 智子	10 年 土屋 益美	終身	後藤 美重子	終身 賀川 義之
	廣田 勇夫	大井 英男		小長井 晴美	戸塚 順子	10 年	小林 才世子	終身 鹿野 昇
昭和 46	堀内 淳司	大橋 洋次		佐倉 有紀	戸塚 実		佐藤 和裕	終身 高橋 秀明
	増田 恒夫	終身 大村 洋一		三瓶 由美子	中島 典子		佐橋 聖隆	塚本 理史
昭和 46	増田 義典	10 年 川原 利春		白鳥 和子	中島 美智子		篠塚 朋子	終身 那須田 好男
	望月 和子	北村 正孝		瀬戸山 亨	名倉 美恵子		杉井 邦好	終身 南部 佳代子
昭和 46	望月 利郎	網村 厚幸		高井 容子	橋爪 崇		鈴木 みどり	西田 慶子
	山崎 正敏	斉藤 喜孝		立松 克己	波多野 力	終身	高橋 俊博	服部 直美
昭和 46	山下 健二郎	酒井 博		西本 良子	10 年 牧野 栄一		竹中 裕行	服部 大
	横山 さと子	佐合 徳穂		野口 祐子	丸山 久美子		谷 重喜	終身 間中 友季子
昭和 46	和田 澄子	柴田 光子		野中 則孝	終身 柳原 幸子		内藤 弘	終身 本島 玲子
	(1971) 年卒	清水 みち子		横 裕子	山浦 久美子		内藤 縁	終身 吉里 貞範
10 年	青木 行雄	鈴木 信雄		松岡 芳幸	昭和 53 (1978) 年卒		牧野 法子	(修士) 加藤 善久
	安倍 恵子	鈴木 幸男		養内 徳蔵	井浦 教子		山下 瑞江	昭和 59 (1984) 年卒
10 年	安倍 道治	高井 優		村越 正典	石岡 政子		山田 雅和	芦川 裕子
	入江 俊夫	田中 豊	10 年	望月 雅史	岩本 明彦		結川 宏子	稲葉 厚弘
昭和 46	入江 洋子	中川 久司		湯沢 昌子	宇治田 文香	終身	渡辺 文孝	井上 泰秀
	岩崎 年史	鍋田 由美子		脇田 久美子	老田 達雄	(修士)	白瀧 美智子	岩川 ふさ枝
昭和 46	海野 忠市	服部 幸男	(修士)	鈴木 清	大田 邦生	昭和 56 (1981) 年卒		終身 海野 敬乃
	神谷 庸	馬場 克行	昭和 51 (1976) 年卒	赤坂 喜孝	岡田 澄子		秋山 欣三	大家 毅
昭和 46	木苗 恵子	平林 義雄		安横 宏美	荻野 浩一		石田 さとみ	大石 哲久
	国府田 寿郎	二見 真理子		石井 康子	瓦谷 秀治		石間 街子	終身 大石 美満
昭和 46	近藤 隆	前田 真悟		伊藤 あゆみ	10 年 木下 俊也		岩原 邦宏	大木 英嗣
	坂上 むつみ	松林 重幸		今井 公江	工藤 武施		内田 玲子	10 年 大澤 勝一
昭和 46	鈴木 正子	矢寄 高		今井 譲	栗田 祐子		北川 日佳子	片山 富彦
	中村 芳正	山下 清美	終身	海野 けい子	小出 弓枝		小池 弘子	黒澤 豊彦
昭和 46	二橋 純一	昭和 49 (1974) 年卒		小野 公江	佐藤 和彦		小林 浩幸	越田 晃
	野路 久仁子	飯沼 光壽		加藤 珠江	曾布川 和則	10 年	鈴木 直人	10 年 堺谷 研嗣
昭和 46	長谷川 良夫	石川 慎一		神谷 昌子	竹本 訓子	10 年	高木 由紀	阪田 美子
	廣田 孝之	石川 優子		川上 典子	千葉 良之		高松 美保子	終身 須賀 正美
昭和 46	前田 勝代	石倉 始		北島 裕子	辻本 喜則		立川 哲也	高橋 敏夫
	前田 利男	石原 幸子		小島 克子	久嶋 道広		立川 富子	田中 喜久夫
昭和 46	前田 稔	稲田 幸江		小井 郁子	藤井 きょうこ		土肥 佳史	10 年 長尾 康博
	松島 三重子	宇佐美 ふさ枝		五木 和代	堀江 久美子		中根 文重	野中 稔
昭和 46	味知 博泰	宇野 勝次		相良 美企子	前田 千賀子		西 千賀子	橋本 佳己
	望月 智子	大石 稔		塩川 敏江	山本 啓二		松下 保彦	深澤 由紀子
昭和 46	山岸 一美	太田 伊則		篠塚 和正	山本 裕美	10 年	丸山 徹也	古川 真郎
	山城 實子	北川 俊朗		島田 友子	昭和 54 (1979) 年卒	終身	本島 久也	堀之内 英樹
昭和 46	山田 静雄	小瀬 晶子		清水 明	安藤 公一		山下 和夫	森信 智子
	吉田 元	駒木 玲子		清水 志津	10 年 池田 潔		渡部 由紀子	矢島 ゆか
昭和 46	若林 敬二	佐藤 重一		杉山 和美	池田 しのぶ	10 年 (修士)	杉山 裕茂	山本 通代
	昭和 47 (1972) 年卒	佐藤 礼子		杉根 英市	池本 長司	昭和 57 (1982) 年卒	朝比奈 由和	吉田 千佳代
昭和 46	相坂 力	左中 ナチ子		芹澤 重男	市橋 透		有賀 美津子	和田 久仁恵
	秋山 岳士	篠田 礼子		高橋 嘉代子	海野 一美		石原 由美	渡辺 詩織
昭和 46	石川 雅章	杉山 清		高橋 千恵子	加藤 泉		石間 強	(修士) 渡辺 徹志
	稲葉 正治	鈴木 達始	10 年	武田 初実	菊地 勝		磯貝 光孝	昭和 60 (1985) 年卒
昭和 46	岩間 道政	高下 寛		立花 有美子	北村 俊夫		市川 晶子	10 年 秋山 晋一郎
	宇野 恵美子	竹内 和代		田村 敬子	桑原 尚子		今井 信行	阿出川 滋
昭和 46	大石 章	立松 瑞子		近森 由美	近藤 久美子		岩崎 順子	池田 雅彦
	大庭 茂樹	内藤 恵子		千葉 和美	坂井 節子		岩下 敦子	伊藤 治美
昭和 46	岡谷 栄三	仲野 慶子		千葉 直子	坂井 俊則		上田 春美	太田 昭二
	金田 恵美子	西園 憲郎		服部 隆夫	柴田 達夫		大島 勝	黒木 由香
昭和 46	川田 礼子	野瀬 和孝		服部 訓子	佐々木 敏郎		太田 正昭	終身 坂部 倫男
	河村 博	法月 壽美子		浜本 延哉	10 年 鈴木 隆		岡野 幸次	清水 千賀子
昭和 46	神戸 研一	服部 久美子		古谷 泰治	曾布川 美登理		乙田 ゆかり	終身 清水 宣秀
	神戸 三千子	深江 志津子		百瀬 佳寿子	高林 ふみ代		角田 真澄	砂川 京子
昭和 46	北村 洋子	増田 美保子		八木 怜子	八田 明		勝山 善彦	高橋 寿
	木下 俊子	松島 須美		矢寄 淳子	服部 宏明	終身	門脇 真	平野 千恵
昭和 46	小瀬 俊裕	松永 吉史		米山 美鈴	林 真人		河本 光宏	平野 智子
	坂本 忠勝	三上 栄一		涌澤 伸哉	平野 玲子		桐原 市博	松尾 憲一
昭和 46	坂元 洋一郎	宮 三保	10 年	堀田 まり子	星野 豊子		倉澤 由美子	松崎 雅英
	佐塚 純子	山田 玲子	終身	(1977) 年卒	堀田 豊子		小久保 宏恭	宮崎 多恵
昭和 46	鈴木 典子	山本 豊	昭和 52	浅原 圭子	牧田 智津子		下田 宗人	昭和 61 (1986) 年卒
	高橋 俊二	渡辺 和樹		市橋 純子	水島 久美		杉岡 典子	青山 一仁
昭和 46	田村 義男	渡辺 ちづ子		伊藤 茂子	水島 教之		田畑 尚子	阿出川 佳枝
	田村 りつ子	綿引 喜志郎		遠藤 哲也	宮城島 正枝		塚田 秀夫	海野 清美
昭和 46	寺田 愛子	(1975) 年卒		大石 真由美	村上 博子	10 年	永田 実	海野 孝之
	寺田 佳織	浅場 知恵子		大橋 光代	望月 都		名倉 基雄	久保 浩之
昭和 46	中村 共子	網蔵 雄三	10 年	生越 朋子	望屋 美保子		古橋 美佳子	小林 淳一
	橋本 好次	新井 昌彦		加鹿 玲子	山崎 芳枝		増澤 俊幸	近藤 浩史
昭和 46	広瀬 信長	石神 葉子		勝丸 清美	吉田 敬		松浦 智子	瀧澤 法子
	福田 陽子	石原 弘子		神谷 公子	吉田 昌史		松永 正之	塚田 佳夫
昭和 46	福田 陽子	井戸 康子	10 年	川辺 徳子	昭和 55 (1980) 年卒		松本 正敏	堀田 佳夫
	堀川 隆道	稲葉 良生		古西 清司	石川 和正		美濃部 淳子	野崎 洋子
昭和 46	真野 由里子	大塩 雪江		坂本 達一郎	岩堀 玲子		諸田 和子	原田 晴司
	茂龍 英晴	金森 麗子			梅垣 敬三			前田 徹

令和元年度(平成 31 年度) 会費納入者一覧 (敬称略)

終身：終身会費納入者

10 年：10 年会費納入者

(博士)：博士修了年

(修士)：修士修了年

昭和 20 (1945) 年卒	石田 佳子	尾崎 克子	松岡 千恵子	長沢 淑子	鷺巢 幸子
佐古 長子	伊庭 治子	角田 藤子	山本 俊子	中島 欣吾	渡辺 武明
三村 治子	右近 洋英	金子 暁子	吉岡 はま	永野 隆夫	昭和 43 (1968) 年卒
昭和 21 (1946) 年卒	大桑 滋之	金子 治郎	昭和 38 (1963) 年卒	本多 洋子	浅岡 公江
児玉 光子	太田 善三	小林 弘子	石島 弘明	増田 吉雄	雨宮 敏子
櫻井 菊子	太田 保	小林 富二男	上杉 史代	松浦 美恵子	岩崎 健一
昭和 23 (1948) 年卒	大坪 千恵子	篠崎 文秀	小栗 瑠璃子	宮本 靖夫	梅村 尚子
赤堀 美代子	小原 博光	杉山 豊美	開発 貞夫	村越 信義	大谷 淑郎
奥田 政子	片山 克彦	鈴木 澄雄	風間 舜介	山口 正代	大庭 均
木下 静代	小西 陸子	鈴木 千枝	川口 和子	山下 紘子	小笠原 純子
小竹 京子	小林 猛夫	鈴木 正子	小泉 恵子	山添 悦子	梶原 和恵
昭和 24 (1949) 年卒	三枝 好乃	百々 紗世子	五島 廉輔	横倉 輝男	川口 彰
久保田 田鶴子	塩谷 勝夫	鳥居 暁	小橋 洋子	昭和 41 (1966) 年卒	北原 功久
崎山 邦子	杉本 多喜子	中嶋 イチ子	志村 孝	阿部 千恵子	木俣 六司
米澤 宜子	鈴木 鈴子	中村 哲子	鈴木 清	池田 洋子	向後 勝成
昭和 25 (1950) 年卒	鈴木 健介	鍋谷 勤	砂本 勝	石川 いく子	斎藤 正子
安間 俊子	谷口 年男	林 正康	竹津 秀彦	稲垣 忠	酒井 伊佐子
川村 幸子	田村 重継	星 由利子	土屋 尚子	大場 浩	佐藤 美代子
西村 トシエ	辻本 美保	松永 義明	寺田 章男	岡本 雅子	立石 カヨ子
望月 摩利子	長崎 宏	溝口 謙吾	中川 淳	小木曾 喜子	辻 静子
渡辺 喜久代	中島 信子	山下 恒子	野口 英世	片岡 睦	中 公子
昭和 26 (1951) 年卒	中村 てる子	昭和 36 (1961) 年卒	野末 一茂	木下 孝夫	長岡 彰子
栗山 理子	中村 迪子	朝木 はる子	野呂 忠敬	金原 昌臣	永野 博正
小林 仁美	野呂 和子	大塚 信子	古畑 喜博	黒柳 公子	終身 仁科 美代子
昭和 28 (1953) 年卒	深津 昭	岡 鐵雄	森 元邦	斎藤 慎一	野沢 千鶴子
室伏 すみ子	福地 康浩	小堤 公子	吉田 信正	酒井 秀夫	深沢 伸之
山田 和子	風里谷 歌子	金井 修躬	渡辺 直則	清水 義允	藤井 武教
昭和 29 (1954) 年卒	古川 皐	河谷 浩子	昭和 39 (1964) 年卒	杉山 葉子	堀川 武
渥美 弘子	堀田 好	木下 幸子	新 邦夫	鈴木 宣子	本間 文夫
織田 武	前田 祐子	木村 良平	有光 とし子	関 健一	前田 文子
10 年 小野 郁夫	村井 晶子	斎藤 美奈子	飯塚 優規子	高橋 郁子	丸山 博三
瀬尾 弘子	村井 勉	斉藤 都	石原 さち子	瀧 孝雄	美崎 英生
武野 喜夫	吉田 佳子	佐藤 卓也	石原 庸男	田中 敏子	山上 寿子
寺井 和子	昭和 34 (1959) 年卒	佐藤 美也子	大伏 式生	田辺 智弘	山田 幸子
西川 佳代	安藤 圭子	飯島 千穂子	犬伏 三千代	谷澤 康子	終身 山本 武司
10 年 平野 信三	飯島 真弓	鈴木 勇夫	岩本 浩代	手塚 雅勝	(修士) 高山 修一
平林 和子	飯田 啓子	高木 操	小沢 敬子	中村 好志	昭和 44 (1969) 年卒
刈野 恒雄	池田 啓子	田中 正幸	開発 雅子	成田 愈尚	朝比奈 都志子
正木 ミツエ	石和 誠	中川 豊子	柿谷 芳宏	鎌谷 康雄	岩城 節子
10 年 増田 令子	伊藤 典子	仲道 述夫	角 重信	沼田 洋	植田 悦子
村上 敏子	伊藤 玲子	中村 阿丈	河原畑 二郎	野田 弘子	浮島 美之
山下 友子	遠藤 瑞子	西野 章	古坂 恭一	服部 徳子	大石 悦子
昭和 32 (1957) 年卒	大石 有二	古田 尚平	佐野 勝	味知 恵子	奥川 徹
青山 健一	太田 英子	堀井 大治郎	左納 通正	森田 俊夫	桐浴 静江
10 年 秋山 矩子	大嶽 英子	松永 純一	鈴木 次郎	山崎 悦孝	佐藤 しづ子
泉 安子	大村 二三夫	丸山 晃	高桑 幸子	山崎 悦孝	佐藤 正基
稻名 一枝	小野田 従子	丸山 利依子	山中 英男	古木 昭夫	鈴木 勝雄
梅村 隆久	影山 静夫	三宅 匡子	竹野 精治	渡邊 能子	馬場 宏行
太田 斐子	神谷 大三郎	山崎 宏子	田中 源治	昭和 42 (1967) 年卒	伴 晴江
開発 邦男	神田 礼子	山崎 雅江	田中 洋子	上西 明子	藤井 真
河西 健	菊田 幸子	山下 敏夫	辻 邦郎	内田 隆	水島 きく江
10 年 酒見 圭子	西郷 功	山本 擴	豊田 満	内田 文代	宮武 忠司
杉浦 暢	酒井 光江	矢満田 怜子	名倉 猛夫	興津 馨	村上 実
須崎 守康	田中 幹晃	渡辺 亜沙子	西澤 伸行	奥村 令子	村松 郁延
鈴木 康之	長倉 久美子	林 紀子	深沢 彰	小澤 久子	望月 笙子
辰己 好美	松下 倭文夫	昭和 37 (1962) 年卒	本田 貫十郎	小泉 听也	森本 正信
鳥山 明子	溝口 しづ	石井 漱一	三浦 勇二	後藤 正典	山本 栄子
中谷 貴美子	村上 圭子	奥田 允子	宮本 正紀	斉藤 紀恵	若尾 直司
野村 由紀子	村上 博達	亀井 興	八鍬 恭子	佐倉 直樹	(修士) 中島 勝明
林 貞子	村上 博彦	河村 信弘	吉野 敦子	佐藤 侑	昭和 45 (1970) 年卒
10 年 平野 昌子	望月 和美	工藤 弘子	昭和 40 (1965) 年卒	白橋 美智子	青木 興治
福岡 妙子	矢沢 光子	蔵本 和彦	秋山 喜彦	鈴木 紳一	荒木 恵一
増井 幸子	山口 修	桑原 伊玖子	足立 一彦	鈴木 孝子	有本 博雄
松岡 淑子	山本 昭野	小西 一宏	芹沢 嘉子	池田 正章	市尾 義昌
丸山 晶	吉田 薫子	近藤 静男	高田 トシ子	石原 廣男	伊藤 徳雄
三谷 倫一	昭和 35 (1960) 年卒	境達 貞夫	高柳 法康	岩村 晋	稲葉 藤子
森谷 甫美	有田 政彦	笹田 庸子	田村 八宏	大塚 坦造	内神 啓子
山内 丈	市中 洋子	佐藤 朝子	近松 房枝	奥村 淑恵	浦野 治明
10 年 山村 美智彦	上野 千枝子	白井 千恵子	土屋 久美子	角 淑子	小楠 和彦
依光 悦子	宇都 宗長	鈴木 智彦	長島 紀子	岸野 文治	小股 和裕
渡辺 規子	宇都 仁子	鈴木 光子	鎌谷 ミツル	岸野 文治	折田 和恵
昭和 33 (1958) 年卒	遠藤 伸江	大長 美穂子	長谷川 進彦	木苗 直秀	北脇 康子
青木 富佐	平良 武男	平良 武男	長谷川 米子	河野 悦子	金月 一夫
青山 仁	小川 高子	田中 恒夫	浜村 恵子	五島 綾子	久米澤 正樹
縣 貴江	奥村 太一	千葉 隆子	板東 智恵子	小西 みゆき	桑山 雅枝
			齋下 光宏	佐合 武	船山 和彦
			志村 洋子	高橋 圭子	前田 国昭
			谷澤 久之	望月 知嘉子	山本 敏博
			手塚 勇	山本 正枝	佐野 満昭
			中 寿美	若宮 忠弘	清家 功
				鷺巢 昭弘	高山 雅子

企業内薬剤師、管理栄養士募集！

「あなたの資格、活かしませんか？」

募集要項

応募資格 / 薬剤師・管理栄養士有資格者の方、年齢25～68歳まで
ブランクある方もO.Kです。

業務内容 / 健康食品・化粧品企画・開発・学術、
Webカタログの文章作成、製品説明

勤務地 / 当社事業所【富士・池袋・大阪・米国ロサンゼルス】

待遇等 / 年収400～600万、時給1,200～1,800円

三洋薬品HBC株式会社は、90年の歴史を有する配置薬事業、創業28年のテレホンマーケティング事業、創業20年のEコマース事業、米国・中国に4拠点を有する海外事業が集結し、健康・美容に関する製品、サービス、情報をオムニチャネル・マルチメディアでお届けし、お客様の健康・美容生活に貢献できるCSRの高い企業、そして2030年には創業100周年を迎え、更にグローバルに展開する年商100億円企業を目指しております。

又サプリメントアドバイザー、医薬品登録販売士の認定・研修の資格ビジネスも行っています。

代表取締役 近藤 隆（昭和46年 製薬科卒）

お問い合わせ先

TEL:0545-40-9000

三洋薬品HBC株式会社
総務課 近藤、内田まで

正社員・パート勤務
在宅勤務
(クラウドワークス)等
応相談



お客様のご要望にすばやくご対応するため、
三洋薬品HBC株式会社のネットワークを活かし、
全国40箇所の拠点に営業所を展開しています。



静薬学友会ホームページをご活用ください

静薬学友会ではホームページを通して会員の皆様にさまざまなご案内をしています。
会員の皆様、ぜひホームページをご覧ください、ご活用ください。



静薬学友会ホームページアドレス <http://shizuyaku.jp>

☆掲載記事☆

薬学講座のご案内、同期会のお知らせ、求人情報、静薬学友会の活動、母校の活動などをご案内しています。

☆マイページ☆ 【会員専用ページ】 ログインには会員ID/パスワードが必要です。

1. 静薬学友会に登録しているご自身の情報を確認、修正できます。
2. 同窓生の連絡先などを知ることができます。
3. 年会費の納入がクレジット払いで行えます。
4. 静薬学友会主催（または共催）の薬学講演会や各種会合への参加登録が簡単に行えます。

※掲載してほしい記事がある、求人情報を載せたい、そういった方は事務局までお問い合わせください。

※メールアドレスをお持ちの方はぜひアドレスを静薬学友会にご登録ください。同窓会、同門会、支部会、講演会等各種情報のご案内をお送りいたします。

問い合わせ先
一般社団法人静薬学友会

〒422-8526 静岡市駿河区谷田52-1 静岡県立大学薬学部内
TEL 054-265-8763 FAX 054-265-8769
(10:00～15:00以外は留守番電話での対応とさせていただきます)
Eメール shizuyak@u-shizuoka-ken.ac.jp <http://shizuyaku.jp>